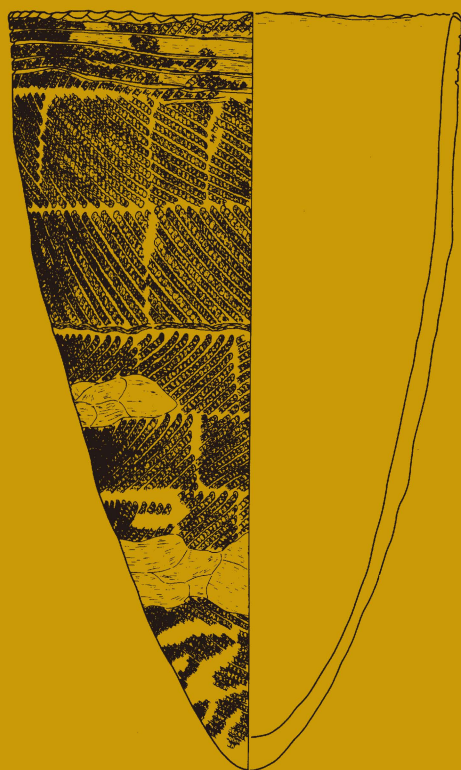


青森県埋蔵文化財調査報告書第72集

# 鴨平(1)遺跡



昭和57年度

青森県教育委員会

青森県埋蔵文化財調査報告書第72集

1983

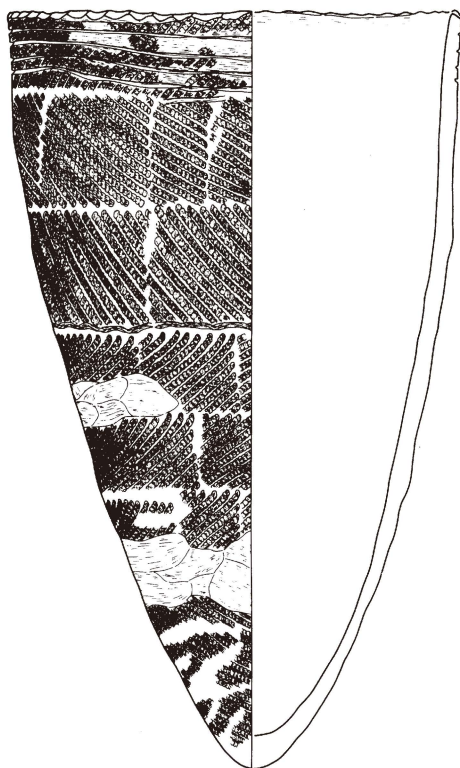
鴨平(1)遺跡正誤表

頁	行	誤				正			
72	19	P-11 区区				P-11 区			
72	23	縄文時代前期の土器				縄文時代前期の土器(第20回)			
85	14	(retouched flace)				(retouched flake)			
117	表	48	3	1		48	9	1	
118	表	54	3	50	むつ小川原	54	3	50	むつ小川原港埋蔵文化財発掘事前調査報告書
119	表	56	3	63	…(八戸平原関係)	56	3	63	(むつ小川原関係)
119	表	56	3	64	…(むつ小川原関係)	56	3	64	(八戸平原関係)



青森県埋蔵文化財調査報告書第72集

# 鴨平(1)遺跡



昭和57年度

青森県教育委員会



## 序

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線の建設に伴い、路線内に所在する鴨平(1)遺跡の記録保存のため、発掘調査を実施し、その結果をまとめたものであります。

本調査で、縄文時代早期の土器や多くの遺構が発見されましたが、特に早期の土器は、この時期のものとしては初めて復原できたものであり大きな成果を収めました。

本報告書が、今後、埋蔵文化財の保護と研究にいささかでも役立てば幸いと思います。

ここに、調査の実施及び本報告書の作成にあたって、種々御協力、御指導をいただいた調査員をはじめ、関係各位に厚くお礼を申し上げます。

昭和58年 3 月

青森県教育委員会

教育長 ニッ森 重 志



## 例 言

- 1 本報告書は、昭和56年度に実施した東北縦貫自動車道八戸線建設に係る八戸市大字是川及び三戸郡南郷村大字泥障作に所在する鴨平(1)遺跡の発掘調査報告である。
- 2 執筆者名は、依頼原稿については文頭に、他は文末に付した。
- 3 遺構の番号は、確認順に付した。遺構の記載は、種類ごとに番号順としたが、欠番もある。
- 4 掲載した地図類は、日本道路公団、八戸市、南郷村から提供されたものを使用した。
- 5 実測図等の縮尺は、それぞれスケールを付してある。写真図版の縮尺は、統一していない。
- 6 石材の種類鑑定は、青森県八戸高等学校教諭 松山力氏に依頼した。
- 7 発掘調査並びに本報告書の作成にあたって、次の諸氏から御教示、御配慮を賜った(敬称略、順不同)。近藤義郎、渡辺 誠、石岡憲雄、栗村知弘、市川金丸、工藤竹久、名久井文明、佐々木達夫、藤沼邦彦、小井川和夫、本堂寿一、葛西 励、野村 崇、小笠原好彦、上野佳也、藤村東男、江坂輝弥、林 謙作、半田昌之、宇田川洋、嶋 千秋、石本省三、富樫泰時、沢 四郎、大沼忠春、武田良夫、相原淳一、土岐山武、目黒吉明、芳賀英一、馬目淳一、中村五郎、原川雄二。
- 8 引用、参考文献は巻末に、注は文末に記し、青森県教育委員会で刊行した埋蔵文化財関係報告書は巻末に一覧表で、また、本文中で引用した場合は、報告書の刊行番号、遺跡名、西暦年を記載した。
- 9 文献の書名、誌名、発行所名などで、省略しても理解出来るものは簡略化した。

# 目 次

序	2	溝状ピット	42
例 言	3	円形・フラスコ状ピット	51
はしがき	4	小土壌	54
1 調査に至る経過	1	遺構外出土の遺物	67
2 調査要項	1	1 土 器	68
遺跡の概観	4	(1) 縄文時代早期の土器	68
1 遺跡の立地と周辺の地質	4	(2) 縄文時代前期の土器	72
2 周辺の遺跡	12	(3) 縄文時代後・晩期の土器	73
調査の概要	34	2 土製品	84
1 調査の概要	34	3 石 器	85
2 調査方法	34	4 その他の遺物	89
3 調査経過	39	考察とまとめ	94
4 遺跡の基本土層	40	参考・引用文献	113
検出遺構と遺物	42	青森県教育委員会埋蔵文化財関係	
1 概 要	42	刊行物一覧表	117

## 挿 図 目 次

第1図 鴨平(1)遺跡位置図	3	第17図 鴨平(1)遺跡遺物分布図	63
第2図 鴨平(1)遺跡周辺の地形分類図	5	第18図 第 層土器出土状態	69
第3図 鴨平(1)遺跡周辺の遺跡分布図	13	第19図 縄文・早期の土器(第 層)	71
第4図 鴨平(1)遺跡地形図	35	第20図 縄文・早期の土器(第 層)	
第5図 鴨平(1)遺跡調査地区の土層	41	前期の土器	73
第6図 鴨平(1)遺跡遺構分布、基本土層		第21図 縄文・後・晩期土器実測拓影図	74
実測位置図	43	第22図 縄文・晩期土器実測拓影図	75
第7図 第1, 3, 6号遺構実測図	48	第23図 縄文土器拓影図(1)	76
第8図 第7, 8, 23号遺構実測図	49	第24図 縄文土器拓影図(2)	77
第9図 第24号遺構実測図	50	第25図 縄文土器拓影図(3)	78
第10図 第4, 5号遺構実測図	52	第26図 縄文土器拓影図(4)	79
第11図 第18, 27号遺構実測図	53	第27図 縄文土器実測拓影図	80
第12図 第2, 9, 10号遺構実測図	55	第28図 土製品実測図	85
第13図 第12, 13, 15~17号遺構実測図	57	第29図 石器実測図(1)	87
第14図 第19~22号遺構実測図	59	第30図 石器実測図(2)	88
第15図 第26, 28, 34, 35号遺構実測図	60	第31図 歴史時代土器拓影図	89
第16図 遺構出土土器拓影図	62	第32図 古銭拓影図	90



第33図	きせる, かんざし実測図	92	第35図	円形・おとし穴状遺構実測図	104
第34図	鴨平(1)遺跡溝状ピット 長軸方向傾度図	99	第36図	鴨平(1)遺跡小土壇規模相関図	107
			第37図	鴨平(1)遺跡小土壇長軸方向傾度図	107

## 表 目 次

第1表	地質層序表	7	第12表	縄文土器観察表(2)	82
第2表	八戸火山灰層序表	8	第13表	縄文土器観察表(3)	83
第3表	黒色土層層序表	9	第14表	縄文土器観察表(4)	84
第4表	十和田火山完新世火山灰編年表	10	第15表	石器計測表	86
第5表	周辺の遺跡地名表	17	第16表	古銭観察表	89
第6表	鴨平(1)遺跡溝状ピット計測表	50	第17表	鴨平(1)遺跡溝状ピット計測表	96
第7表	鴨平(1)遺跡円形・フラスコ状ピット 計測表	54	第18表	青森県溝状ピット出土遺跡一覧表	97
第8表	鴨平(1)遺跡小土壇計測表	61	第19表	鴨平(1)遺跡円形・フラスコ状ピット 計測表	102
第9表	遺構出土土器観察表	62	第20表	おとし穴状遺構計測表	103
第10表	鴨平(1)遺跡遺構外出土遺物集計表	67	第21表	鴨平(1)遺跡小土壇計測表	106
第11表	縄文土器観察表(1)	81			

## 写真図版目次

図版1	鴨平(1)遺跡近景	123	図版16	円形・フラスコ状ピット(2)	138
図版2	鴨平(1)遺跡A地区の調査	124	図版17	円形・フラスコ状ピット(3)	139
図版3	鴨平(1)遺跡B・C地区の調査	125	図版18	円形・フラスコ状ピット(4)	140
図版4	鴨平(1)遺跡A・C地区基本土層	126	図版19	円形・フラスコ状ピット(5)	141
図版5	鴨平(1)遺跡基本土層	127	図版20	小土壇(1)	142
図版6	鴨平(1)遺跡基本土層	128	図版21	小土壇(2)	143
図版7	鴨平(1)遺跡基本土層堆積状況	129	図版22	小土壇(3)	144
図版8	鴨平(1)遺跡遺物出土状況	130	図版23	小土壇(4)	145
図版9	鴨平(1)遺跡遺物出土状況	131	図版24	小土壇(5)	146
図版10	溝状ピット(1)	132	図版25	小土壇(6)	147
図版11	溝状ピット(2)	133	図版26	小土壇(7)	148
図版12	溝状ピット(3)	134	図版27	小土壇(8)	149
図版13	溝状ピット(4)	135	図版28	小土壇(9)	150
図版14	溝状ピット(5)	136	図版29	小土壇(10)	151
図版15	溝状ピット(6), 円形・フラスコ状 ピット(1)	137	図版30	小土壇(11)	152
			図版31	小土壇(12)	153

図版32	小土壇(13)	154	図版40	縄文時代後・晩期の土器(1)	162
図版33	小土壇(14)	155	図版41	縄文時代後・晩期の土器(2)	163
図版34	小土壇(15)	156	図版42	縄文時代後・晩期の土器(3)	164
図版35	小土壇(16)	157	図版43	縄文時代後・晩期の土器, 土製品	165
図版36	形状不詳ピット	158	図版44	石器(1)	166
図版37	風倒木痕と獣骨の出土状況	159	図版45	石器(2)	167
図版38	縄文時代早期の土器(第層)	160	図版46	歴史時代の遺物	168
図版39	縄文時代早・前期の土器	161			

# はしがき

## 1 調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線建設予定路線は、昭和45年6月に基本計画が策定され、昭和52年9月、その実施計画の認可が下り、同時に青森県と岩手県内の路線ルートが発表された。総延長41.88kmの路線のうち、県内ルート分は14.28kmである。青森県教育委員会では、日本道路公団の依頼により昭和53年4月と11月の二度にわたって、県内建設予定路線内の遺跡分布調査を実施したところ、周知の遺跡（右エ門次郎窪、葦窪）以外に、12か所の遺跡と思われるか所が認められた（161,230m<sup>2</sup>）。その後、今後の調査等について両者が協議し周知の遺跡以外の12か所は試掘調査を行なって、埋蔵文化財包蔵地（遺跡）か否かを決定することとなった。そこで県教育委員会では、昭和54年9～10月にわたり、その12か所の試掘対象地区のうち本遺跡を含む6か所について試掘調査を実施した結果、2か所（No. 1, 10）が除外され、最終的には12か所が発掘調査対象遺跡となった。また、これらの遺跡は番号で呼称していたが、小字名からとった遺跡名に変更した。

昭和54年10月、日本道路公団から5遺跡の発掘調査の依頼があり、翌昭和55年4月からその調査を実施した。引き続き、本遺跡をはじめ、鴨平(2)、昼巻沢、長者森、白山平(2)の5遺跡の発掘調査依頼があったので、昭和56年度にその調査を実施することになった。

本遺跡を発掘調査することになったのは、昭和54年の試掘調査の際、南郷分（発掘調査のA地区付近）の第層から、尖底土器片が出土したことによるものである。なお、昭和57年3月には、昭和55年度に調査した5遺跡の発掘調査報告書『馬場瀬(1)(2)遺跡』、『右エ門次郎窪・三合山・石ノ窪遺跡』（県埋文第69, 70集：1982）が刊行されている。（北林）

## 2 調査要項

### (1) 調査目的

東北縦貫自動車道八戸線建設の工事着工に先立ち、当該路線に所在する遺跡の発掘調査を行い、その記録保存をはかり、地域社会の文化財活用に資する。

### (2) 遺跡名，所在地

鴨平(1)遺跡 青森県八戸市大字是川字鴨平3 - 3, 3 - 4ほか。

青森県三戸郡南郷村大字泥障作字金引沢13 - 6ほか。

### (3) 調査期間，調査対象面積

昭和56年4月23日～同年10月31日 12,800m<sup>2</sup>

### (4) 調査委託者

日本道路公団仙台建設局

(5) 調査受託者

青森県教育委員会

(6) 調査担当機関

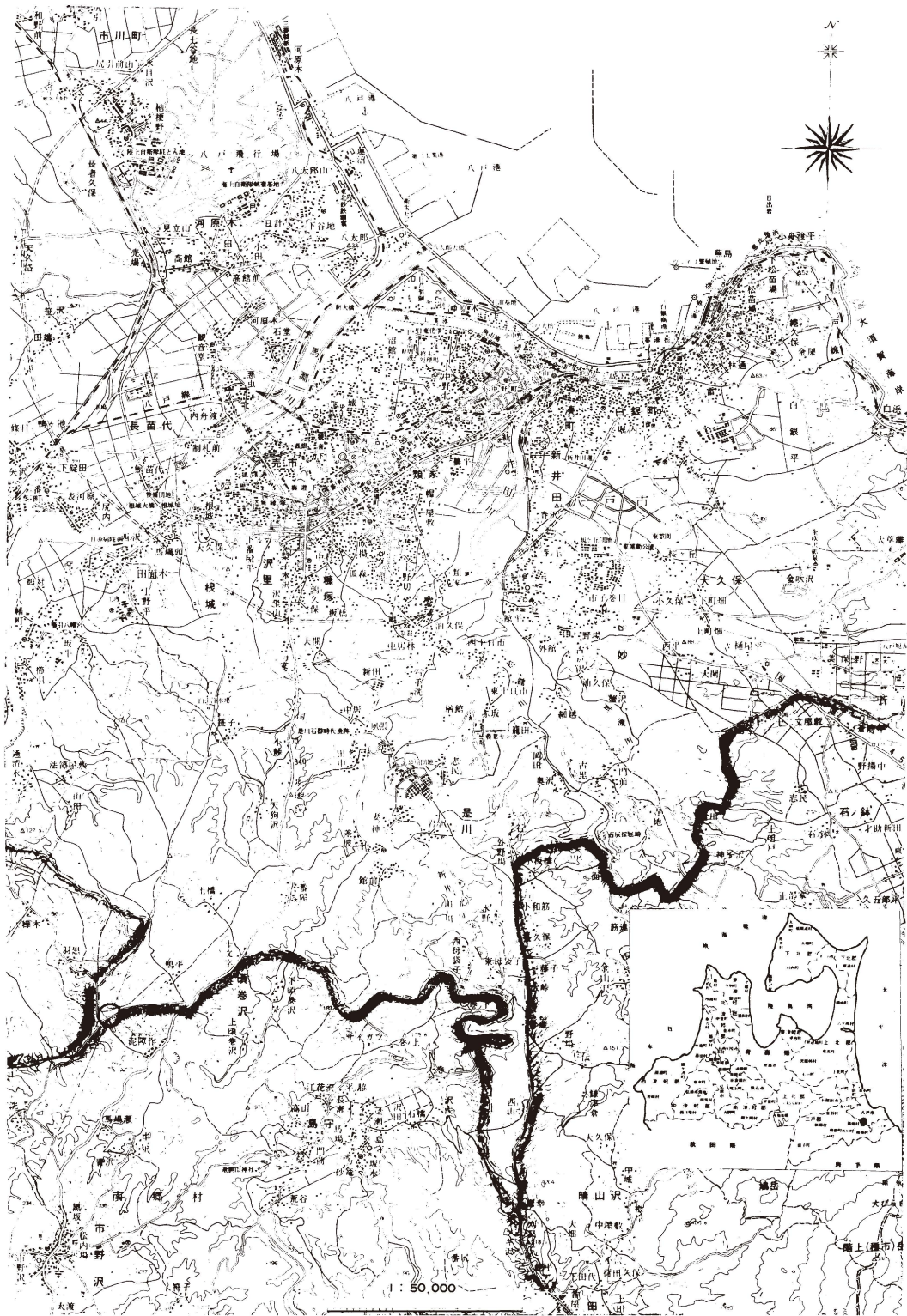
青森県埋蔵文化財調査センター

(7) 調査関係協力機関

八戸市，八戸市教育委員会，南郷村役場，南郷村教育委員会

(8) 調査参加者

調査指導員	小井田幸哉	青森県文化財保護審議会委員
"	村越 潔	弘前大学教育学部教授，青森県文化財保護審議会委員
調査協力員	吉田月二郎	(前八戸市教育委員会教育長)
"	岩谷喜代美	八戸市教育委員会教育長
"	岩織 文弥	南郷村教育委員会教育長
"	村上 四郎	南郷村文化財審議委員
調査員	松山 力	青森県立八戸高等学校教諭
"	滝沢 幸長	光星学院高等学校教諭 (現同校開発局新聞部編集長)
調査補助員	工藤 均，中谷 和夫，浅利 哲世，神 真澄	
	青森県埋蔵文化財調査センター	
所長	工藤 泰典	(昭和57年4月1日から)
前所長	北山峰一郎	(現県立郷土館副館長)
次長	古井 睦夫	
総務課長	森内 四郎	(昭和57年4月1日から)
調査第三課長	工藤 泰博	
主任主査	高谷 重彰	(現県立郷土館総務課主管)
主査	北林八洲晴	(調査担当者)
"	成田 静男	
主事	工藤 大	(調査担当者)
"	藤川 正紀	
臨時職員	米沢 真一	(現調査補助員)



第1図 鴨平(1)遺跡位置図 (○●印)



## 遺跡の概観

### 1 遺跡の立地と周辺の地質

松山 力

#### (1) 鴨平(1)遺跡周辺地域の地形

東北自動車道八戸線の予定路線及び関連開発予定地のうち、八戸市内のおよそ7.5km区間には、南から鴨平(1)、鴨平(2)、昼巻沢、葎窪、長者森、白山平(2)、牛ヶ沢(3)、鶉窪などの諸遺跡がほぼ南北方向に連なっている。

青森県南東部のうち、馬淵川～名久井岳東麓～岩手県境～階上岳西麓から北麓～太平洋岸に囲まれた東西約25km、南北約20kmの地域は、川沿いや海岸沿いの平坦面がよく残された中、低位の段丘、それより高くゆるやかに起伏する丘陵地(高位段丘)、河川の谷壁などの急斜面や急崖及び海岸や河谷底の低平な沖積地で構成されている。

この地域は、岩手県軽米町を通りぬけ、北々東方の八戸湾に流れ下る新井田川によって2分されている。名久井岳東麓線～馬淵川と新井田川にはさまれた地域は、岩手県北の折爪岳山塊北部東側山麓から、北々東の八戸湾に向かって、紡錘状にはりだす丘陵・段丘群となっている。

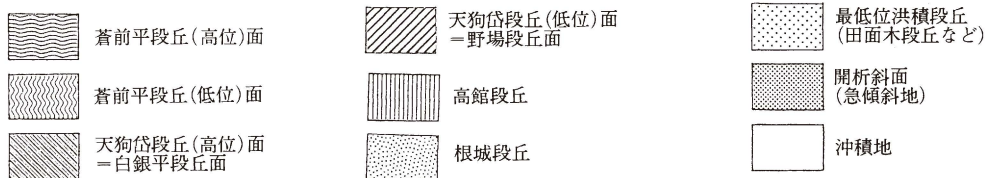
その主体は、標高140～300mの蒼前平段丘高位面が開析された丘陵地で、おもにその北側から北西側に、順次より高度の低い丘陵・段丘群が続いている。

この地域の北半部の南東側には、地域南半部の南郷村鳩田付近に源を発し、北東方へ下り八戸市是川の差波で新井田川に合流する頃巻川があって、丘陵地を削りこみ、特に下流部では高さ(丘陵面と谷底部の標高差)最大100m余りの急斜面(谷壁)をつくっている。頃巻川中流域にあたる南郷村泥障作の北西方、南郷村・福地村・八戸市相互の行政区界の交差する付近からは、地域北半部を縦断するように土橋川が流れ、八戸市の売市地区西縁に達している。

土橋川は、八戸市ニツ家付近までは、頃巻川とそれに続く新井田川の西を、ほぼ2kmの距離で平行するように北々東へ流れ、いったん北々西方へ向きをかえたあと再びゆるく湾曲して北々東へ向かっている。西側の丘陵・段丘面の縁辺部と谷底の沖積面との間は、高さ(標高差)最大60m余りの急斜面(谷壁)となっている。

土橋川最上流谷頭付近(鴨平(1)(2)遺跡付近)は、標高200m前後のゆるやかに起伏する丘陵面となっており、ここからやや東よりに北方へ、次第に高度を低くしながら細長くのびる丘陵・段丘面の背部(稜線に沿う面)は、土橋川と西方を流れる馬淵川の水系の分水嶺に相当している。この背部の中心線(分水界)と土橋川の間は1km以内の幅である。一方、土橋川最上流の谷頭のすぐ西に谷頭をもち、北々西へ下って、通清水の西で馬淵川に注ぐ谷と馬淵川を西縁とし、背部中心線を東縁とする地域は、北西方へ向かって低くなり、その間をいくつもの小河川





第2図 鴨平(1)遺跡周辺の地形分類図

が刻んでいる。これらの小河川は、いずれもおしなべてみれば北西へ下り、馬淵川に合する。

土橋川と馬淵川の間に北々東方へ突きだす丘陵・段丘群の幅は、鴨平と通清水の間で 4 km 以上であるが、北方では狭くなり、八戸市根城・売市地区で 1.5km から 1 km となる。

この地域の丘陵・段丘群は、上位から蒼前平段丘・天狗岱段丘・高館段丘・根城段丘・田面木段丘に区分でき、そのうち蒼前平段丘・天狗岱段丘は、さらにそれぞれ上位・下位の 2 段に区分できる。なお、第 2 図は鴨平遺跡付近以北の地形分類図である。

蒼前平段丘は、新井田川より東方の八戸平原地域では広い平坦面が残されているが、この地域では平坦面に乏しく、ほとんどが開析されて、起伏に富んだ丘陵地となっている。第 2 図では、急斜面部を開析地とし、相対的に傾斜のゆるい起伏地から平坦地までを段丘面（丘陵面）としてある。蒼前平段丘は、丘陵地背面（緩傾斜の丘陵面）の標高が 140～300m の高位面と、標高 100～130m の低位面に区別される。

天狗岱段丘は、八戸市域北部の天狗岱付近に広い平坦面をもつ段丘であるが、この地域では蒼前平段丘同様、かなり開析がすすんでおり平坦面に乏しいが、ニツ家付近と根城地区の南方の地域（笹子付近まで）及び通清水・法領屋敷とその北東の地域にやや広い平坦面がある。このうち、ニツ家付近と根城の南方の地域及び法領屋敷の北東の地域では平坦面高度が 85～110m 余りで天狗岱段丘高位面に相当し、それより低い 60m 以上の部分が低位面に相当する。第 2 図では、天狗岱段丘相当のうち、比較的急斜面になっているところは開析地としてある。

高館段丘は、この地域では標高 30m 以上で、比較的平坦面がよく残されているところが多い。第 2 図では、段丘崖及び開析された斜面も含めてある。

根城段丘は、標高 15m（一部 15m 以下）以上の、よく残された平坦面をもつ段丘である。田面木段丘は、最下位の洪積段丘で平坦面傾斜がやや大きい。

土橋川谷頭部付近にある鴨平(1)(2)遺跡と、土橋川下流から西へ 1.5km 離れた鶉窪遺跡を除いて、その他の遺跡は、いずれも土橋川の西方 1 km 以内にあり、丘陵の背面（稜線に沿う面）上あるいは西から背面にくだむ小河川の谷頭の斜面上に位置している。

## (2) 鴨平(1)遺跡の立地

すでに述べたように、鴨平(1)(2)遺跡は、土橋川谷頭付近の、蒼前平上位段丘に相当する丘陵面上にある。

このうち、鴨平(1)遺跡は、土橋川谷頭の南側を土橋川の東側に沿って、南西から北東方へ細長くのびる丘陵背面部にある。本遺跡のすぐ西側は、南郷村・福地村・八戸市相互の行政区界の交差点になっていて標高 196m である。この地点から南西方には小谷が下り、約 1 km 南の泥障作付近で頃巻川に合流している。また、この交差点の西は、通清水付近で馬淵川に注ぐ谷の谷

頭となっている。行政区界の交差点の北東200m付近に、丘陵背面部上の一つの頂部があり、標高200m余りを示し、この頂部と行政区界の交差点との間を、泥障作へ下る小谷の谷頭からほぼ北方へ、背面部を斜めに横切るように発掘調査が行なわれた。

鴨平(1)遺跡付近から土橋川に沿って南から北西方向に東側へのびる丘陵背面部があるほか、本遺跡を含む背面部の頂部からさらに、北方・北々西方および東方へも丘陵背面部が分岐している。そのうち東方へ向かう丘陵背面部は、1 km余りで北東へ折れ、番屋付近から北へ曲り、二ツ家付近で比較的広い平坦地となる。また本遺跡の南西側は急斜面となり、標高差60m程度の頃巻川谷底に下っている。

要するに本遺跡は、なだらかに起伏する丘陵背面部が西方に分岐する丘陵面頂部の一つに位置し、換言すれば、四方に流れ下る谷の谷頭部の集まるやや広い丘陵面の頂部から谷頭斜面部に立地している。

### (3) 地質の概略

新井田川と馬淵川下流から名久井岳東麓線にはさまれた地域の地質層序は第1表のとおりである。この地域の基盤は、おもに先第三紀の古期岩類及び第三紀中新世の安山岩や火山砕屑岩類である。名川町の如来堂川に沿った地域、南郷村市野沢中心街及び同村島守盆地を結ぶ線の

第1表 地質層序表

地質年代		層	序
第四紀	沖積世	一十和田 a 降下火山灰層一	沖積低地—泥・砂・礫など 台地部— { 黒色土層 火山灰層 (浮石層)
		一十和田 b 降下火山灰層一	
		一中 擲 浮 石 層一	
		一南 部 浮 石 層一	
		一二ノ倉火山灰層一	
	洪積世	八戸火山灰層 (田面木段丘)	火山灰層・浮石層
		高館火山灰層	粘土質褐色火山灰層 (ローム)・浮石層
		根城段丘堆積物	河成礫
		高館段丘堆積物	シルト・砂・砂礫
		天狗岱火山灰層	粘土質褐色火山灰層 (ローム)・浮石層
第三紀	鮮新世	天狗岱段丘堆積物	砂鉄質砂・砂礫
		斗川層相当層	泥岩・砂岩・凝灰岩 (軟体動物化石)
	中新世	名久井岳安山岩類相当層	火山砕屑岩 (含溶結凝灰岩)・頁岩



南側地域では、チャート・輝緑凝灰岩・粘板岩・砂岩などの古期岩類が卓越している。それより北方の地域では第三紀の安山岩と地層が卓越する。そのうち泥障作以北の地域では、おもに第三紀中新世の安山岩と火山砕屑岩が基盤となっており、一部の地域ではその上に鮮新世の礫岩・砂岩・シルト岩などの地層が重なっている。

これらの基盤岩類を覆っている丘陵・段丘群では、洪積世の段丘堆積物や褐色火山灰層（ローム層）と、沖積世の火山砕屑物・黒色土類が分布するほか河谷底には軟弱な沖積層が存在する。

洪積世の水成段丘堆積物は厚さ数m程度堆積しているが、ところによってはそれより厚い砂礫層が堆積して、チャートや安山岩の礫が多く認められている。

褐色火山灰層（ローム層）は、下位より天狗岱火山灰層・高館火山灰層・八戸火山灰層の3層に分けられる。天狗岱火山灰層は、厚さ数m以内で、数10cm程度の粘土質浮石層を2～3枚はさんだ固くしまった暗褐色（チョコレート色）火山灰層である。また、高館火山灰層は、天狗岱火山灰層よりはやわらかく、明るい色調の褐色火山灰層であるが、なかには数枚以上、それぞれに特徴がある厚さ数～数十cmの粘土質浮石層をはさみ、5～8m程度の層厚をもっている。なお、天狗岱火山灰層は、天狗岱段丘よりも上位の丘陵地や平坦地に、また高館火山灰層は、高館段丘よりも上位の丘陵・段丘群に分布

するほか、根城段丘では高館火山灰層の中部よりも上位にのっている。八戸火山灰層は、灰白色～明黄褐色の砂質火山灰と浮石層の互層及びその上位の明褐色火山灰層で構成される。互層部は、下位から～の6層に区分され、・・層は砂粒大の浮石粒を主体とする粘土質砂質火山灰層、・・層は粒径0.5～数cmの浮石を主な要素とする浮石層で、八戸の市街地では・・・層が厚く、・層が数cm程度と薄くなっている（第2表）。

第2表 八戸火山灰層序表（八戸付近）

	層相	層厚(cm)	備考
VII	褐色火山灰	20～50	上部黒色土へ漸移
VI	浮石	10～30	粒径0.5～2cm程度の浮石
V	粘土質砂質火山灰	20～40	よくしまる
IV	浮石	20～40	粒径0.5～5cm程度の固い浮石
III	砂質火山灰	4～8	よくしまる
II	浮石	3～6	粒0.5～5cm程度の固い浮石
I	粘土質砂質火山灰	30～60	中位に浮石層、その他数列の浮石列

その合計層厚は、八戸市中心域で80cmから1mであるが、北と南では薄くなり、鴨平(1)(2)遺跡付近では50～70cm余りとなる。また、各火山灰の厚さも変化し、鴨平(1)(2)遺跡付近では層が数cm程度とかなり薄くなっている。上位の明褐色火山灰層は粘性に乏しく、上限はふう黒色土層に漸移するが、ごく一部の地域では明褐色火山灰の上に橙褐色火山灰層がのっている。三辻利一氏（奈良教育大）の火山灰蛍光X線分析資料によれば、二ノ倉火山灰層に相当する可能性がきわめて大きい。なお、鴨平(2)遺跡では、この火山灰層中に爪形文土器片が含まれ、

第3表 黒色土層層序表

年 代	記号	土 層	火 山 墳 出 物	備 考
歴 史 時 代	I	暗褐色土層		耕作土・その他の表土
	続縄文時代	II	灰黒色土層	苫小牧火山灰層 十和田a 火山灰層
縄 文 時 代			III	暗褐色土層
	後 期	IV		粘土質黒褐色土層
中 期	粘土質暗褐色土層		南 部 浮 石 層	
前 期	粘土質浮石質暗褐色土層			二ノ倉火山灰層
早 期	粘土質黒褐色～暗褐色土層			
中・旧石器時代	V	褐色火山灰層	八戸火山灰層	
		泥・砂・礫層	高館火山灰層	
		基盤岩の風化土層	天狗袋火山灰層	

その下底部には厚さ数～10cmの黄灰色浮石層とその上に接する厚さ数cmの淡青灰色砂質火山灰層が伴われていた。

地表直下の黒色土類中には、下から南部浮石層・中撮浮石層・十和田b 降下火山灰層・十和田a 降下火山灰層・苫小牧火山灰層など、少なくとも5枚の火山砕屑物層がはさまれる。

南部浮石層は、粒径0.3～2cm程度の黄橙色～明褐色～赤褐色の浮石が密集した、未膠結でくずれやすい、粗粒砂大の火山岩片のまじる浮石層であるが、昼巻沢遺跡よりも北方の地域では分布してない。中撮浮石層は、おもに砂粒大の黄色浮石層が未膠結状態で密集した浮石層であるが、本地域では、ところどころで厚さ10～30cmの連続した地層となっているほかは、厚さ5～20cmの浮石密集塊として断続するところもあるが、多くの場所では黒色土と混合した土層となり、年代の大まかな示標とはなっても、厳密な年代示標層とはなり得ない。

十和田b 降下火山灰層は、噴出源の十和田湖の東側20km以内では、下半が白色浮石、上半が青灰色砂質火山灰の2層で構成されるが、その外縁地域では白色浮石部のみが分布する。本遺跡では、粒径0.2～0.6(最大2)cmの固い白色浮石の集まる1～5cmの厚さの浮石層が局部的にみられるにすぎず、一般にはその浮石が黒色土中に散在する状態のところが多い。

十和田 a 降下火山灰層は、灰白色～淡灰黄色のシルト状細粒火山灰層であるが、本地域では歴史時代奈良・平安期の遺構や小谷跡あとのような当時の凹地の覆土中に、レンズ状の形態で垂れさがる最大層厚数cmの薄層として、ところどころにみられるにすぎないが、鶉窪遺跡ではその上位の苫小牧火山灰層とともに最大層厚が20cm程度の例がみられた。

以上の、黒色土層中に含まれる沖積世火山碎屑物層及び八戸火山灰層の降下年代については、第4表を参照されたい。そのうち、中坵浮石層の降下年代については、最近岩手県北及び十和

第4表 十和田火山完新世火山灰編年表 (大池昭二：1978)

編年	年	火山灰	<sup>14</sup> C 年代・遺跡
B.P. 1,000年	土師器時代	毛馬内浮石流 十和田-a	1280±90 (平山ら、1966)
		くるみ館遺跡—平安中～末期 堀野遺跡—A.D.810 (草間、1965)	
	(弥生)	十和田-b	1180±80 (大池ら、1974)
	晩期	十和田-b	2200±100 (大池ら、1974)
		●	泉山遺跡Ⅱ層—大洞A'式
	後期	●	五戸町西張遺跡—十腰内1式 大湯ストーンサークル—3680±130 (渡辺、1966)
		●	3920±140 (松井ら、1969)
	中期	●	● 泉山遺跡Ⅱ層—4440±140青森県教委、1976)
		●	● 泉山遺跡Ⅱ層下部—円筒上層d式 4200±110 (八甲田湿原研究グループ、1969)
	前期	●	6550±170 (松井ら、1969)
●		三戸町境ノ沢遺跡	
早期	●	● 類家自然貝層 5280±100 (大池ら、1972) 日ヶ久保貝塚 5850±105 (大池ら、1972) 類家貝塚、長七谷地貝塚	
	●	三戸町館遺跡	
中期	●	● 南部浮石 — 8600±250 (大池ら、1970) ● 三戸町寺ノ沢遺跡—田戸下層式	
	●	二ノ倉火山灰 — 三戸町赤坂遺跡	
●	←? ● 階上村蝙蝠遺跡—無文土器		
先縄文時代 (晩期旧石器時代)	●	● 八戸浮石流 八戸降下浮石層 — 12,700±260 (大池、1964)	
	●	● 埋没林—13,770±510 (大池ら、1977) ● 長者久保遺跡	



田市の遺跡で、遺構の時代との関係から、絶対年代はともかく相対年代の上で縄文時代前期後前期後半にさかのぼる可能性が強まっている。十和田 a 降下火山灰については10世紀頃、また二ノ倉火山灰については9000～1万年前の降下と考えられる。

近年になって、十和田 a 降下火山灰層より数10～200年後の間の降下と考えられる苫小牧火山灰層ともう一つの降下火山灰層の存在が、町田洋氏らの研究と三辻利一氏の蛍光X線分析資料から明らかにされ、本遺跡、鶉窪遺跡、根城跡をはじめ、いくつかの遺跡でその存在が確認されている。

## 2 周辺の遺跡

本遺跡の周辺には数多くの遺跡が所在している<sup>(注1)</sup>（第3図、第5表）が、これらの遺跡の概要についてふれてみたい。

### (1) 遺跡数

昭和36年から38年にわたって県内全域を対象とした分布調査が実施されたが、その結果は『青森県遺跡地名表』<sup>(注2)</sup>、『全国遺跡地図（青森県）』<sup>(注3)</sup>にまとめられた。この時点の遺跡数は八戸市27か所、同南郷村5か所、同福地村1か所、同名川町8か所、階上村（当時）7か所であった。その後、新産業都市建設事業、東北縦貫自動車道八戸線建設事業、農業基盤整備事業、桔梗野工業団地造成事業等、各種開発事業が計画され、それに伴い周知の遺跡及び一般に公開されていない新規登録の遺跡が破壊されるおそれがあるため、青森県教育委員会では再び『青森県遺跡地図、同遺跡地名表』<sup>(注4)</sup>を刊行した。それによると、八戸市152か所、同南郷村53か所、同福地村26か所、同名川町40か所、同階上町27か所の遺跡が登録されており、第1次分布調査時の遺跡数の5倍から26倍にも増加している。そのほか、『八戸新産業都市開発整備事業』<sup>(注5)</sup>、『国営八戸平原開拓建設事業』<sup>(注6)</sup>等に係る遺跡分布調査によって、遺跡数は更に増加しているものとみられる。

### (2) 遺跡の概況

前記『青森県遺跡地図、同地名表』に基づいて、本遺跡から直線距離で10km以内に所在するこれら遺跡を2.5kmごとに区分して、市町村別に述べてみたい。半径2.5km以内に所在する遺跡は、八戸市2か所、南郷村5か所、福地村1か所である。

八戸市の2か所は、一里塚（江戸時代）と縄文遺跡である。後者は、昭和56年度に当センターが調査を実施した鴨平(2)遺跡で、北限の爪形土器（草創期）などが出土し、その報告書は本書と同年次に刊行されるが、概要はすでに『埋文あもり』<sup>(注7)</sup>に収録されている。

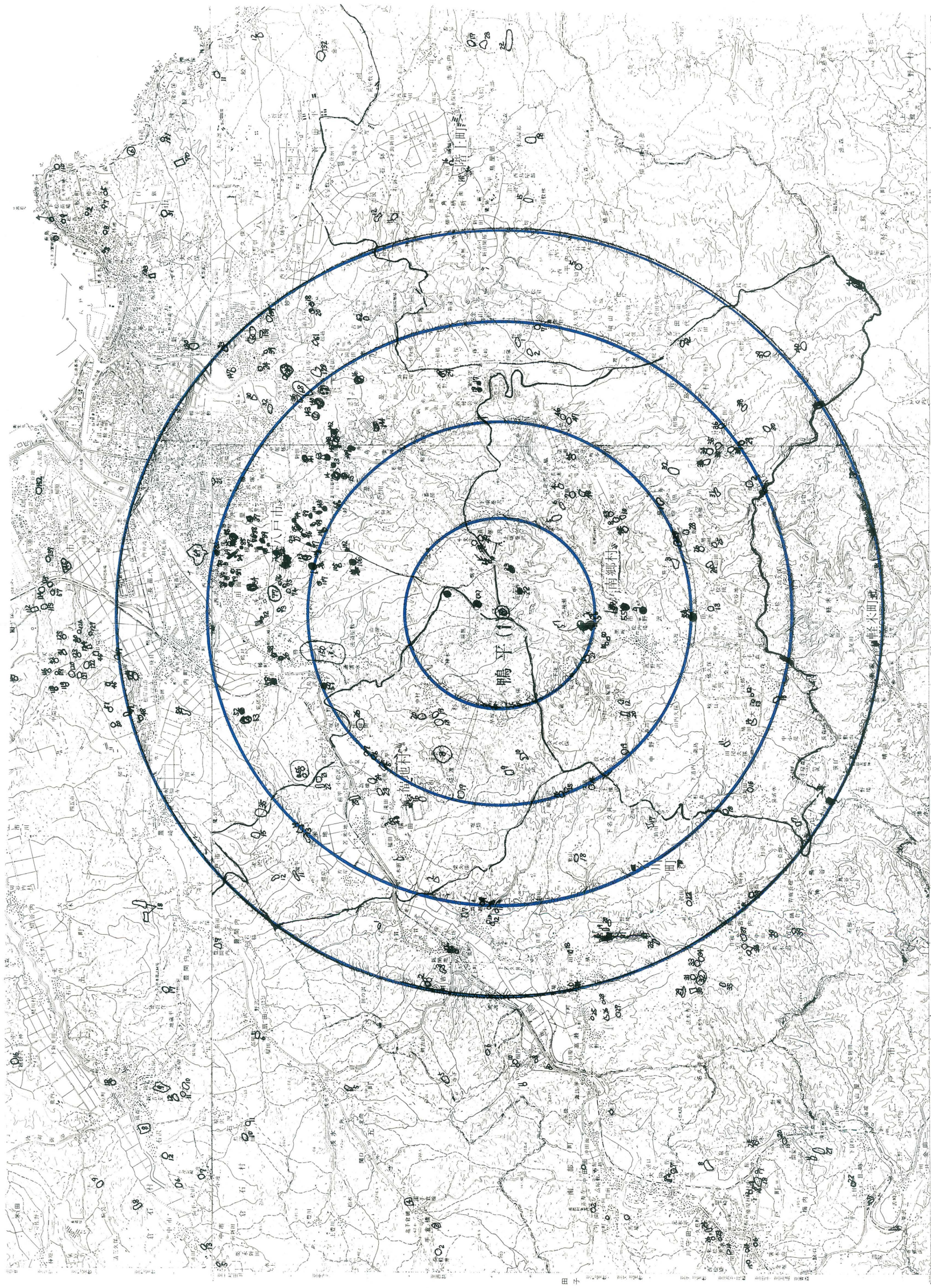
南郷村の5遺跡中、本遺跡と関連性がありそうな遺跡は、沢口、下坂、馬場瀬(1)、同(2)の4か所で、沢口と下坂の両遺跡は、縄文後期、晩期の遺物が発見されている。馬場瀬(1)、同(2)遺跡は、昭和55年度に当センターが発掘調査を実施し、報告書も刊行されている<sup>(注8)</sup>が、前者は縄文後期中葉の集落跡である。

福地村の1か所は、昼巻沢遺跡で、昭和56年、57年度の2か年にわたり、当センターが発掘調査を実施した。その報告書は58年度に刊行する予定である。

半径5kmの範囲内に所在する遺跡（前記2.5km以内の遺跡を除く、以下同じ）は、八戸市9か所、南郷村22か所、福地村11か所、名川町2か所である。

八戸市の9遺跡中3か所は、一里塚、城跡、土師器出土地である。残り6遺跡のうち1か所は、縄文前～晩期の遺跡（昼場）で、他は縄文早・晩期、中・近世の遺跡が1か所（長者森）、縄文後期の遺跡4か所である。この中で、葦窪遺跡は、昭和57年度に当センターが発掘調査を





第3図 鴨平(1)遺跡周辺の遺跡分布図



実施し、縄文中期末～後期初頭の集落跡などを検出したが、報告書は昭和58年度に刊行される予定である。

南郷村の22遺跡は、同村の遺跡総数（62か所）の約3分の1に相当する。複合した時代、時期の遺跡が多く、縄文早期1か所、前期4か所、中期7か所、後期10か所、晩期10か所、奈良時代の古い土師器・須恵器が出土した遺跡1か所、一里塚2か所、館跡2か所、土師器（平安時代か）などの遺物を出土する遺跡5か所等であるが、弥生時代の遺物出土地は未だ地名表に記載されていない。縄文後期、晩期の遺跡が多い点が注目される。

福地村の11遺跡は、同村の遺跡総数22の2分の1に相当し、縄文後期8か所、晩期3か所、縄文時代と歴史時代（土師器）の複合遺跡3か所、歴史時代（土師器ほか）の遺跡2か所等が知られている。

名川町の2遺跡は、縄文後期、晩期（大洞A式）と土師の複合遺跡1か所、時期不詳の縄文時代の遺跡1か所である。

周辺の遺跡を半径7.5kmまで拡大すると、前記の市町村のほかに階上町と岩手県軽米町が加わるが、岩手県分については割愛する。この距離になると、八戸市59か所（70）、南郷村20か所（47）、福地村10か所（22）、名川町4か所（6）、階上町3か所（3）となる（（ ）内は7.5km以内の延遺跡数<sup>(注9)</sup>）。

八戸市の遺跡の半数、南郷村・福地村の遺跡の半数がこの範囲内に入ることは、当時の近隣集落がどこに所在したのかを示唆しているのではなかろうか。

八戸市の59遺跡中の30余りが縄文後期の遺跡と歴史（奈良・平安）時代の遺跡が重複しているが、これは、その立地（占地）のあり方を特徴的に物語っている。これらの遺跡は、縄文早期の遺物出土地1か所、前期9か所、中期10か所、後期31か所、晩期10か所、奈良・平安時代32か所、中世1か所、近世一里塚2か所などに分けられる。この中で、是川遺跡（中居、一王寺、堀田など）は、国の重要文化財指定遺物の出土遺跡として世界的に有名である。また現在のところ青森県では唯一の古墳群である鹿島沢古墳群もこの範囲内にある。

南郷村の20遺跡は、奈良時代1か所、一里塚2か所、時期不詳の縄文時代1か所、縄文早期1か所、前期3か所、中期5か所、後期12か所等重複しているが、ここでも縄文後期の遺跡が多いことが特色である。

福地村の10遺跡は、中・近世1か所、土師器を伴う歴史時代5か所、縄文前期、中期各1か所、後期5所、晩期3か所等が重複し、後期の遺跡が多い点は他の市町村と同様である。

名川町の4遺跡は、土師器を伴う歴史時代2か所、縄文前期、中期各1か所、後期4か所等が重複し、ここでも後期の遺跡が多い。

階上町の3遺跡は、縄文前期、中期各1か所、後期、晩期各3か所等が重複し、縄文後・晩

期が多い。

周辺の遺跡を半径10kmまで拡大すると、八戸市21か所(91)、南郷村7か所(54)、福地村5か所(27)、名川町16か所(22)、階上町1か所(4)が認められる。( )内は10km以内の延遺跡数)遺跡の延べ数をみると、八戸市の3分の2、南郷村、福地村ではほぼ総数、名川町の半数に相当する。

八戸市の21遺跡は、江戸時代の窯跡1か所、中世以降の城館跡2か所、土師器、須恵器などの出土地7か所、縄文早期5か所、前期7か所、中期5か所、後期7か所、晩期3か所などが重複している。縄文時代の遺跡中2か所は、早期から晩期にわたる遺物が出土している。

南郷村の7遺跡は、古墳・奈良時代1か所、縄文中期1か所、後期6か所、晩期3か所等が重複し、後期の遺跡が多数を占めている。

福地村の5遺跡は、すべて縄文時代に位置づけられ、縄文時代前期1か所、後期4か所がある。

名川町の16遺跡は、奈良・平安時代の土器などの出土地6か所、弥生時代1か所、縄文早期2か所、中期2か所、後期13か所、晩期5か所等が重複し、やはり後期の遺跡が多い。

階上町の1遺跡は、縄文時代中・後・晩期の土器などが出土している。

以上、周辺の遺跡について、市町村別、距離別に、遺跡数や時代、時期を概観してきたが、本遺跡から直線距離にして10km以内には、約200か所の遺跡が所在し、それらの複合状況をおよその時代・時期別に分けてみると、縄文時代244か所、弥生時代1か所、奈良・平安時代67か所、中世5か所、近世(江戸時代)8か所となる。具体的に、本遺跡と直接的な関連性がある遺跡を摘出するには、これまで実施された中居、田ノ上、前平(2)、右エ門次郎窪、三合山、馬場瀬(1)など(早期、後期、晩期)の遺跡から発掘した資料と比較検討することが必要であろう。本県では縄文時代後期初頭の遺跡が多いが、この点を究明して行くとそこに潜在した当時の気象状況、縄文海進などの問題にも波及することが予想されよう。(北林)

#### 注

- 1 青森県教育委員会 1978 『青森県遺跡地名表』、『青森県遺跡地図』。
- 2 青森県教育委員会 1962～1964。
- 3 文化財保護委員会 1967。
- 4 注1に同じ。
- 5 地域振興整備公団 1978。
- 6 青森県教育委員会 1979 第64集、第65集。
- 7 青森県埋蔵文化財調査センター 1982 第1号。
- 8 青森県教育委員会 1982 第70集。
- 9 遺跡延べ数が多いのは、複合遺跡の場合は、時代・時期別に分割したためである。以下同じ。

第5表 周辺の遺跡地名表(1)

注：縄は縄文時代を示す

〈八戸市〉

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
1	蕪島	鯨町字蚊	台地 (海岸段丘)	包含地	縄、弥生 (続縄文)	境内 荒地	(貝殻縁文)土器片 石斧、石鏃、石匙、石 錘、続縄文土器	八戸水産高校歴 史民俗資料館	
2	縄久保	鯨町字縄久保27	台地 (舌状)	◇	縄(前～後)	畑 宅地	(円筒下層式、壺形、 注口土器、深鉢形) 土器、石器	音喜多富寿	「縄久保遺跡調査報告」音喜多富寿 (S29)文化庁、県教育委員会報告
3	林通り	鯨町字二子石本 町	台地 (斜面)	貝塚	縄(中)	宅地	(円筒上層式)土器 石鏃、アイヌ人骨、他	東京大学	奥南史苑第1号所収、音喜多富寿「八戸周辺に於ける貝塚の自然置物」 人類学雑誌、鈴木尚「本州北端に於ける近世アイヌの痕跡について」 S26、462巻1号
4	盲久保	鯨町字蚊盲久保	台地 (海岸段丘)	包含地	縄(後)	◇	縄文土器片	八戸水産高校	
5	古馬屋	鯨町字古馬屋	台地 (舌状)	◇	縄(早)	畑	◇	慶応大学	
6	白浜	鯨町字姥横	台地 (斜面)	◇	◇	◇	(貝殻縁文)土器 石楯、石鏃、石斧 石錘、他	◇	
7	榛沢	鯨町字榛沢	台地	◇	◇	◇	(押型文)土器片	八戸水産高校	
8	冷水	鯨町字冷水33	台地 (舌状)	◇	縄(早～中)	畑 宅地	(尖底土器、円筒下層 式)土器	音喜多富寿八戸 鯨中学校	
9	下松苗場	鯨町字糠子	台地	◇	縄(早)	畑	(貝殻縁文)土器片 石錘	八戸水産高校	
10	小舟渡平	鯨町字先祖ヶ久 保	台地 (斜面)	◇	◇	荒地	(貝殻縁文)土器片 石斧、石錘	慶応大学	
11	熊ノ林	鯨町字熊ノ林	台地	貝塚	縄(前・中)	畑	(円筒下・上層式)土 器、貝類、魚骨類、石 匙、石鏃	慶応大学 八戸光星学院 高校	
12	骨沢	鯨町字骨沢	◇	◇	縄(中・晩)	◇	(円筒上層式、大洞A 式)土器片、貝類、魚 骨、石鏃	慶応大学	
13	中居	是川字中居	◇	◇	縄(早～晩)	宅地	縄文土器、石器、木器 玉類、土偶、赤染、人 骨、土壇墓、他	八戸市教育委員 会、是川考古館	国の重文指定、史前学雑誌第2巻第4号(是川研究号)小金井良精、 喜多貞吉、大山柏、甲野勇、人類学雑誌
14	一王寺1)	是川字一王寺	◇	◇	縄(前・中)	畑	(円筒下・上層式)土 器、貝塚、骨角器	清水寺東京大学 八戸市教育委員 会、是川考古館	県重宝指定
15	一王寺2)	是川字中居	◇	◇	◇	果樹園	土偶	清水寺	◇
16	留流	十日市字留流6	◇	◇	◇	畑	(円筒上層式)土器	八戸是川中学校	
17	東母袋子 (1)	是川字東母袋子 28	◇	◇	縄(晩)	◇	(壺形)土器	八戸是川中学校 加藤泰助	
18	東母袋子 (2)	是川字東母袋子 36-1	◇	◇	縄(前～後)	畑 牧草地	縄文土器	八戸是川中学校 八戸是川東小学 校	
19	蟹沢	妙字蟹沢	◇	◇	縄(前)	畑	(円筒下層d <sub>1</sub> ・d <sub>2</sub> 式) 石器類、人骨	早稲田大学 慶応大学	



第5表 周辺の遺跡地名表(2)

注：縄は縄文時代を示す

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
20	蟹沢窯跡	妙字蟹沢	台地	窯跡	江戸	畑 山林	陶器、瓦	八戸市歴史民俗 資料館	
21	糠塚	糠塚字南糠塚33	低地	包含地	縄(後)	畑 校有地	縄文土器片 石錘 勾玉	大久保源太郎	
22	類家帽子 屋敷貝塚	類家二丁目	〃	包含地 貝塚	縄(早)	畑	尖底土器、石斧、石錘 貝類、魚骨類	八戸高校	「類家帽子屋敷貝塚発掘調査報告」栗村知弘(奥南史苑第6号) 県文化財保護協会八戸支部発行
23	赤御堂 貝塚	十日市字赤御堂	台地	貝塚 住居跡	縄(早・前・後)	〃	尖底土器、石器、魚骨、 鳥骨、獸骨、貝類、装 身具類、竪穴住居跡	大館中学校 慶応大学	「三戸郡大館村十日市赤御堂貝塚調査略報」江坂輝弥(奥南史苑第2号) 県文化財保護協会八戸支部発行
24	館平	新井田字館平22	〃	包含地	縄(早)	〃	白浜式貝殻製縄文土器 石錘、石器(ヘラ状)	慶応大学	考古学年報S30年度 日本考古学協会発行
25	鹿島沢 古墳	根城字鹿島沢34 35	〃	古墳	歴史 (奈良～平安)	〃	須恵器、土師器、鉄製 直刀、金環、刀子、ガ ラス小玉	音喜多富寿	「八戸市根城鹿島沢古墳群調査略報」音喜多富寿(奥南史苑第4号) S35、3月「八戸市鹿島沢古墳群踏査予報」江坂輝弥、音喜多富寿 (史想第9号) S33
26	八幡貝塚	八幡字館ノ下	〃	貝塚	縄(晩)	宅地	縄文土器、石器	慶応大学	「八戸周辺に於ける貝塚の自然遺物」 音喜多富寿(奥南史苑第1号所収)
27	日計	河原木字日計	〃	包含地	縄(早)	基地	(押型文、貝殻文)土 器片、石器	〃	「八戸市日計遺跡調査報告」 筒井庸洋(三田史学第33巻第1号)
28	長七谷地 貝塚	市川字長七谷地	〃	貝塚 集落跡	縄(早・後)	畑	縄文土器片、骨角器、 石器、貝類、竪穴住 居跡、ピット	県教委	青森県教委・八戸市教育委員会で発掘調査 県埋文51、57集、八戸市埋文3、8集
29	水野	是川字水野18	〃	包含地	縄文	〃	磨製石斧	加藤泰男	
30	田向	田向	台地 (舌状)	〃	縄(早)	〃	(白浜式、吹切沢式) 土器片石錘、石斧	大久保源太郎 八戸水産高校	
31	野場小屋	大久保字野場小 屋	丘陵 (端)	〃	縄(後)	畑	縄文土器片	八戸水産高校	
32	石手洗	石手洗字上平	台地	〃	縄(早～晩)	〃	〃	岩館鉄蔵	
33	重地	新井田字重地	台地 (斜面)	〃	縄(前)	〃	(円筒下層式)土器	八戸市教育委員 会	
34	田面木	田面木字外久保 15	〃	〃	縄(中) 歴史(奈良～ 平安)	〃	縄文土器片、土師器		
35	直渡	櫛引字直渡	〃	〃	縄(前・中)	〃	縄文土器片、土器		
36	西長根	十日市字長根19	台地 (河津段丘)	〃	縄(中)	基地	(円筒上層式)土器	加藤泰男	
37	鍋久保	沢里字鍋久保	台地 (斜面)	〃	縄(後)	畑	縄文土器片	音喜多富寿	
38	千石屋敷	八幡字千石屋敷	台地	〃	縄(晩)	校有地	〃		

第5表 周辺の遺跡地名表(3)

注：縄は縄文時代を示す

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
39	市子林	新井田字市子林17	台地	住居跡	歴史	校有地	土師器片、須恵器片、かまど跡	八戸市教育委員会	「市子林遺跡調査報告書」1965. 11. 5 八戸市教育委員会
40	笹ノ沢1)	尻内町字笹ノ沢	台地(斜面)	包含地	〃	果樹園	土師器片		
41	笹ノ沢2)	〃	〃	〃	縄(中)	畑	縄文土器片		
42	笹ノ沢3)	〃	〃	〃	縄(前)	〃	〃		
43	古場蔵1)	市川町字古場蔵1の36	丘陵(端)	住居跡	歴史(平安-鎌倉)	〃	土師器片		
44	古場蔵2)	市川町字田ノ沢頭1の1	台地	散布地	歴史	〃	〃		
45	中熊の沢	尻内町字中熊の沢	台地(斜面)	〃	縄文	〃	〃		
46	北熊の沢	尻内町字北熊沢33の7	台地	包含地	歴史	〃	土師器片、石鎌		
47	田端山	尻内町字田端山3の1	〃	〃	〃	〃	土師器片		
48	泉沢(1)	尻内町字泉沢29の45	丘陵(端)	散布地	縄(前・中)	〃	縄文土器片		
49	泉沢(2)	尻内町字泉沢29の10	〃	〃	縄(前)	〃	(円筒下層式)土器片		
50	泉沢(3)	尻内町字泉沢29の67	〃	包含地	縄(前-後)	〃	(円筒下層式)土器片 石匙		
51	西熊の沢	尻内町字西熊の沢	〃	散布地	縄文 歴史	〃	縄文土器片、土師器片		
52	荒塔の沢	柳引字荒塔の沢	台地	〃	歴史	〃	土師器片		
53	岩の沢平	柳引字岩の沢平19	〃	包含地	〃	〃	土師器片、須恵器片		
54	大仏	尻内町字大仏28の2	丘陵(端)	散布地	〃	〃	土師器片		
55	和野前山	市川町字和野前山16	〃	〃	縄(早・前) 弥生 歴史	〃	縄文土器片、土師器、須恵器、住居跡、弥生土器、ピット	県教委	昭和56年発掘調査
56	白椀	柳引字白椀	丘陵	〃	縄(晩)	〃	(苜形)土器片、石斧		
57	売場	河原木字売場	台地(斜面)	包含地	縄(早) 歴史	原野	(尖底土器)石器、住居跡、土師器、須恵器、鉄器	県教委	昭和54、55、57年発掘調査

第 5 表 周辺の遺跡地名表(4)

注：縄は縄文時代を示す

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
58	一日市	櫛引字一日市	台地	散布地	歴史 (平安・中世)	畑 果樹園	土師器片、須恵器片		
59	昼場	上野字昼場	〃	包含地	縄(前~晩)	〃	縄文土器		
60	石橋	新井田字石橋	〃	住居跡	歴史	畑 宅地	土師器、須恵器、鉄製品	向谷地芳久	
61	細越	松館字細越	丘陵 (端)	包含地	歴史 (奈良・平安)	畑	土師器	八戸市歴史民俗 資料館	
62	松館	松館字門前	台地 (斜面)	貝塚	縄(前~晩)	荒地 水田	縄文土器、石器 獣骨、魚骨	〃	
63	堀田	是川字堀田	台地	包含地	縄(中~晩)	草地	縄文土器片、石斧、石鏃、竪穴住居跡、集石遺構	八戸市教育委 員会	「是川堀田遺跡」緊急発掘調査報告書、八戸市教育委員会
64	根城城跡	根城	〃	城跡	歴史(中世)	畑 水田 宅地			S49年度国指定史跡「八戸市根城跡第一次調査略報」八戸市教育委員会 八戸市埋文2集「根城通信」1~3
65	小峠 一里塚	是川字小峠	〃	一里塚	江戸(慶長9年 ~承応2年)	山林			「大館村誌」S34、小井川潤次郎著「八戸覚之書」S40、小井川潤次郎著「岩手県史」第5巻近世編、岩手県「特集八戸の交通」上杉修著、「奥南史苑」第5号、S35、上杉修著「雑書」盛岡南部藩の藩庁日記
66	十文字 一里塚	是川字十文字	〃	〃	〃	山林 果樹園			〃
67	天摩 一里塚	十日市字天摩4 の1	〃	〃	〃	山林			「大館村誌」S34、小井川潤次郎著「八戸覚之書」S40、小井川潤次郎著「岩手県史」第5巻近世編、岩手県「特集八戸の交通」上杉修著「奥南史苑」第5号、S35。
68	松ヶ崎	十日市字松ヶ崎	〃	貝塚 包含地	縄(前~後)	畑 宅地	縄文土器、土製品、石斧、石匙、石鏃、石鏃、自然遺物、貝類		「松ヶ崎貝塚」滝沢幸長 八戸光星学院高校
69	牛ヶ沢(1)	根城字牛ヶ沢牛 ヶ沢	丘陵 (斜面)	包含地	縄(中~晩) 歴史	畑	縄文土器片、土師器片 須恵器片		
70	中崎	鮫町字中崎	〃	〃	縄(前~後)	〃	縄文土器片、石器		
71	上野平(1)	田面木字上野平	台地	散布地	縄(後~晩) 歴史	〃	縄文土器片、土師器片		
72	上野平(2)	〃	台地 (斜面)	〃	歴史	〃	土師器片		
73	盲堤沢(1)	田面木字盲堤沢	〃	〃	〃	〃	〃		
74	盲堤沢(2)	〃	〃	包含地	縄(後)	〃	縄文土器片		
75	盲堤沢(3)	〃	〃	散布地	〃	〃	〃		
76	盲堤沢(4)	〃	〃	〃	縄(中・後) 歴史	〃	縄文土器片、土師器片		

第5表 周辺の遺跡地名表(5)

注：縄は縄文時代を示す

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
77	酒美平	田面木字酒美平	台地	包含地	縄(中・後) 歴史	畑	縄文土器片、土師器片、 土錘		
78	田面木 赤坂(1)	田面木字赤坂	◇	散布地	縄(後)	◇	縄文土器片、土師器片		
79	田面木 赤坂(2)	◇	丘陵 (斜面)	包含地	◇	◇	◇		
80	田面木 赤坂(3)	◇		散布地	◇	◇	◇		
81	鴉 窪	田面木字鴉窪	台地	◇	◇	◇	早～晩期土器、石器、国 分寺下層式土師器、勾 玉、土玉、磁石、鉄器	県教委	昭和56年発掘調査、県埋文76集
82	大久保(1)	根城7-14	◇	包含地	縄(後・晩) 歴史	◇	◇		
83	内 沢	根城字内沢	◇	◇	縄(後)	◇	縄文土器片		
84	牛ヶ沢(2)	根城字牛ヶ沢	台地 (斜面)	◇	◇	◇	◇		
85	牛ヶ窪(1)	根城字牛ヶ窪	◇	◇	縄(後) 歴史	◇	縄文土器片、土師器片		
86	大久保(2)	根城字大久保	◇	◇	◇	◇	縄文土器片、土師器片、 石錘		
87	牛ヶ窪(2)	根城字牛ヶ窪	丘陵	散布地	縄(中)	◇	縄文土器片		
88	古 宮	沢里字古宮	台地	◇	歴史	◇	土師器片		
89	湯浅屋 新田(1)	沢里字湯浅屋新 田	丘陵 (斜面)	包含地	縄(前) 歴史	◇	縄文土器片、土師器		
90	白山平(1)	根城字白山平	丘陵	散布地	歴史	◇	土師器片		
91	湯浅屋 新田(2)	沢里字湯浅屋新 田	◇	◇	縄(前) 歴史	◇	縄文土器片、土師器		
92	白山平(2)	根城字白山平	◇	◇	縄(後)	山林	縄文土器片、土師器	県教委	昭和56年発掘調査 昭和57年発掘調査
93	丹後平(1)	根城字丹後平	◇	◇	◇	畑	◇		
94	丹 後 谷地(1)	根城字丹後谷地	丘陵 (斜面)	包含地	縄(前～後) 歴史	◇	(十稜内式)土器片、 土師器片		
95	丹 後 谷地(2)	根城字丹後谷地 丹後平	◇	◇	縄(後) 歴史	◇	縄文土器片、土師器片		

第 5 表 周辺の遺跡地名表(6)

注：縄は縄文時代を示す

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
96	丹後平(2)	根城字円後平	丘陵 (斜面)	包含地	縄(前・後) 歴史	畑	(十腰内式)土器片、 土師器片		
97	丹後平(3)	◇	丘陵	散布地	縄(後) 歴史	◇	縄文土器片、土師器片、 石斧		
98	丹後 谷地(3)	根城字丹後谷地	◇	◇	◇	◇	縄文土器片、土師器片		
99	丹後 谷地(4)	◇	丘陵 (斜面)	◇	◇	◇	◇		
100	丹後 谷地(5)	◇	台地	◇	◇	◇	◇		
101	管子(1)	根城字管子	丘陵	◇	◇	◇	◇		
102	管子(2)	◇	◇	◇	縄(後)	◇	縄文土器片		
103	田面木平 (1)	田面木字田面木 平	◇	包含地	縄(後) 歴史	畑 牧草地	(十腰内式)土器片、 土師器片		
104	田面木平 (2)	◇	◇	散布地	歴史	雑種地	土師器片		
105	鳥ノ木沢	田面木字鳥ノ木 沢	◇	◇	縄(後)	◇	縄文土器片		
106	葦 窪	田面木字葦窪	丘陵 (斜面)	包含地	縄(後・晩)	山林 畑	縄文土器片、石器、住 居跡、ピット	県教委	昭和57年発掘調査
107	笹の沢頭	坂半字笹の沢頭	丘陵 (端)	散布地	◇	雑種地	縄文土器片		
108	小 鍋 沖	市川町字小鍋沖	◇	◇	歴史	畑	土師器		
109	古 場 蔵	市川町字古場蔵	◇	◇	縄(晩)	原野	縄文土器片		
110	市川長者 久保(1)	市川町字長者久 保	丘陵 (端)	◇	縄(後)	畑	◇		
111	市川長者 久保(2)	◇	◇	◇	縄(前・後・晩)	畑	縄文土器片、石器		
112	大タルミ	河原木字大タル ミ	◇	◇	歴史	畑	土師器片、ピット	県教委	昭和57年発掘調査
113	見立山(1)	河原木字見立山	◇	包含地	縄(前・後・晩) 弥生(続縄文)	畑	縄文土器片、続縄文土 器片		
114	見立山(3)	◇	台地	◇	縄(早・前)	◇	縄文土器片		

第5表 周辺の遺跡地名表(7)

注：縄は縄文時代を示す

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
115	見立山(3)	河原木字見立山	台地 (斜面)	包含地	縄(中)	畑	縄文土器片		
116	下毛合清水	尻内町字下毛合清水	台地	散布地	縄(前-後) 歴史	◇	縄文土器片、土師器片		
117	前堀(1)	尻内町字前堀	◇	◇	縄(後) 歴史	◇	◇		
118	前堀(2)	◇	台地 (斜面)	◇	縄(早-後) 歴史	◇	◇		
119	狼走	尻内町字狼走	◇	◇	縄(後)	◇	縄文土器片、石斧		
120	毛合清水(1)	尻内町字毛合清水、狼走	丘陵	◇	縄(前-後) 歴史	◇	縄文土器片、土師器片		
121	毛合清水(2)	◇	◇	包含地	縄(前)	◇	縄文土器片、土師器片		
122	毛合清水(3)	尻内町字毛合清水、北熊沢	◇	◇	縄(前-後) 歴史	◇	縄文土器片、土師器片		
123	笹ノ沢(4)	尻内町字笹ノ沢	◇	散布地	◇	◇	◇		
124	上笹ノ沢	尻内町字上笹ノ沢	丘陵 (端)	包含地	縄(晩) 歴史	◇	◇		
125	杉子沢(1)	尻内町字杉子沢	丘陵	散布地	歴史	◇	土師器		
126	杉子沢(2)	◇	◇	◇	◇	◇	◇		
127	笹ノ沢(5)	尻内町字笹ノ沢	丘陵 (端)	散布地	歴史	◇	土師器		
128	赤坂	十日市字赤坂	◇	◇	縄(後-晩)	◇	縄文土器片		
129	林の前	尻内町字林の前	丘陵 (端)	◇	縄(早-晩) 歴史	◇	縄文土器片、土師器片		
130	塩入	新井田字塩入、寺沢	台地	◇	縄(後) 歴史	◇	縄文土器片、須恵器片		
131	坂中	妙字坂中	◇	◇	歴史	◇	土師器、須恵器		
132	家の向	金浜字家の向	丘陵 (端)	◇	縄(早-晩)	◇	縄文土器		
133	沢目	大久保字沢目	◇	◇	縄(早)	◇	◇		

第 5 表 周辺の遺跡地名表(8)

注：縄は縄文時代を示す

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
134	小田平	河原木字小田平	台地	散布地	縄(早) 歴史	雑種地	縄文土器、須恵器		
135	下水目沢	市川町字下水目沢	◇	◇	縄(前・中)	◇	縄文土器		
136	水目沢	市川町字水目沢 桔梗野	◇	◇	縄(前)	◇	◇		
137	高館	市川町字高館神ノ沢	◇	◇	縄(前) 歴史	◇	縄文土器、土師器		
139	古玄中寺	類家一丁目	◇	◇	縄(後)	宅地	縄文土器、砥石		
139	野場	妙字野場	丘陵(端)	◇	縄(後) 歴史	畑	縄文土器、土師器、須恵器		
140	弥次郎窪	十日市字弥次郎窪	台地	◇	縄(前)	◇	縄文土器		
141	新田	是川字新田	丘陵(斜面)	◇	縄(中)	畑 宅地	◇		
142	風張(1)	是川字茨森	台地	◇	縄(後・晩) 歴史	畑	縄文土器、土師器、須恵器		
143	風張(2)	是川字稲荷上	◇	◇	縄(後・晩) 歴史	◇	縄文土器、土師器、須恵器		
144	寺の上	是川字寺の上	◇	◇	縄(中)	◇	縄文土器		
145	小峠	是川字小峠	丘陵(端)	◇	縄(後・晩)	◇	縄文土器、石炭		
146	小館	河原木字小館	丘陵	館跡		山林			
147	新井田古館	新井田字古館	低地	◇		畑			
148	橋館	是川字橋館	台地	館跡	縄(前)	畑 山林	縄文土器		
149	風張	是川字館ノ内	◇	◇	縄(後・晩) 歴史	◇	縄文土器、土師器、須恵器		
150	櫛引	櫛引字岡前館、 神下矢倉		城跡	歴史 中世	山林	土師器 須恵器、陶磁器		
151	浜道通	蛟町字浜道通	丘陵(端)	包含地	縄(前)	宅地	(円筒下層d式)土器		
152	八太郎山	河原木字八太郎山	台地	◇	縄(後) 歴史	畑	縄文土器、土師器		



第5表 周辺の遺跡地名表(9)

注：縄は縄文時代を示す

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
153	鴨平(1)	是川字鴨平3	台地	包含地	縄(早~晩)	畑 山林	縄文土器、石器、ピット	県教委	昭和56年発掘調査、県埋文72集
154	鴨平(2)	是川字鴨平	〃	〃	縄(草・早・後・晩)	〃	縄文土器、石器、アメリカ式石鏃、住居跡、ピット	〃	昭和56年発掘調査、県埋文73集
155	長者森	田面木	〃	〃	縄(早~晩 近世)	山林	縄文土器、石器、陶磁器、泥面子、鉄器	〃	昭和56年発掘調査、県埋文74集
156	牛ヶ沢(3)	根城字牛ヶ沢	〃	〃	〃	山林	縄文土器、石器	〃	昭和57年発掘調査

〈名川町〉

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
1	諸味坂	斗賀字諸味坂	山地 (斜面)	包含地	縄(後)	山林	縄文土器片		
2	伊勢沢1)	剣吉字伊勢沢	丘陵 (斜面)	〃	縄文	畑 果樹園	縄文土器片		
3	伊勢沢2)	剣吉字伊勢沢	丘陵 (斜面)	〃	縄(後・晩) 歴史	山林	縄文土器片、土師器、木の実	出町 俊	
4	剣吉荒町	剣吉字荒町69、70-1	台地	〃	縄(晩)	宅地	(大洞A'式)土器片	慶応大学 考古学研究室 名久井農高	江坂輝弥「青森県剣吉荒町遺跡調査略報」S. 42. 3
5	寺下	寺下24	丘陵	〃	縄(後・晩) 弥生 歴史	果樹園 水田	(大洞B、BC、C <sub>1</sub> 式、壺形)土器片、石皿片、須恵器、土師器	名川町教委	
6	虎渡前平	虎渡前平	山地 (斜面)	〃	縄(後) 歴史	果樹園 畑	縄文土器片、土師器	〃	
7	大宮	森越字大宮	台地 (河岸段丘)	〃	縄(後) 歴史	水田	縄文土器片、土師器、チップ	名川町教委 名久井農高	
8	森越山1)	森越字家ノ上	丘陵 (斜面)	〃	縄(後)	畑	縄文土器片、石鏃		
9	森越山2)	森越字家ノ上	丘陵 (斜面)	〃	縄(後) 歴史	畑	縄文土器片、土師器		
10	森の越 野月	森越字野月森越 ポンプ場前	台地	〃	縄(早・後・晩) 弥生	宅地 果樹園	(尖底)土器片、土師器片	名久井農高 名川町教委	
11	提ヶ沢	森越字提ヶ沢	台地 (斜面)	〃	縄(早)	畑	(尖底)土器片、(貝殻文)土器片	名久井農高	
12	堀米	森越字堀米	〃	〃	縄(後・晩) 歴史	果樹園 宅地	縄文土器片、土師器		
13	東山	下名久井字東山 43-2	台地 (斜面)	散布地	縄(後)	宅地 山林	縄文土器片	名川町教委	



第 5 表 周辺の遺跡地名表(10)

注：縄は縄文時代を示す

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
14	下横沢(1)	下名久井字下横沢83-23	丘陵(斜面)	包含地	縄(早)	山林 水田	(尖底)土器片	工藤 文男	
15	下横沢(2)	下名久井字下横沢42	台地	◇	縄(後・晩)歴史	畑	(大洞A'式)土器片、(浅鉢形)土器片、土師器	工藤 文男 名川 町 教育委員会	
16	下横沢(3)	下名久井字下横沢43	台地(斜面)	◇	縄 文	水田	縄文土器片、石斧、石冠	◇	
17	點左エ門山	上名久井字點左エ門山	台地(斜面)	◇	縄(前・中・後)	山林 畑	(円筒下層式)土器片、(壺形)土器片(注口)土器片、石斧	工藤 文男	
18	柞木田	平字柞木田57	台地	散布地	縄(後)歴史	果樹園	縄文土器片、土師器	名川 町 教育委員会	
19	荒谷向	下名久井字荒谷向	台地	◇	縄(後)	◇	縄文土器片、土師器片	◇	
20	野場山	下名久井字野場山	丘陵(斜面)	◇	縄(後)	山林	縄文土器片、土師器片	◇	
21	相前	平字相前下	台地(斜面)	◇	縄(後)歴史	果樹園	縄文土器、土師器	◇	
22	中森	小泉字中森1-4	丘陵	◇	縄(後・晩)歴史	畑	縄文土器片、土師器片	福地 村 教育委員会	
23	巖倉平	小倉宮巖倉平17	◇	◇	縄(後)歴史	◇	縄文土器片、土師器	◇	
24	細尻	小泉字細尻30	◇	◇	歴史	◇	土師器片	◇	
25	商橋館	商橋字横館6	◇	館跡	中世~近世	◇			
26	法師岡館	法師岡宮田向93	◇	◇	◇	◇	土師器		
27	昼巻沢	枕木字	◇	◇	縄(早・後)		縄文土器、石器、ピット	県 教 委	昭和56、57年発掘調査

〈階上町〉

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
1	野場(1)	金山沢字野場53	台地	包含地	縄(後・晩)	宅地 畑 山林	(壺形)土器片、石匙		
2	野場(2)	金山沢字野場53	台地(斜面)	◇	縄(前~晩)	荒地	縄文土器片、石鏃	階上 町 教育委員会	
3	下古里(1)	小舟渡字下古里	台地	◇	縄(早・前・晩)	畑	(爪形文)土器片、(無文)土器片、(燃糸圧痕文)土器片、石鏃	階上 町 教育委員会 八戸水産高 社会科資料室	

第5表 周辺の遺跡地名表(1)

注：縄は縄文時代を示す

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
4	下古里(2)	小舟渡字下古里	台地	包含地	縄(早・前)	畑	縄文土器片	階上町 教育委員会	
5	滝端	登切字滝端	◇	◇	縄(中・後)	◇	縄文土器片	登切小学校 階上町 教育委員会	
6	道添	道仏字道添	◇	◇	縄(後・晩)	◇	縄文土器片、土偶、敲 石片	階上町 教育委員会	
7	与伝	金山沢字与伝33 (河岸段丘)	台地	◇	縄(後・晩)	◇	(注口)土器片、(壺 形)土器片	金山沢小学校	
8	尼寺沢	道仏字尼寺沢	丘陵 (斜面)	◇	縄(中・後)	水田 山林	(円筒上層式)土器片		
9	程熊(1)	道仏字荒谷64	丘陵 (斜面)	◇	縄(前・後)	山林 畑	(円筒上層式他)土器 片、石斧、石鏃、石匙	階上町 教育委員会	
10	程熊(2)	道仏字荒谷64	丘陵 (斜面)	◇	縄(前)	山林 畑	縄文土器片	◇	
11	上明戸	角柄折字上明戸 3	丘陵 (斜面)	◇	縄(早・中・後)	畑	(貝殻文)土器片、石 斧、石匙	階上町 教育委員会 明戸吉松	
12	中田	角柄折字中田	丘陵 (斜面)	◇	縄(後)	牧草地	縄文土器片、石皿	階上町 教育委員会	
13	鹿藏窪(1)	道仏字鹿藏窪 (河岸段丘)	台地	◇	縄(後・晩)	荒地	縄文土器片	◇	
14	鹿藏窪(2)	道仏字鹿藏窪 (河岸段丘)	台地	◇	縄(後)	畑	縄文土器片	◇	
15	引敷林	平内字引敷林	台地 (斜面)	◇	縄(早~晩)	畑	(爪形文)土器片、独 鈷石、石匙、土偶	◇	
16	蝙蝠	角柄折字蝙蝠 (舌状)	台地	包含地	縄文 古墳	山林	縄文土器片、土師器片、 竪穴住居跡	階上町 教育委員会	
17	鹿糠	赤保内字鹿糠	台地	◇	縄(後・晩) 古墳	畑	縄文土器片、土師器片	◇	
18	姥沢	鳥谷部字姥沢	台地	◇	縄(後)	山林	縄文土器片	◇	
19	横沢	道仏字横沢	台地	◇	縄(中・後)	畑		◇	
20	寺下	赤保内字寺下 (舌状)	台地	◇	縄(晩)	畑 草地	(壺形)(台付鉢形) (鉢形)土器片 土偶	桑原	
21	白座	道仏字白座窪	台地 (斜面)	◇	縄(前・中・後)	畑	(円筒式)土器片、石 斧	階上町 教育委員会	
22	山館(1)	赤保内字山館	山地 (斜面)	包含地	縄(中・後・晩)	山林 牧草地	縄文土器片、石鏃	階上町 教育委員会	

第 5 表 周辺の遺跡地名表(12)

注：縄は縄文時代を示す

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
23	山館(2)	赤保内字山館	台地	包含地	古墳	山林	土師器片、支脚、竪穴住居跡	階上町教育委員会	
24	小舟渡灯台	道仏字21	台地 (海岸段丘)	〃	縄(晩)	草地	縄文土器片	〃	
25	榊山	道仏字榊山	台地 (海岸段丘)	〃	縄(後・晩)	畑	縄文土器片、石鏃	〃	
26	泉田窪	道仏字泉田窪	台地	〃	縄(中・後)	〃	縄文土器片、礫器、古銭	〃	
27	沢前戸	道仏字沢前戸	台地	〃	縄(後・晩)	〃	縄文土器片、敲石、磨石	〃	
28	志民(2)	角橋字志民			縄(早・前・後) 江戸		縄文土器、石器、人骨、寛永通宝、墓坑	県教委	昭和55年発掘調査、県埋文65集

<南郷村>

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
1	下山	島守字崩向10	台地 (河岸段丘)	住居跡	歴史 (奈良・平安)	山林	土師器片、焼石	春日 信興	
2	畑内	島守字畑内4	台地 (河岸段丘)	包含地	縄(前~晩)	畑	縄文土器片、石斧、石鏃、石皿、石鏟	〃	
3	市野沢笹子	市野沢字笹子15	台地 (斜面)	〃	縄(後・晩)	畑	(壺形)土器片、(注口)土器片	若室 清吉	
4	花花沢	島守字江花沢	台地 (斜面)	〃	古墳	畑	土師器、須恵器	音喜多 富寿	
5	高山(1)	島守字高山4~7	台地 (斜面)	〃	縄(早・前・晩)	畑	(円筒下層式)土器、(大洞A式)土器、(貝殻文)土器	市川 金丸 島守中学校	
6	高山(2)	島守字小林25	台地 (斜面)	〃	縄(前~晩) 古墳	畑	縄文土器片、土師器	南郷村教育委員会	
7	高山(3)	島守字門前22の2	台地 (斜面)	〃	縄(中)	畑	縄文土器片	〃	
8	荒谷	島守字下荒谷4の2	台地 (河岸段丘)	〃	縄(前~晩) 弥生 歴史	畑 水田	(円筒下層a、b式、円筒上層a、b式、大洞B、B C、A、A'、C式)釣子壺形注口土器片、土偶、土器器、人骨、石皿他、弥生土器	島守小学校 島守中学校 東大理学部 人類学教室 慶応大学 考古学研究室	57年郷土館特別展、展示弥生土器
9	三合山	市野沢字三合山	台地 (斜面)	〃	縄(後・晩)	畑 山林	(鉢形)土器片、土偶、住居跡ピット	王生 邦弘 県教委	昭和55年県発掘調査、県埋文第69集
10	松石橋	島守字松石橋9番地	台地 (斜面)	〃	縄(中・後・晩)	畑	縄文土器片、縮縮形大珠	南郷村役場	
11	田屋久保	中野字田屋久保4の1	台地 (舌状)	〃	縄(晩)	畑 宅地	(壺形・深鉢形)土器、石棒	小林 西松 小林定次郎	

第5表 周辺の遺跡地名表(13)

注：縄は縄文時代を示す

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
12	中野	中野字館の下	丘陵 (端)	包含地	古墳	水田 山林	土師器片	工藤 文	
13	田ノ沢	市野沢字田ノ沢	台地	◇	縄(後・晩)	山林	頸飾	春日 信典	
14	砂子崎	大森字砂子崎24	台地	◇	縄(後)	畑	縄文土器片	南郷村 教育委員会	
15	大森西山	大森字西山	台地	◇	縄(後・晩)	畑	(甕形)土器片、 (壺形)土器片	岡堀 寅男 南郷村 教育委員会	
16	泉清水(1)	泉清水字大沢		◇	縄(後)	畑	(鉢形)土器片		
17	泉清水(2)	泉清水字大久保	丘陵 (頂)	◇	縄文 古墳	山林	竪穴住居跡、 空窯跡(三重)		
18	泉清水(3)	泉清水字居守渡 (河岸段丘)	台地	◇	縄(後・晩)	畑	縄文土器片	南郷村 教育委員会	
19	千日沢	中野字千日沢	台地	◇	縄(後・晩)	畑	縄文土器片	◇	
20	八地役	中野字八地役	台地	◇	縄(後・晩)	畑	縄文土器片	◇	
21	下洗	中野字大久保	丘陵 (斜面)	◇	縄(後)	水田 山林	(注口)土器片、 (壺形)土器片	壬生 信吉 貝付 俊一	
22	沢口	市野沢字沢口	台地	◇	縄(後)	畑	縄文土器片	南郷村 教育委員会	
23	下坂	市野沢字下坂	丘陵 (斜面)	◇	縄(後・晩)	◇	縄文土器片、石鏃、石 斧	◇	
24	増田(1)	島守字坂の沢13	丘陵 (端)	◇	縄(後・晩)	水田 山林	(甕形、大洞B、C 式)土器片、石匙	◇	
25	増田(2)	島守字提森	丘陵 (端)	◇	縄(後・晩)	牧草地 畑	縄文土器片、石匙	◇	
26	増田(3)	島守字沢館	丘陵 (端)	◇	縄文	山林	縄文土器片		
27	狄館(1)	島守字井戸尻2	丘陵 (頂)	◇	縄(後・晩) 古墳	牧草地	(十腰内式、大洞式他) 土器片、石皿片、磨石片、 土師器片、竪穴住居跡	南郷村 教育委員会	
28	狄館(2)	島守字坂の上1	台地	◇	縄(早・晩)	畑	(貝殻文、物見台式) 土器片		
29	野場(1)	島守字長坂長根 7	丘陵 (端)	◇	縄(後・晩)	◇	縄文土器片、石匙	南郷村 教育委員会	
30	野場(2)	島守字長坂長根 5	台地	◇	縄(後・晩)	◇	縄文土器片、石斧、石 鏃	◇	

第 5 表 周辺の遺跡地名表(14)

注：縄は縄文時代を示す

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
31	四ッ役	島守字四ッ役	丘陵 (斜面)	包含地	縄(中・後) 古墳	牧草地	縄文土器片、土師器	南郷村 教育委員会	
32	持金沢	島守字持金沢	丘陵 (斜面)	◇	縄(後・晩)	畑	縄文土器片	◇	
33	田ノ上	島守字田ノ上	丘陵 (斜面)	◇	縄(後・晩)	山林	縄文土器片、石斧、ピ ット	◇ 県教委	昭和55年発掘調査、県埋文第65集
34	馳下り(1)	島守字馳下り	丘陵 (斜面)	◇	縄(中・後・晩)	畑	(円筒式)土器片、石 斧	南郷村 教育委員会	
35	馳下り(2)	島守字馳下り	丘陵 (斜面)	◇	縄(後・晩)	牧草地	縄文土器片	◇	
36	馳下り(3)	島守字馳下り	台地 (斜面)	◇	縄(後・晩)	畑	縄文土器片、石斧	◇	
37	外長根	島守字外長根40	丘陵 (斜面)	◇	縄(後・晩)	畑	縄文土器片、礫器	◇	
38	駒木沢	島守字駒木沢	丘陵 (斜面)	◇	縄(後・晩)	畑	縄文土器片、異形土製 品、未完成石器	◇	
39	多越	島守字古里多越	山地 (頂)	◇	縄(後)	山林	縄文土器片	◇	
40	若宮	島守字若宮14	台地 (斜面)	◇	縄(中・後)	畑	縄文土器片	◇	
41	壳井坂	島守字壳井坂	丘陵 (斜面)	◇	縄(後)	畑 山林	縄文土器片、石槍	◇	
42	田代	島守字番屋	台地 (斜面)	◇	縄(中・後)	畑	縄文土器片	◇	
43	下荒谷	島守字下荒谷7	台地	◇	縄(中)	畑	縄文土器片、石鏃	◇	
44	向山	島守字向山根黒 13	台地 (河岸段丘)	◇	縄(前)	山林	(円筒下層式)土器片	上村 四郎	
45	十文字	島守字十文字20 の1	台地	◇	縄(中)	畑 宅地	(円筒上層c式)土器片	角金万次郎 南郷村 教育委員会	
46	石橋	島守字石橋	◇	◇	縄(前・中)	畑	(円筒下層d式)土器片		
47	駒坂	島守字駒坂9の 1	◇	◇	縄(前・中)	畑 宅地	縄文土器片、石鏃	南郷村 教育委員会	
48	島守館跡	島守字館	◇	◇	縄(中・後)	畑	縄文土器片	南郷村 教育委員会	
49	南郷村 一里塚(1)	頃巻沢字長久保 19-1	丘陵	一里塚	近世	畑			

第5表 周辺の遺跡地名表(15)

注：縄は縄文時代を示す

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
50	南郷村 一里塚(2)	市野沢字新田28	台地	一里塚	近世	山林			
51	南郷村 一里塚(3)	中野字大久保22	◇	◇	◇	◇			
52	南郷村 一里塚(4)	大森字林崎36	◇	◇	◇				
53	南郷村 一里塚(5)	大森字砂子崎52	◇	◇	◇	山林			
54	馬場瀬(1)	市野沢字馬場瀬 41	◇	包含地	縄(早・後)	畑 山林		県埋文センター	昭和55年発掘調査 県埋文第70集
55	馬場瀬(2)	市野沢字馬場瀬 26	◇	◇	縄(早・晩)	◇		◇	◇
56	石ノ窪	市野沢字石ノ窪 13	◇	◇	縄文 歴史	畑		◇	昭和55年発掘調査 県埋文第69集
57	右エ門 次郎窪	市野沢字右エ門 次郎窪13-22	◇	◇	縄(晩)	山林		◇	◇
58	外長根(1)	島守字外山根23	◇	◇	縄(中-晩)	畑		◇	昭和55年発掘調査 県埋文第64集
59	外長根(4)	島守字外山根 5	◇	◇	◇	◇		◇	◇
60	外長根(5)	島守字外山根 18	◇	◇	◇	◇		◇	◇
61	前平(2)	島守字前平23	◇	◇	縄(晩)	◇		◇	◇
62	鴨平(1)	泥降作字金引沢	◇	◇	縄(早-晩)	◇		◇	昭和56年発掘調査 県埋文第72集

<福地村>

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
1	西久根	福田字西久保51	台地 (河岸段丘)	包含地	縄(前・中)	畑	(円筒下層d、b式)土器 (円筒上層a、b式)土器	田中藤次郎 田中新助 名久井農業高校	田中藤次郎「福地村郷土誌」S. 46
2	矢崎館	福田字矢崎館 の1	台地 (河岸段丘)	◇ 館跡	縄(後) 歴史	畑	縄文土器、土師器		
3	源次郎平 (1)	福田字源次郎平 7	台地 (河岸段丘)	◇	縄(後)	宅地	縄文土器	福地中学校	
4	源次郎平 (2)	福田字源次郎平	台地 (河岸段丘)	◇	歴史	宅地	須恵器	◇	



第 5 表 周辺の遺跡地名表(16)

注：縄は縄文時代を示す

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
5	館	埴波字館9	台地 (河岸段丘)	包含地	縄(後)	畑	(十腰内1式)土器片		
6	西張(1)	法領岡字西張42-6	台地 (河岸段丘)	〃	縄(晩)	水田	縄文土器	沢向長次郎	
7	西張(2)	法領岡字西張58	台地	散布地	縄(後)	畑	縄文土器	福地村 教育委員会	
8	埴波	埴波字花渡24	台地	包含地	縄(後・晩)	畑 宅地	(大洞B、BC式)土器、土偶	福地村 中央公民館 佐々木治三郎	音喜多富寿「八戸市周辺の遺跡地名表」八戸市文化財シリーズ]
9	佐伝窪	埴波字佐伝窪2	台地	〃	縄(後)	水田	(釣手)土器、(注口)土器	田中 新助 音喜多富寿	〃
10	長地嶺	埴波字長地嶺24	丘陵 (斜面)	〃	縄(後)	原野	縄文土器		
11	館野	苦米地字館野	丘陵 (斜面)	〃	縄(後)	畑	(門筒下層d式)土器、 (上層式)土器		
12	北向	麦沢字北向4	台地 (斜面)	〃	縄(後)	畑	(十腰内1式)土器、石器	島守金次郎	
13	雷	苦米地字雷1	台地 (斜面)	〃	縄(後)	畑	(十腰内1式)土器		
14	西山	苦米地字西山1-2	台地 (斜面)	〃	縄(後)	畑	縄文土器		
15	下木戸場	麦沢字下木戸場9-93	台地 (斜面)	〃	縄(前)	畑	(門筒下層d式)土器		
16	カッテウ	埴波字カッテウ14-2	丘陵	散布地	縄(後・晩)	畑	縄文土器片	福地村 教育委員会	
17	放森	埴波字放森10-17-1	〃	〃	縄(後・晩) 歴史	畑	壺形土器片、土師器片	藤島幸次郎	
18	牛墓	杉沢字牛墓5	〃	〃	縄(後・晩) 歴史	畑	縄文土器片、土師器片		
19	漆山	杉沢字漆山7-1	〃	〃	歴史	畑	土師器片	福地村 教育委員会	
20	天獅子	杉沢字天獅子16	〃	〃	縄(後) 歴史	畑	縄文土器片、土師器片	〃	
21	小松沢下平	小泉字小松沢下平26	〃	〃	縄(晩)	畑	縄文土器片	〃	
22	中沢田	鳥舌内字中沢田5-7	台地 (斜面)	〃	縄(後)	果樹園	縄文土器片		
23	西山	法光寺字西山12-16-1	台地 (斜面)	〃	縄(中・後) 歴史	畑 山林	縄文土器片、土師器	名川町 教育委員会	



第5表 周辺の遺跡地名表(17)

注：縄は縄文時代を示す

No	遺跡名	所在地	立地	種別	時代	地目	出土品・遺構	保管先	文献・その他
24	虚空蔵	平字虚空蔵10の1	丘陵(端)	包含地	縄(後・晩)	校有地 宅地	(大冨c <sub>1</sub> , c <sub>2</sub> 式他) 土器片、土偶、人骨、貝塚、住居跡、石器	慶応大学 考古学研究室 名川町教育委員会	虚空蔵遺跡発掘調査報告書
25	野月	上名久井字野月24の2	台地	〃	縄(後) 弥生(紡縄文)	畑 宅地	縄文土器片、弥生式土器片、土師器片	名川町 教育委員会	
26	在家	上名久井字在家	〃	〃	縄(後)	畑	縄文土器片	〃	音喜多富寿編「青森県八戸市周辺における遺跡遺物地名表」八戸市教育委員会
27	六十六枚	上名久井字六十六枚	丘陵	散布地	縄(晩) 歴史	〃	縄文土器片、土師器	〃	
28	館向	上名久井字館向	〃	包含地	縄(後)	〃	縄文土器片	〃	音喜多富寿編「青森県八戸市周辺における遺跡遺物地名表」八戸市教育委員会
29	沼端	法光寺字沼端	〃	散布地	縄(後)	〃	縄文土器片	〃	
30	法光寺平	法光寺字法光寺平	〃	〃	歴史	〃	土師器、須恵器片、集落跡	〃	
31	法光寺小学校	法光寺	丘陵(斜面)	〃	縄(後) 歴史	草地	縄文土器、土師器	〃	
32	水沢	法光寺字水沢48-75	丘陵	〃	縄(中・後) 歴史	宅地 畑	縄文土器片、土師器	〃	
33	前館	法光寺字前館6-1	台地	〃	縄(中・後) 歴史	果樹園	縄文土器片、土師器、須恵器	〃	
34	市ノ渡	法光寺字市ノ渡3-1	〃	包含地	縄(前・中)	水田	縄文土器片		
35	上水沢	法光寺字上水沢	丘陵(端)	〃	縄文	果樹園	縄文土器片		
36	水上	鳥舌内字水上9-14	台地(河畔段丘)	散布地	縄(前・中・後)	畑	縄文土器片	名川町 教育委員会	
37	作和	鳥舌内字作和13-1	台地	〃	縄(後)	〃	縄文土器片	〃	
38	高屋敷	高屋敷16-2	丘陵(端)	〃	縄(後)	〃	縄文土器片	〃	
39	官代	鳥舌内字官代18-2	丘陵(端)	〃	縄(後)	宅地	(壺形) 土器片、 (椀形) 土器片	〃	
40	外林	鳥舌内字外林1	丘陵(端)	包含地	縄(後・晩)	果樹園 水田	縄文土器片	〃	

## 調査の概要

### 1 調査の概要

本遺跡では、昭和54年度に青森県教育委員会が、分布、試掘調査を実施して、第 層に縄文時代早期の尖底土器が包含されていることを確認していた。しかし試掘調査は、南郷村の地籍分（発掘調査の際A地区と仮称）だけで行なわれたので、今回の発掘調査においては対象地区内からより多くの縄文時代の尖底土器が出土することが予想された。

調査は、グリッド法と分層発掘法に基づいて行った。調査対象面積は、12,800m<sup>2</sup>と広大であるため、調査地区を便宜上3分割して、南端からA、B、C地区と仮称した。

調査地区の基本土層は、30～180cmまで掘り下げ8層に分層した。表土から第 層（八戸火山灰層の上位面）までの発掘面積は6,720m<sup>2</sup>である。基本土層の実測は、A地区では14ラインとSライン、B、C地区ではMラインと41ラインで行った。基本土層には、中掬浮石層（通称、アワズナ）、南部浮石層（通称、ゴロタ）、八戸火山灰層などの火山碎屑層が認められたが、南北の傾斜地では、基本土層の堆積とは異なるところもあった。

検出した遺構は、溝状ピット7基、円形・フラスコ状ピット4基、小規模な土壇15基、計27基である。これらの遺構は、立地の状況から3群に分けることができた。

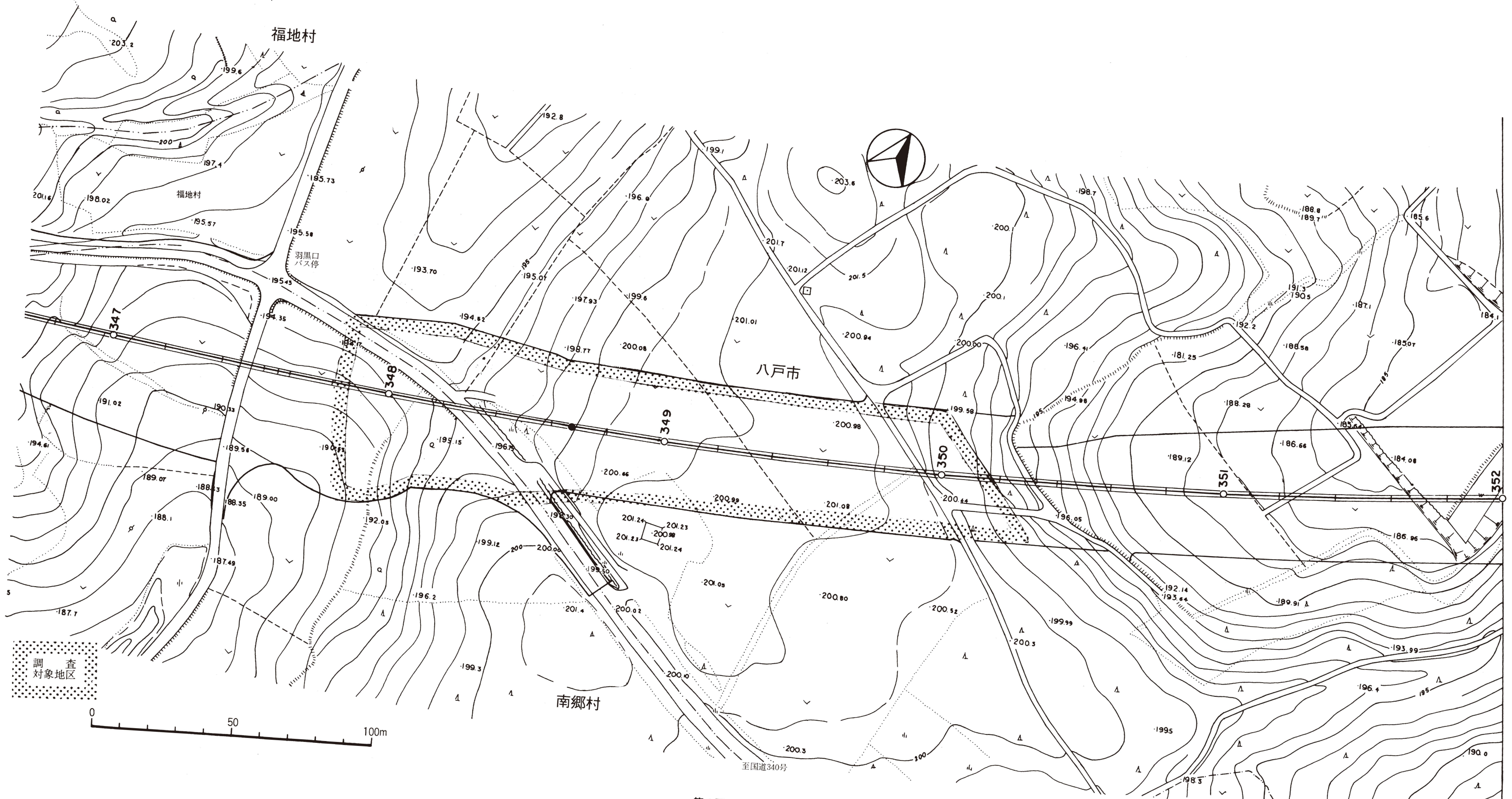
出土した遺物は、縄文時代早期、後期及び晩期の土器片435点、一部接合して器形の知れる土器4点、土製品1点、石器類19点、歴史時代の土器数点のほか、かんざし、寛永通宝などの金属製品も出土した。縄文土器の多くは細片で、数量的には後期初頭のものが多い。

### 2 調査方法

#### (1) 調査区の設定

調査を計画的に進めるため、S T A 348 + 60と349 + 00（高速道路の中心杭）を結ぶ線を南北方向の基準線とし、これに直交する線を東西方向の基準線と定めた。南北基準線は、真北37度東で、調査地区全体に4 m × 4 mのグリッドを設定したが、杭は8 mごとに打った。調査地区の南端は、S T A 347 + 80であるが、拡張することも考えられたので、S T A 347 + 49を<sup>0</sup>ラインとして、北へ向けて1～75の番号を付し、東西方向は、西から東に向けてアルファベットを付した。グリッド名は、アルファベットと番号を組み合わせで呼称したので、グリッド名は南西隅に位置した杭である。

調査地区は、南北がほぼ250m、東西が45～68mで細長いいため、便宜上、3分割した。県道の南側（南郷村分）をA地区（2,800m<sup>2</sup>）、S T A 349（道路の中心杭）の南側をB地区（4,000m<sup>2</sup>）、北側をC地区（6,000m<sup>2</sup>）と仮称した（第6図参照）。



第4図 鴨平(1)遺跡地形図



## (2) 発掘調査方法

具体的には、グリッドの設定、表土の粗掘り、中撤浮石層上面までの遺構確認と遺物の取り上げを順次行った。その後、八戸火山灰層（ローム・地山）まで、必要な限り掘り下げた。

遺構を確認した場合は、確認状況の写真撮影、精査、実測、遺物の取り上げ及び完掘写真の撮影を行った。遺物、遺構が出土した場合は、同一層面で周囲のグリッドまで拡張し、層位ごとに精査した。遺物、遺構が出土しない場合でもグリッド（4 m × 4 m）の4分の1（4 m<sup>2</sup>）は八戸火山灰層上面まで掘り下げた。

遺構の番号は、確認順に通し番号を付けたが、精査の結果、遺構と判断できなかったものは欠番とした。精査は、2分法による分層発掘を多用した。そして、遺構完掘後“ダム押し”を行った。遺構の平面実測は、遣り方で行い、縮尺は1/10、1/20を原則とした。A、B、C地区ごとに、土層の堆積状況を観察、実測するため、セクションベルトを設け、深掘りを行った。自然堆積土はローマ数字（Ⅰ、Ⅱ～Ⅴ）、遺構覆土には算用数字（1、2～Ⅴ）を付して注記した。遺物の取り上げについては、表土の粗掘り中に出土した遺物は、グリッド単位に取り上げることを原則としたが、必要に応じて平面図を作成し、遺物台帳に記録した。表土より下層の遺物は、各層ごとに出土位置、レベルなどを記録した。また、遺物や出土状況に応じて微細図を作成し、写真（モノクロ、カラーズライド）撮影した。遺物は、種類に応じて色別遺物カードを使用した。写真撮影については、35ミリのカメラ2台を使用してモノクロとカラーズライド用フィルムを装填した。

撮影の前に、遺跡名、被写体、撮影方向などを記載した小黒板を撮って、写真の整理に利用した。

地質、石材等の鑑定は、調査員、松山 力氏に依頼した。

## 3 調査経過

発掘調査を開始する前に、作業員に対して調査に関する説明会を行い、また、縦貫道関係5遺跡の調査関係者が合同で打合せ会議を開催した。

4月20日、調査器材運搬車と前後して現地に入り、4月23日から実施する調査の準備を整え、調査地区を、便宜上南端からA地区、B地区、C地区（第6図参照）と仮称することなど打ち合せを行った。

調査は、A地区の抜根と立木処理から始まり、同時にグリッドの杭打ち作業を行った。次に、基本土層観察、実測用アゼを残して粗掘りに移った。試掘調査の際、第Ⅰ層から土器が発見されたグリッドを中心として、基本土層ごとに掘り下げた。A地区の基本土層観察実測用溝は、Sラインと14ラインに設定した。

5月15日、Q-22グリッド付近で第1号遺構（溝状ピット）を確認し、精査に着手した。遺物は全般的に少ない。5月下旬からC地区の基本杭打ちを開始した。この頃、A地区では粗掘りが終り、第 〃 層の掘り下げとSライン土層観察実測用溝掘り作業に移った。

6月初旬、A地区の遺構検出と第 〃 層の遺物包含層確認作業が終り、作業員はC地区に移動した。検出遺構は、3基である。

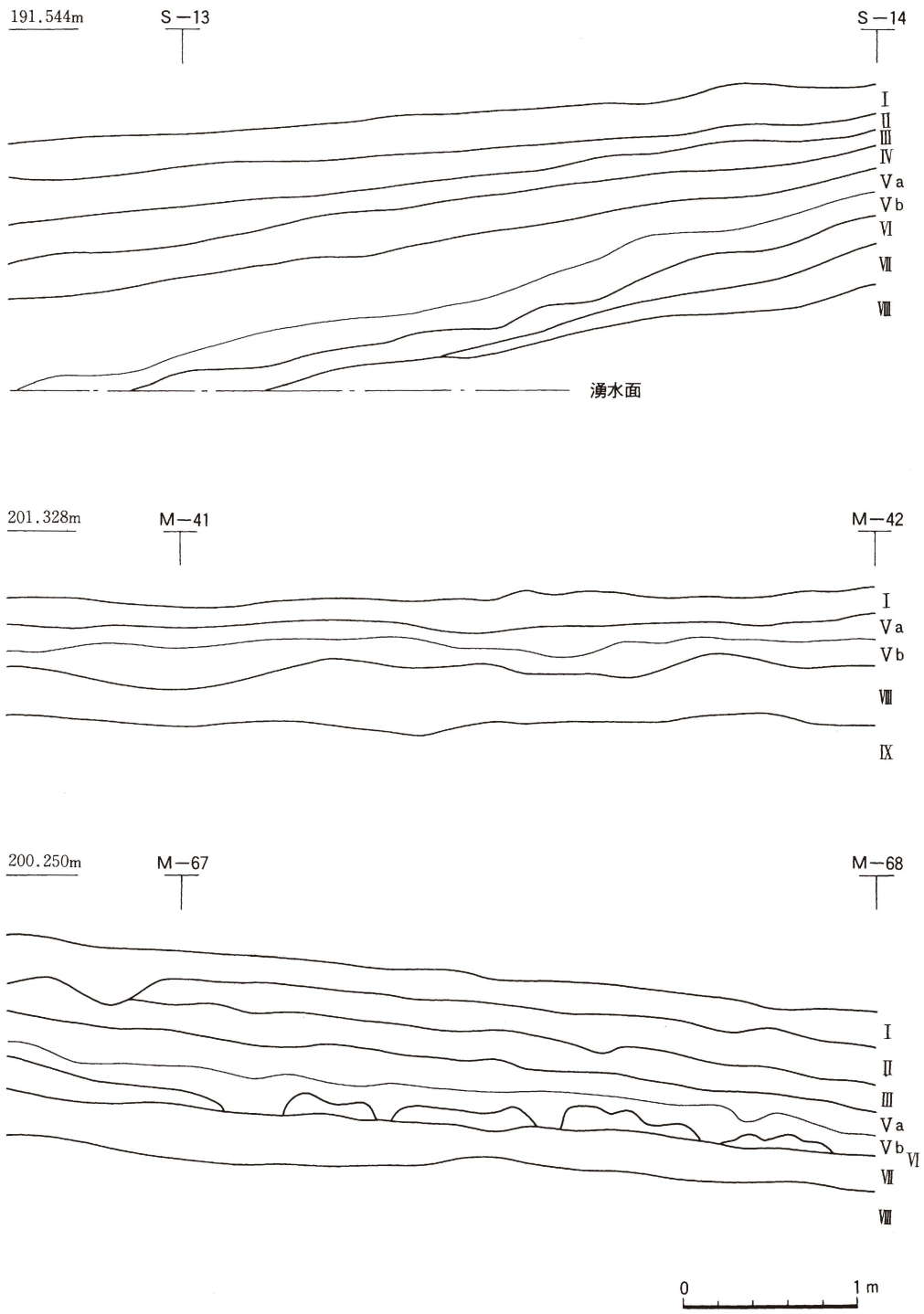
C地区は、抜根作業後粗掘りに入り、7月中頃に終了した。検出した遺構は13基で、引き続き南部浮石層、八戸火山灰層上位面までの深掘りを行った。C地区の調査完了後、B地区の粗掘り、遺構確認、精査、写真撮影、遺物の記録と取り上げなどを、一部A、C地区と併行して実施したが、検出遺構は9基であった。9月末と10月下旬に重機とダンプカーを利用して排土の運搬、埋め戻しを行い、調査が終了したのは10月31日であった。（北林）

#### 4 遺跡の基本土層

調査地区内の堆積土は、次のように区分される（第5図）。

- 第 〃 層 表土層
- 第 〃 層 黒褐色土層 十和田b火山灰を含む。
- 第 〃 層 暗褐色土層 下位に中礫浮石を少量含む。
- 第 〃 層 中礫浮石層
- 第 a 層 黒褐色土層 南部浮石を少量含む。
- 第 b 層 黒褐色土層 南部浮石を多量に含む。
- 第 〃 層 南部浮石層
- 第 〃 層 暗褐色土層
- 第 〃 層 褐色土層 （八戸火山灰層上部の風化層）
- 第 〃 層 八戸火山灰層

ただし、以上の各層が整然と堆積しているのは、調査地区両端の傾斜地下位に限られる。調査区北東寄りの平坦面及び斜面上部では第 〃 層を欠き、また、第 〃 層は表土に混在する部分が多く層位区分が不可能である。したがって、調査区の大部分では、層位的な面から遺構及び遺物の時期を推定することが困難である。（工藤 大）



第5図 鴨平(1)遺跡調査地区の土層



## 検出遺構と遺物

### 1 概要

検出遺構の多くは、中礫浮石層（第 層）上位面で確認できた。全遺構の分布は、第 6 図に図示したが、立地の状況等勘案すると、遺構は A, B, C の 3 群に大別できそうである。覆土中に遺物を伴う遺構が少なく、時期を決定し得ないものが多い。

検出した遺構は、風倒木痕あるいは根跡と認められたものを除くと、総数 27 基である。なお、遺構番号の 11, 25, 29~33 は欠番とした。

27 基の遺構は、平面形と断面形の形状によって次のように分類し、遺構の種類ごとに記載する。

- (1) 溝状ピット 平面形、断面形が細長い類。第 1, 3, 6, 7, 8, 23, 24 号遺構の 7 基。
- (2) 円形・フラスコ状ピット 平面形が円形で、断面形がフラスコ状、深鉢状、円筒状である類、底面にピットをもつ類を含む。第 4, 5, 18, 27 号遺構の 4 基。
- (3) 小土壌 平面形が不定で、規模が前記(1)(2)よりも小規模なもの。第 2, 9, 10, 12, 13, 15~17, 19~22, 28, 34, 35 号遺構の 15 基。
- (4) 形状不詳ピット 調査地区外に、全体の 2 分の 1 以上があつて形状が不詳な類。

### 2 溝状ピット

第 1 号遺構（第 7 図，第 6 表，図版 10）

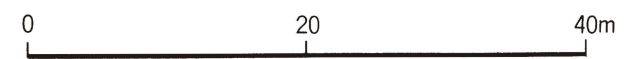
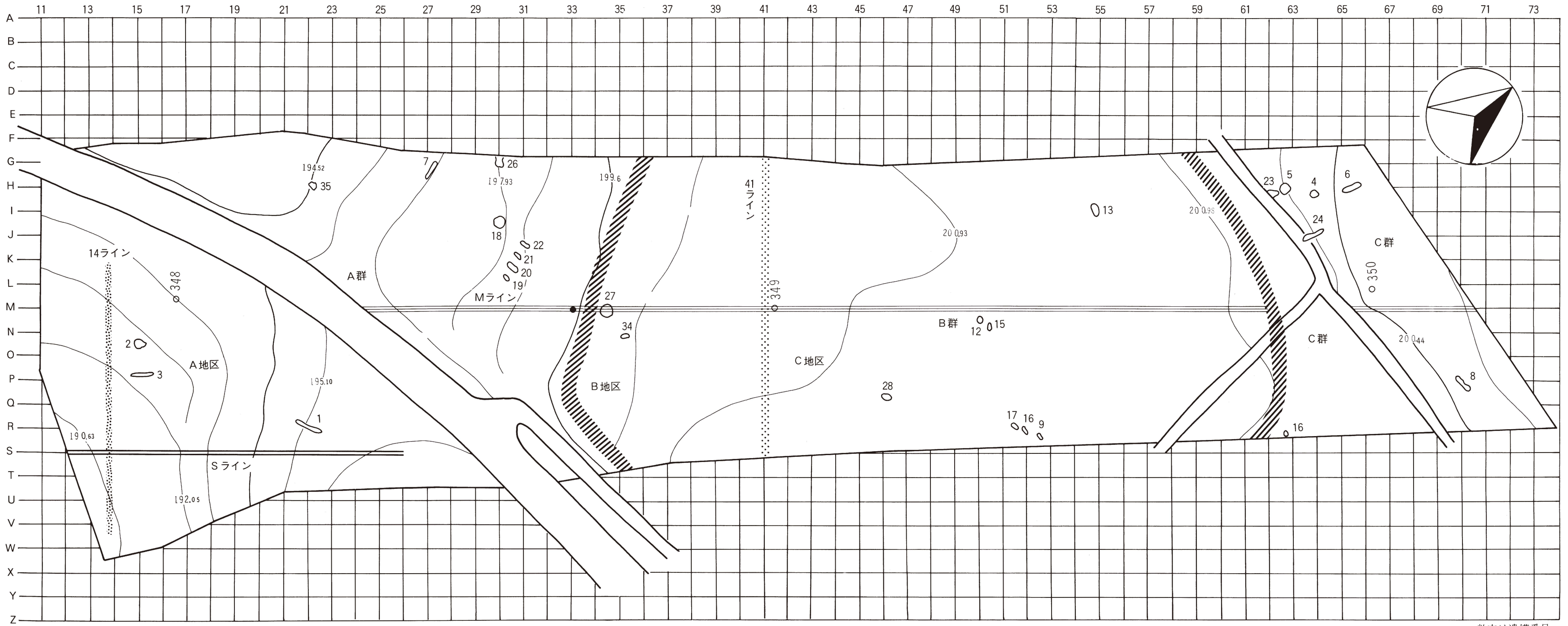
調査地区南端にある A 地区傾斜面上の Q - 21, 22, R - 22 区において検出した。

確認面は、第 層下面，第 層上位面であり，計測値は，第 6 表に示してある。7 基検出した溝状ピットの中で最も長い径をもつ。平面形は葉巻形，長軸方向の断面形は袋状で，短軸方向の断面形は三味線の「バチ」に似た Y 字状である。壙底面は，長軸方向に若干張り出している，覆土は，5 層に区分できた。遺物は出土しなかった。

第 3 号遺構（第 7 図，第 6 表，図版 11）

第 1 号遺構と同様，A 地区の南に面する傾斜地の O - 14 と O - 15 において検出した。

第 層（中礫浮石層）から掘り込まれた遺構であるが，試掘調査のトレンチと重複していたため，開口部の大部分は欠失していた。そのため，平面形，断面形については不明であるが，壙底面は，第 層よりも下位の土層まで掘り下げられていた。覆土は 6 層に区分できた。規模



数字は遺構番号

第6図 鴨平(1)遺跡遺構分布・基本土層実測位置図

の計測値は、第6表に示してある。遺物は出土しなかった。

#### 第6号遺構（第7図，第6表，図版11）

調査地区北側にあるC地区の傾斜地のH - 64, 65, G - 65区において検出した。確認面は、第層上位面である。計測値は第6表に示してあるが、本遺跡で検出した溝状ピットのなかでは、開口部長径が短い類に入る。

平面形は長楕円形、短軸断面形は「Y字」状である。壙底部は、長軸方向に40cmほど張り出している。覆土は、7層に区分できた。遺物は出土しなかった。

#### 第7号遺構（第8図，第6表，図版12）

B地区の南に面する傾斜地のF - 27, G - 26, 27区において検出した。確認面は、第層（中掘浮石層）相当面であるが、斜面のため中掘浮石層の堆積は明瞭でなかった。計測値は第6表に示したが、本遺構の特徴は、長軸方向が他の溝状ピットと異っていることと、壙底面の短軸が最も狭い点である。平面形は、長楕円形、短軸断面形は、「Y字」状である。覆土は9層に区分できたが遺物は出土しなかった。

#### 第8号遺構（第8図，第6表，図版13）

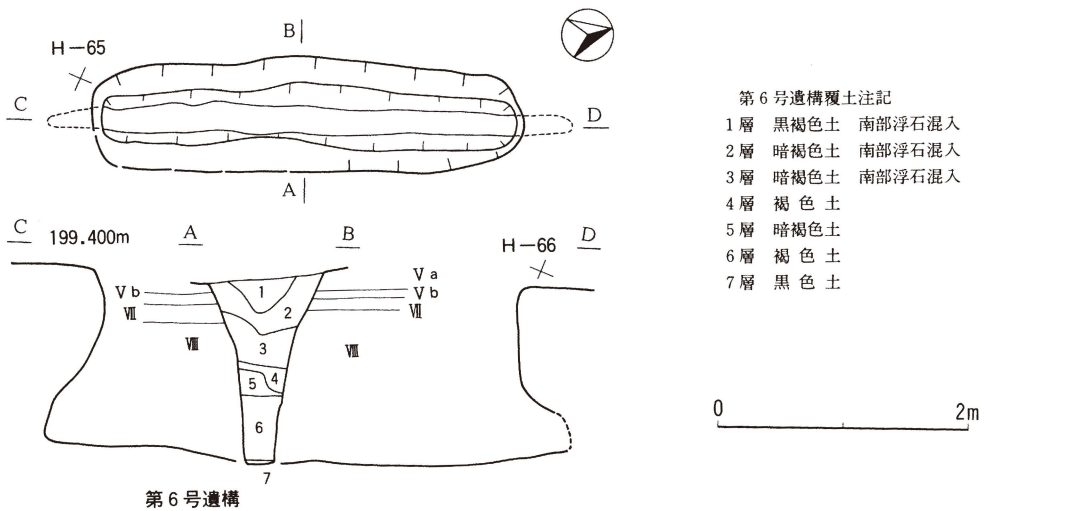
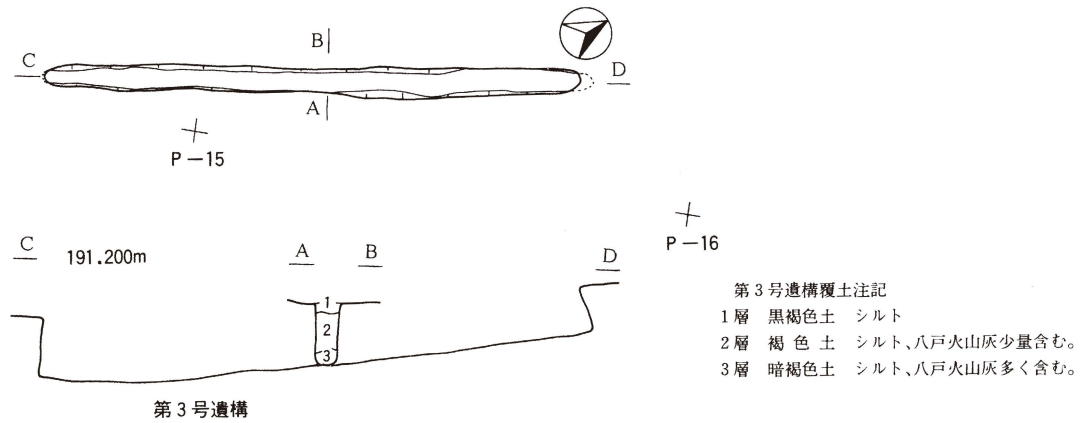
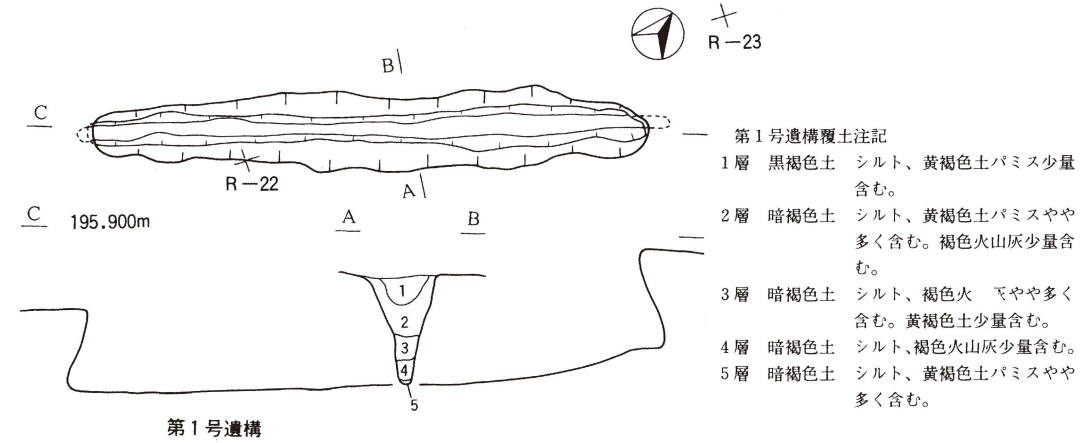
C地区の、約10mの比高差をもって北方に傾く斜面のO - 69, P - 69, 70区において検出した。確認面は「Y字」状を呈する。壙底面は、長軸方向に約40cm張り出し袋状となっている。計測値は第6表に示した。覆土は、11層に区分できたが、自然堆積したものとみられる。遺物は出土しなかった。

#### 第23号遺構（第8図，第6表，図版13, 14）

C地区のH - 61, 62区から検出した。第層上位面で落ち込みを確認したが、農道と交錯していたため、遺構の南側約3分の1は調査できなかった。したがって、平面形は不詳であるが、およそ葉巻形とみられ、短軸断面形は、「Y字」状に近い。検出した溝状ピットのなかでは最も深く掘り込まれた遺構である。計測値は第6表に示した。

本遺構の特色は、ピット開口部が南部浮石の混じった黄褐色粘土質火山灰土（ローム）によって厚さ40cmほど人為的に埋められていたことである。また、覆土は9層に区分できたが、ブロック状で、第24号遺構の堆積と類似していた。遺物は出土しなかった。

#### 第24号遺構（第9図，第6表，図版14, 15）

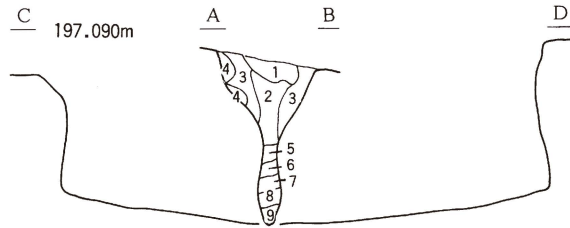
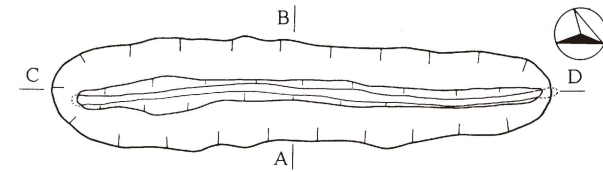


第7図 第1、3、6号遺構実測図

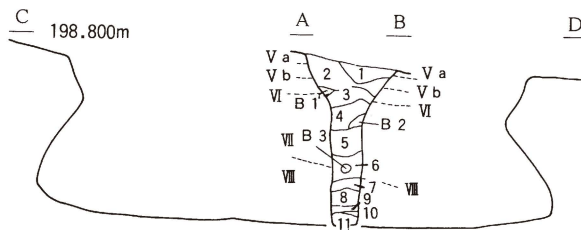
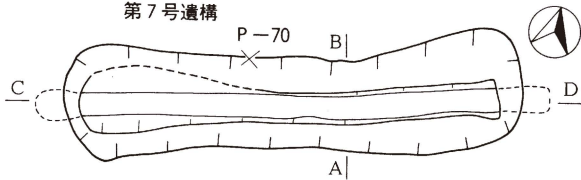
0 2m



×  
G-27



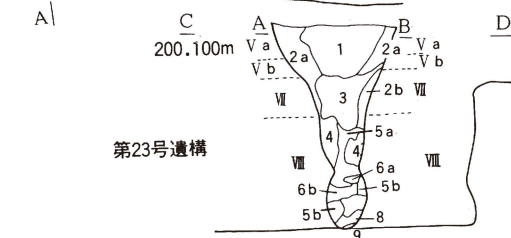
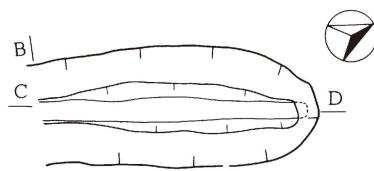
第7号遺構



第8号遺構

+

H-62



第23号遺構

+

I-62

第8図 第7、8、23号遺構実測図

第7号遺構覆土注記

- 1層 黒褐色土 南部浮石微量混入。
- 2層 暗褐色土 南部浮石混入。
- 3層 褐色土 南部浮石混入。
- 4層 明褐色土 南部浮石混入(第Ⅶ層と類似。くずれのおそれあり)。
- 5層 褐色土 南部浮石少量含む、粘性あり。
- 6層 褐色土 南部浮石少量含む、粘性あり。
- 8層 暗褐色土 黒色土少量含む、粘性あり。
- 9層 暗褐色土 南部浮石含む、八戸火山灰(砂状の粒子)粘性あり。

第8号遺構覆土注記

- ×
- G-28
- 1層 黒褐色土 シルト、南部浮石及び中振浮石少量含む。
  - 2層 黒褐色土 シルト、南部浮石含む。中振浮石微量含む。
  - 3層 黒褐色土 シルト、南部浮石及び中振浮石少量含む。
  - 4層 暗褐色土 シルト、中振浮石多く、南部浮石少量含む。第四層少量含む。
  - 5層 黒褐色土 シルト、中振浮石及び南部浮石、第Ⅶ層少量含む。
  - 6層 暗褐色土 シルト、南部浮石少量、第Ⅶ層多く含む。
  - 7層 暗褐色土 シルト、南部浮石、第Ⅶ層多く含む。
  - 8層 黒色土 シルト、中振浮石及び南部浮石微量含む。
  - 9層 黒色土 中振浮石及び南部浮石微量含む。
  - 10層 黒色土 シルト、中振浮石及び南部浮石微量含む。
  - 11層 黒色土 中招浮石及び南部浮石微量含む。
  - B 1 暗褐色土 第Ⅶ層及び南部浮石少量含む。
  - B 2 黒褐色土 中振浮石及び南部浮石含む。
  - B 3 暗褐色土 シルト、南部浮石及び第Ⅶ層多く含む。

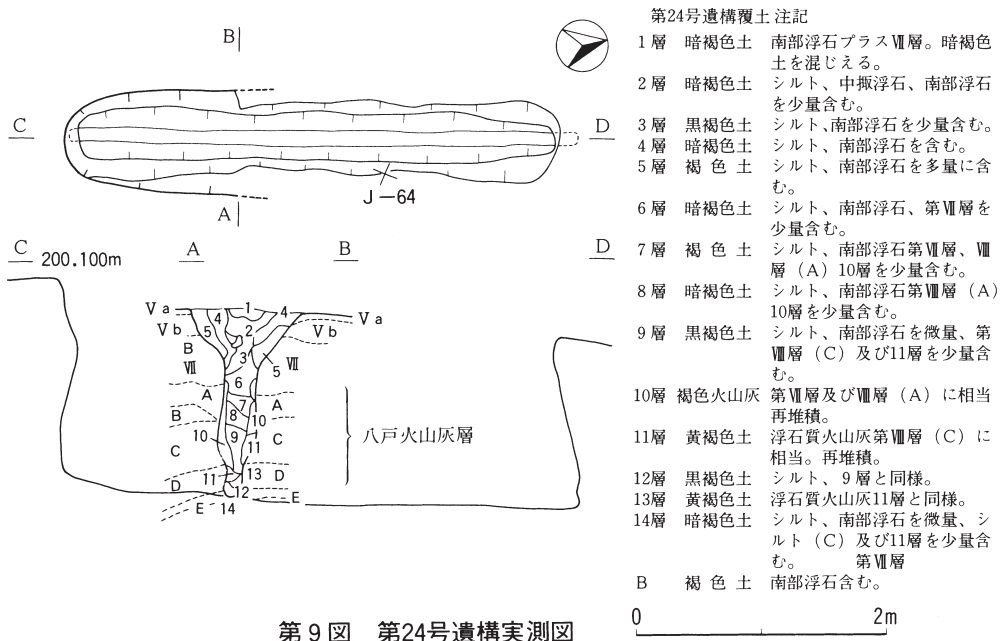
第23号遺構覆土注記

- 1層 褐色土 南部浮石混入。
  - 2a層 黒褐色土 南部浮石混入。
  - 2b層 黒褐色土 南部浮石混入。
  - 3層 黒褐色土
  - 4層 褐色土 非常に硬い。
  - 5a層 黒褐色土 浮石の混じり。
  - 5b層 黒褐色土 浮石の混じり、5a層より浮石が多い。
  - 6a層 褐色土 非常に硬い。
  - 6b層 黄褐色土 浮石の粒非常に脆い。
  - 7層 黒色土 脆くしまりが無い。
  - 8層 黄褐色土 浮石で層をなしている。
  - 9層 黒褐色土 浮石の混じり。
- ※4層が全体にわたって10cm程度の厚さで壁を覆っている。

0 2m

調査地区の北端に位置するC地区のI - 63, 64, J - 63区において検出した。確認面は第 a 層であるが、第23号遺構と同じように、確認面には(覆土最上位面)黄褐色粘土質火山灰土(南部浮石混じりの第 層に類似)が人為的に敷き詰められてあった。遺構は、第 まで掘り下げられ、覆土の10, 11層は、第 層が再堆積した(貼り付けられたような状態)ものようである。覆土は14層に区分できたが、全体的に人為的な埋め戻しの様相が認められる。計測値は第6表に示した。平面形は長楕円形、短軸断面形は、「Y字」状に近い。遺物は出土しなかった。

J-63



第9図 第24号遺構実測図

第6表 溝状ピット計測表

(単位 cm)

No	遺構番号	地区	グリッド名	確認土層	平面形	口 径	中間 径	底 径	深 さ	断 面 形		長軸方向	覆土	遺構下限土層	備 考
										長軸	短軸				
1	1	A	Q-21・22 R-22	I下 V上	葉 巻 I	446 × 64	446 × 38	474 × 18	87	A	Y <sub>1</sub>	N53°E	5	Ⅵ	
2	3	A	O-14・15	Ⅲ	( )	( )	428 × 26	440 × 18	152	(B)	(V)	N28°E	6	Ⅶ	試掘で 開口部欠
3	6	C	H-64・65 G-65	V上	隅丸長方形 Ⅲ	(344 × 94)	330 × 52	420 × 24	154	A	Y <sub>1</sub>	N45°E	7	Ⅶ	
4	7	B	F-27 G-26・27	Ⅲ 相当	長 楕 円 Ⅲ	402 × 90	374 × 30	388 × 10	114	B	Y <sub>2</sub>	N17°W	9	Ⅶ	
5	8	C	O-69 P-69・70	V上	隅丸長方形 Ⅲ	366 × 96	336 × 70	412 × 26	138	A	Y <sub>1</sub>	N78°E	11	Ⅶ	
6	23	C	H-61・62	V上	葉 (I) 巻	(240) × 100	(220) × 40	(230) × 20	124	(A)	Y <sub>2</sub>	N29°E	9	Ⅶ	ローム埋戻き 未完掘
7	24	C	I-63・64 J-63	V a	長 楕 円 (II)	(394) × (86)	380 × 42	406 × 14	164	(A)	Y <sub>2</sub>	N14.5°E	14	Ⅶ	ローム埋戻き 未完掘

注 ( ) 内は、掘り過ぎ又は調査不能なところに位置して完掘できないもの。

### 3 円形・フラスコ状ピット

第4号遺構（第10図，第7表，図版15）

調査地区北端寄りにあるC地区のH - 63とH - 64区において検出した。

確認面は第1層であるが，掘り込み面は確認面よりも上位にあったものとみられる。本遺構の周辺には，第5号円形ピット，第6，23，24号溝状ピットが分布していた。遺構の平面形は円形，断面形はフラスコ状で，第1層まで掘り下げられて構築されたものである。開口部の輪郭が不明瞭であったため，多少掘り過ぎの部分もあるが，計測値は第7表に示した。壁面，墳底面は，第1層以下にあるためか，遺存状態が良好な状況で検出できた。全体に均整がとれて，安定した形状を示している。覆土第1層は開口部の崩落土，第2層は人為的な盛土が沈下したもののようであるが，第3層以下はほぼ自然堆積と思われ，全体が5層に区分できた。遺物は出土しなかった。

第5号遺構（第10図，第7表，図版16，17）

第4号遺構のほぼ南側に当たるH - 63，I - 63区で検出したが，いずれも北に向けて傾斜する斜面に構築されたピットである。

遺構は第1層下位面で確認された。形状は，平面が円形，断面形は円筒状に近い。

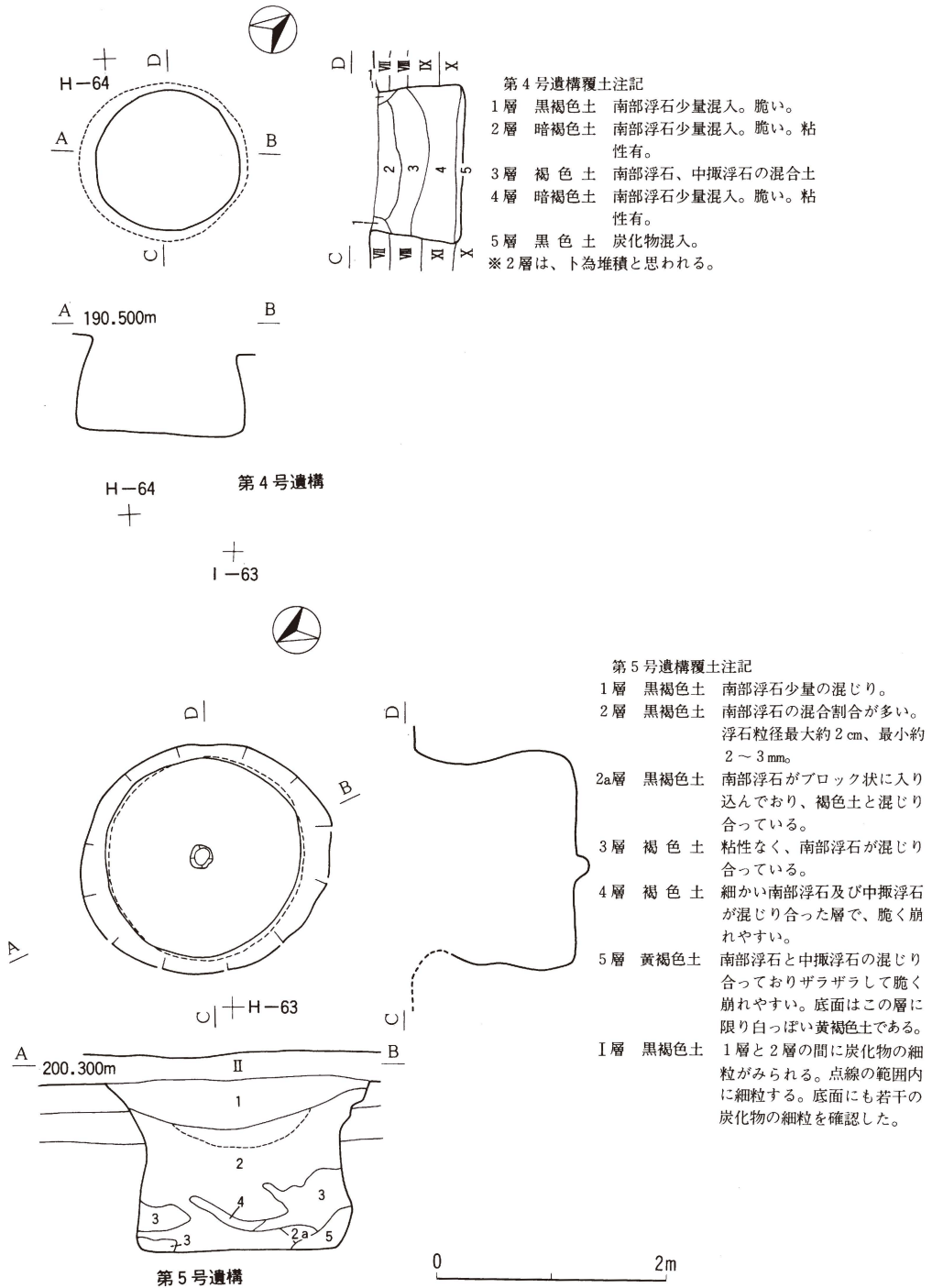
墳底面中央には径22×20cm，深さ12cmのピットが認められた。ピット部分を除く墳底面は平坦に近いが，壁面には凹凸がみられた。遺構の計測値は第7表に示した。覆土は5層に区分できた。一部崩落土もみられたが，ほぼ自然堆積と思われる。なお，2層上面と墳底面に粒状の炭化物が若干認められた。遺物は出土しなかった。

第18号遺構（第11，16図，第7表，図版18，41）

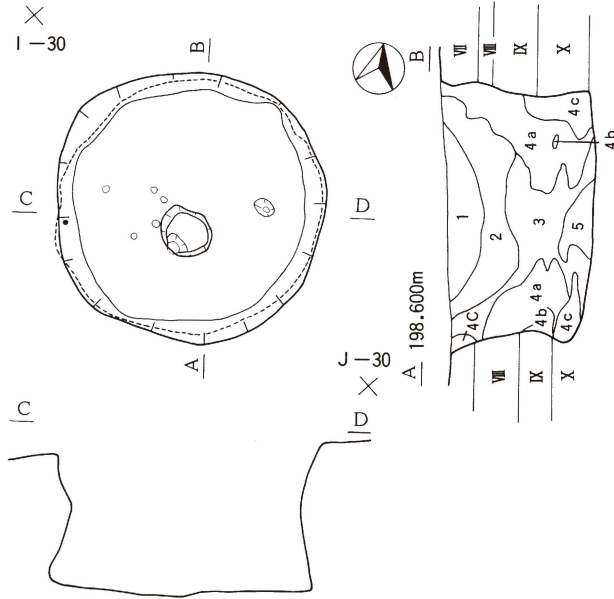
B地区の緩斜面に位置するI - 29，30区から検出した。周辺には第7号溝状ピット，第19～22，26，35号の小土壌が分布していた。確認面は耕作土下層である。形状は，平面が円形，断面形は円筒状である。覆土は5層に区分できた。覆土中に開口部分の崩落が認められたが自然堆積である。計測値は第7表に示した。墳底面は中央に向けて緩く傾き，大小7個のピットが認められた。開口部に近い遺構確認面から，縄文時代後期初頭に位置付けられる土器片が1点出土した（第16図1）。この土器は，遺構の時期を決定できる資料ではないが，傍証にはなると考えられる。

第27号遺構（第11図，第7表，図版19）

B地区のL - 34，M - 34区から検出した。標高200m付近の平坦地に立地，周辺には第19～22，



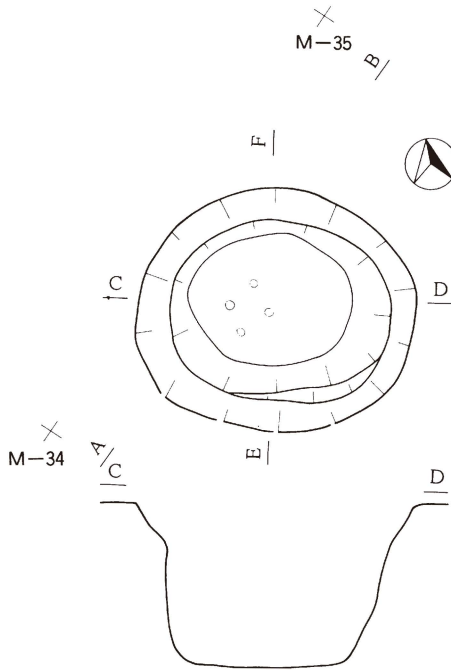
第10図 第4、5号遺構実測図



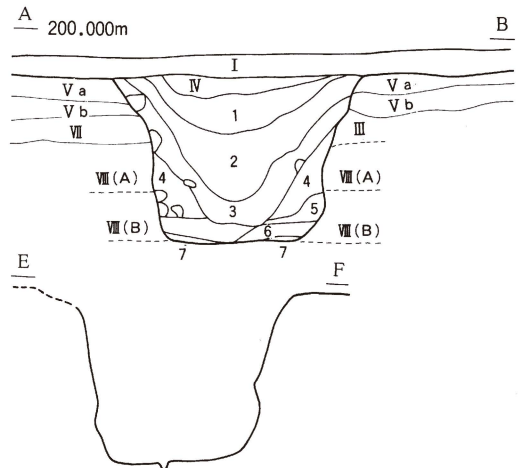
第18号遺構覆土注記

- 1層 黒褐色土 炭化物若干混入。南部浮石少量。硬い。
- 2層 暗褐色土 南部浮石少量、中振浮石混入
- 3層 暗褐色土 炭化物混入、南部浮石及び中振浮石混入。脆い。
- 4層 褐色土 南部浮石混入、しまりあい。
- 4a層 褐色土 硬い壁のくずれと思われる。
- 4b層 褐色土 非常に脆い。
- 4c層 黄褐色土 基本土層の3番目混入。
- 4d層 にふい 基本土層の3番目（浮石粒と黄褐色土に中振浮石からなる）下にいくにしたがって粘土混じり。
- 5層 黒色土 炭化物混入。中振浮石若干混入。

第18号遺構



第27号遺構



第27号遺構覆土注記

- 1層 黒褐色土 シルト、第VI層を少量含む。V a層に類似。
- 2層 黒褐色土 シルト、第VI層を含む。第VII層を少量含む。V a層に類似。
- 3層 暗褐色土 シルト、第VI・VII層を多量に含む。
- 4層 暗褐色土 第VII層プラス第VII層(A)層、暗褐色土を混じえる。第VI層を少量含む。
- 5層 褐色土 シルト、第VI層を少量含む。第VII・VII(A)層を多量に含む。第VII(B)層を少量含む。
- 6層 暗褐色土 第VII層プラス第VII(A)層。第IX(B)層を少量含む。
- 7層 黒褐色土 シルト、第VII(B)層を含む。

0 2m

第11図 第18、27号遺構実測図



34号（小土壙）遺構が分布していた。確認面は、第 層下部であるが、開口部のプランが不明瞭であったことから、基本土層観察用トレンチにそって削平して確認した。平面形は、不整円形、断面形は深鉢状である。覆土中には壁面の崩落部分がブロック状に認められたが、覆土は自然堆積と思われ、7 層に区分できた。壁面は、崩落した個所がみられ、一部原形を失っていた。壙底面に、径、深さ共に数cmの小ピットが4か所確認されたが、このピットが本遺構の用途、機能を暗示していると考えられる。時期を示す遺物は出土していない。計測値は、第7表に示した。

第7表 鴨平(1)遺跡円形・フラスコ状ピット計測表

(単 位 cm)

No	遺構番号	地区	グリッド名	確認面	平面形	断面形	口 径	底 径	深 さ	覆土	壙底面ピット	遺構下層土層	遺 物	備 考
1	4	C	H-63 H-64	Ⅶ	略 円	フラスコ状	(108×92)	146×140	(80)	5	0	X	0	開口部欠、2層は人為的埋戻
2	5	C	H-63 I-63	Ⅱ 下	円	円筒状	228×200	176×169	150	5	1	Ⅶ	覆土中に細粒炭化物	ピットは底面中央 22×20×(-12)cm
3	18	B	I-29 I-30	I 下	円	円筒状	226×212	218×200	122	5	7	X	確認面に土器片1	土器片は縄文後期 (十腰内Ⅰ式)
4	27	B	L-34 M-34	I 下	略 円	深鉢状	226×194	132×104	136	7	4	Ⅶ	0	

注 ( ) 内の数字は、掘り過ぎた部分があるため、正確なデータに近い数字である。

#### 4 小 土 壙

##### 第2号遺構（第12図，第8表，図版20）

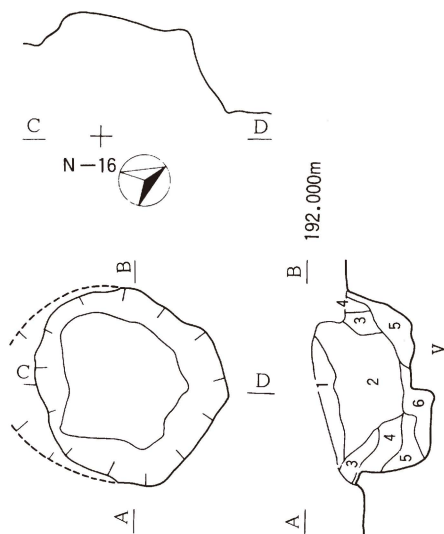
A地区の斜面に位置するN-16，O-16区から検出した。確認面は第 層（中撤浮石層）で、南部浮石層（第 層）まで掘り下げられた遺構である。平面形は不整円形で、計測値は第8表に示した。覆土は6層に区分できた。遺構の時期を決定できる遺物は出土しなかったが、同じグリッドの第 層からムシリ式土器が多少まとまって出土した（第20図）点が注目される。また、隣接のグリッドには第3号溝状ピットがある。

##### 第9号遺構（第12図，第8表，図版21）

C地区の東端に位置するQ-52区から検出した。遺構確認面には、柱状節理をもつ礫（最大40×30×8cmの安山岩）が3個認められたが、本土壙と結びつく配石か否かは明確にできなかった。確認面は第 b層である。平面形は隅丸長方形で、第 層まで掘り下げて構築していた。規模の計測値は第8表に示した。覆土は、2層に区分できたが、遺物は出土しなかった。

##### 第10号遺構（第12図，第8表，図版22）

C地区の東端に位置するR-62区から検出した。確認面は第 層で、平面形は不整楕円形、

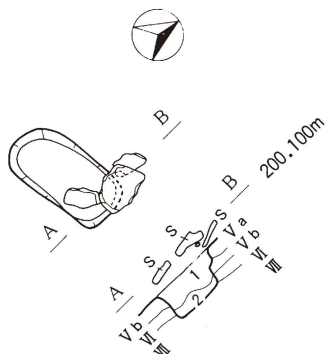


- 第2号遺構覆土注記
- 1層 褐黒色土 中振浮石を混入。
  - 2層 暗褐色土 南部浮石が多量混入。中振浮石を含む(攪乱か)。
  - 3層 暗褐色土 中振浮石を含む。
  - 4層 暗褐色土 中振浮石及び南部浮石を少量含む。
  - 5層 黒色土 南部浮石を少量含む。
  - 6層 明褐色土 南部浮石多量に含み、黒色土混入。

O-16  
+ 第2号遺構

R-52  
+

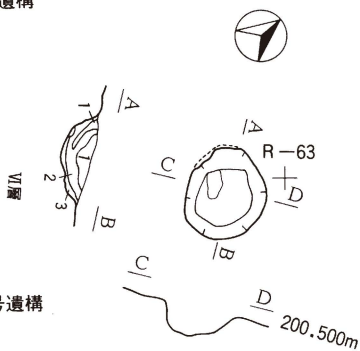
R-53  
+



第9号遺構

- 第9号遺構覆土注記
- 1層 黒褐色土 シルト、南部浮石と中振浮石を少量含む。
  - 2層 暗褐色土 シルト、南部浮石を多く含む第Ⅶ層を含む。

R-62  
+



第10号遺構

- 第10号遺構覆土注記
- 1層 黒色土 中振浮石及び南部浮石を少量混入。
  - 2層 暗褐色土 南部浮石を少量混入。
  - 3層 暗褐色土 南部浮石を多量に混入(南部浮石がブロック状に入る)。

0 2m

第12図 第2、9、10号遺跡実測図

断面形は凸レンズ状である。確認面の近くで土器片を検出した。遺構の計測値は、第 8 表に示した。覆土は 3 層に区分できた。本遺構と同じグリッドから、縄文時代後期初頭（十腰内 式）の土器片が 20 点余り（1 個体分）出土した（第 21 図 3）が、特別な関連性があると認め得なかった。

第 12 号遺構（第 13 図，第 8 表，図版 23）

C 地区の中央に位置する M - 50 区から検出した。確認面は第 層で、第 層まで掘り込まれた遺構である。平面形は楕円形に近い隅丸長方形で、断面形は開口部より壙底面が若干広くくりである。計測値は第 8 表に示した。同じグリッド内に第 15 号小土壌があるが、覆土及び遺構確認面が異なる。遺物は出土しなかった。

第 13 号遺構（第 13 図，第 8 表，図版 24）

C 地区中央から西寄りに位置する H - 55 区から検出した。確認面は第 層であるが、覆土 1 層中央には十和田 a 火山灰がブロック状に堆積していた。平面形は不整楕円形、断面形は凸レンズ状である。覆土は 4 層に、遺構の計測値は第 8 表に示した。遺物は伴出しなかった。

第 15 号遺構（第 13 図，第 8 表，図版 25）

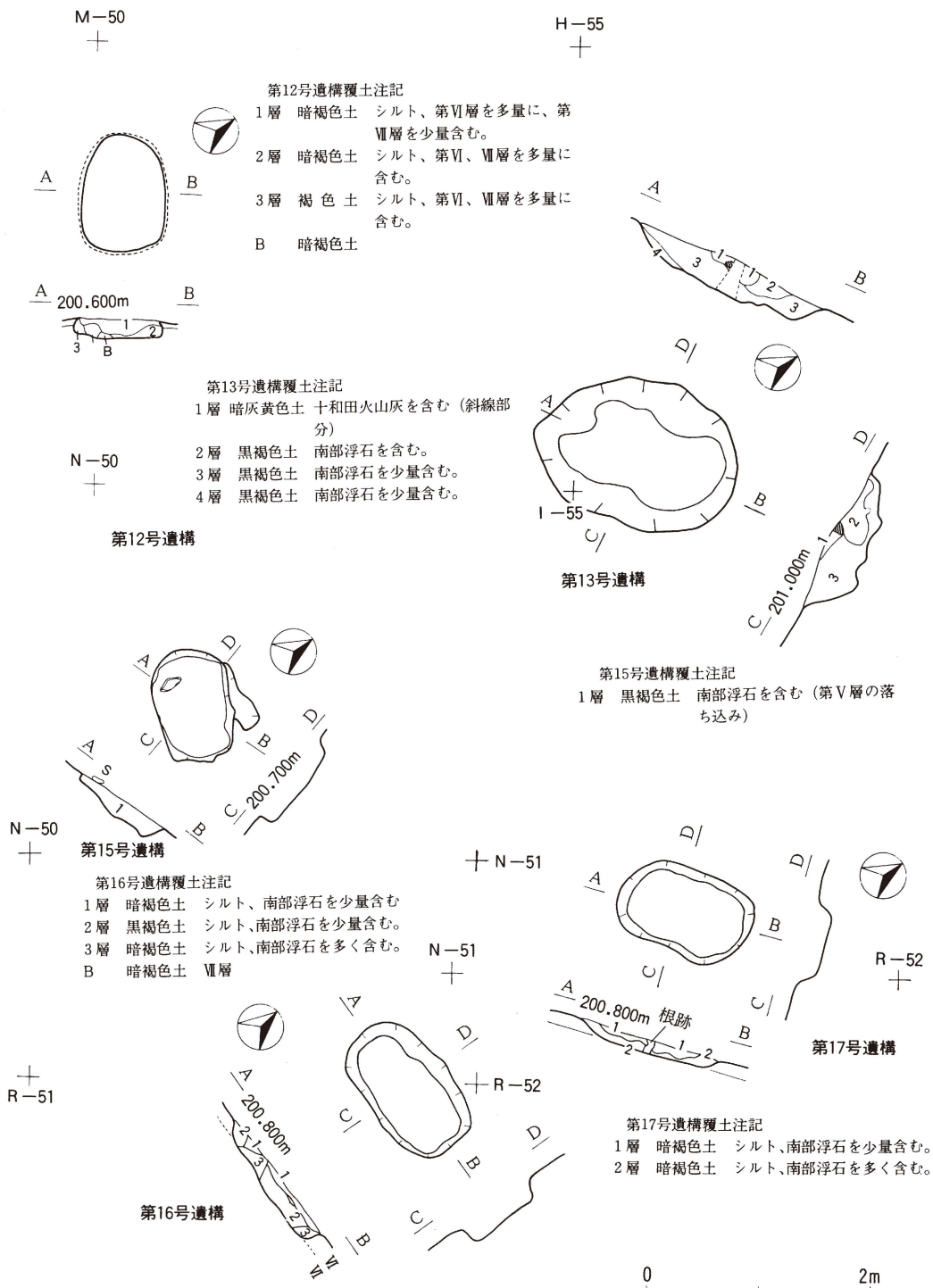
C 地区の中央付近に位置する M - 50 区から検出した。標高約 200m の平坦地に立地し、同じグリッド内には第 12 号（小土壌）遺構がある。確認面は第 層であるが、確認面上に長さ 20cm、幅 8cm、厚さ数 cm の礫（柱状節理の安山岩）が 1 個認められた。平面形は隅丸長方形で、断面形は船底状である。覆土は 1 層のみで、計測値は第 8 表に示した。確認面上の自然礫以外、遺物は出土しなかった。

第 16 号遺構（第 13 図，第 8 表，図版 26，27）

C 地区の東側に位置する Q - 51，R - 51 区から検出した。標高約 200m の平坦地に立地し、同じグリッド内には第 17 号（小土壌）遺構が並列状にある。また、隣接グリッドには第 9 号（小土壌）遺構がある。確認面は第 層で、覆土は 3 層に区分できた。平面形は隅丸長方形、断面形は船底状で、第 層まで掘り下げられ構築された遺構である。計測値は第 8 表に示した。遺物は出土しなかった。

第 17 号遺構（第 13 図，第 8 表，図版 26，27）

第 9，16 号小土壌と同様、C 地区東側に位置する R - 51 区から検出した。確認面は第 層で



第13図 第12、13、15、16、17号遺構実測図

覆土は 2 層に区分され、第 1 層まで掘り下げて構築されている。平面形は、不整な隅丸長方形、断面形は船底状である。計測値は第 8 表に示した。遺物は出土しなかった。

第19号遺構（第14図，第 8 表，図版28，29，32，41）

第20～22号遺構と並列した状態で、B地区中央に位置するK-31区から検出したが、4基の小土壌のうちでは最も南端に位置する。標高199mの平坦地から、西へ22度の緩傾斜面に位置する。確認面は第 1 層で、長軸方向は北から78度東に傾いている。平面形は隅丸長方形、断面形は船底状である。計測値は第 8 表に示した。覆土は 1 層のみで、覆土中から縄文土器片（第16図2）が 1 点出土した。

第20号遺構（第14図，第 8 表，図版28～30，41）

第19号小土壌と、位置、グリッド、立地、確認面、平面形、断面形、長軸方向、覆土の層数は同様であるが、多少平面形が大型で覆土中から土器片が 2 点（第16図）出土したこと、小ピット（根跡か）が 2 個壁面にある点が相違している。計測値は第 8 表に示した。

第21号遺構（第14図，第 8 表，図版30～32）

第19，20，22号小土壌と位置、立地、確認面で、平面形、断面形、長軸方向、覆土の数は同じであるが、異なる点は、グリッドがJ-31区で、4基の小土壌のうちでは南端にあり、また、規模の数値や、遺物を出土しなかった点である。計測値は第 8 表に示した。

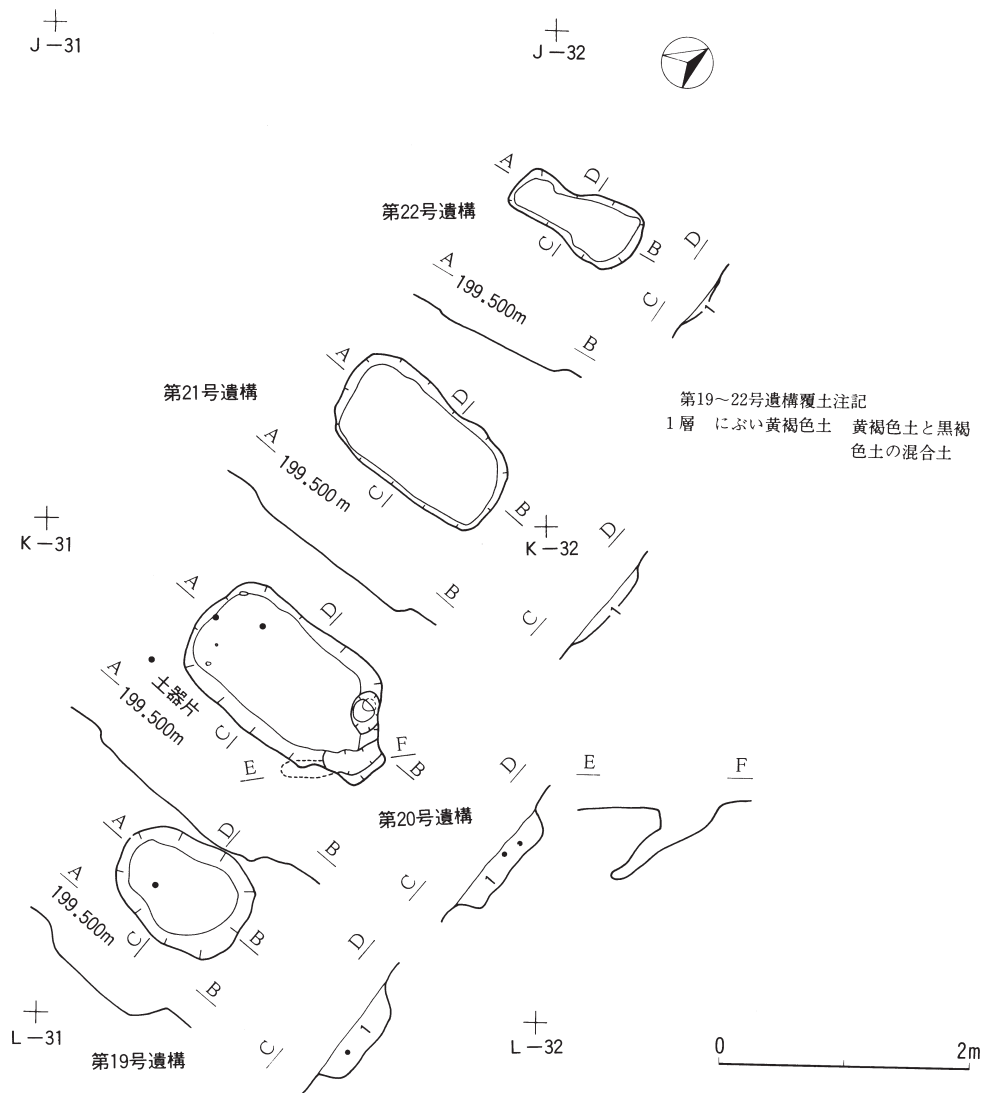
第22号遺構（第14図，第 8 表，図版30～32）

第21号小土壌と、位置、立地、確認面、断面形、長軸方向、覆土の層数、出土遺物がない点などにおいては同様である。異なる点は、グリッドがJ-31とJ-32にわたり、平面形が不対称な隅丸長方形を示し、規模が若干小型であること、また、4基の小土壌のうちでは最北端に位置していることである。計測値は第 8 表に示した。

第28号遺構（第15図，第 8 表，図版33）

C地区の東側に位置するP-46区の第 1 層で確認した。覆土は 2 層に区分できたが、ごく薄い炭化物層もある。平面形は不整な隅丸長方形で楕円形に近く、断面形は船底状で、壙底面の約 4 分の 1 には焼土面と炭化物層が認められた。計測値は第 8 表に示した。出土した遺物は炭化物のみであるが、炭化した「クルミ」も 1 粒混入していた。





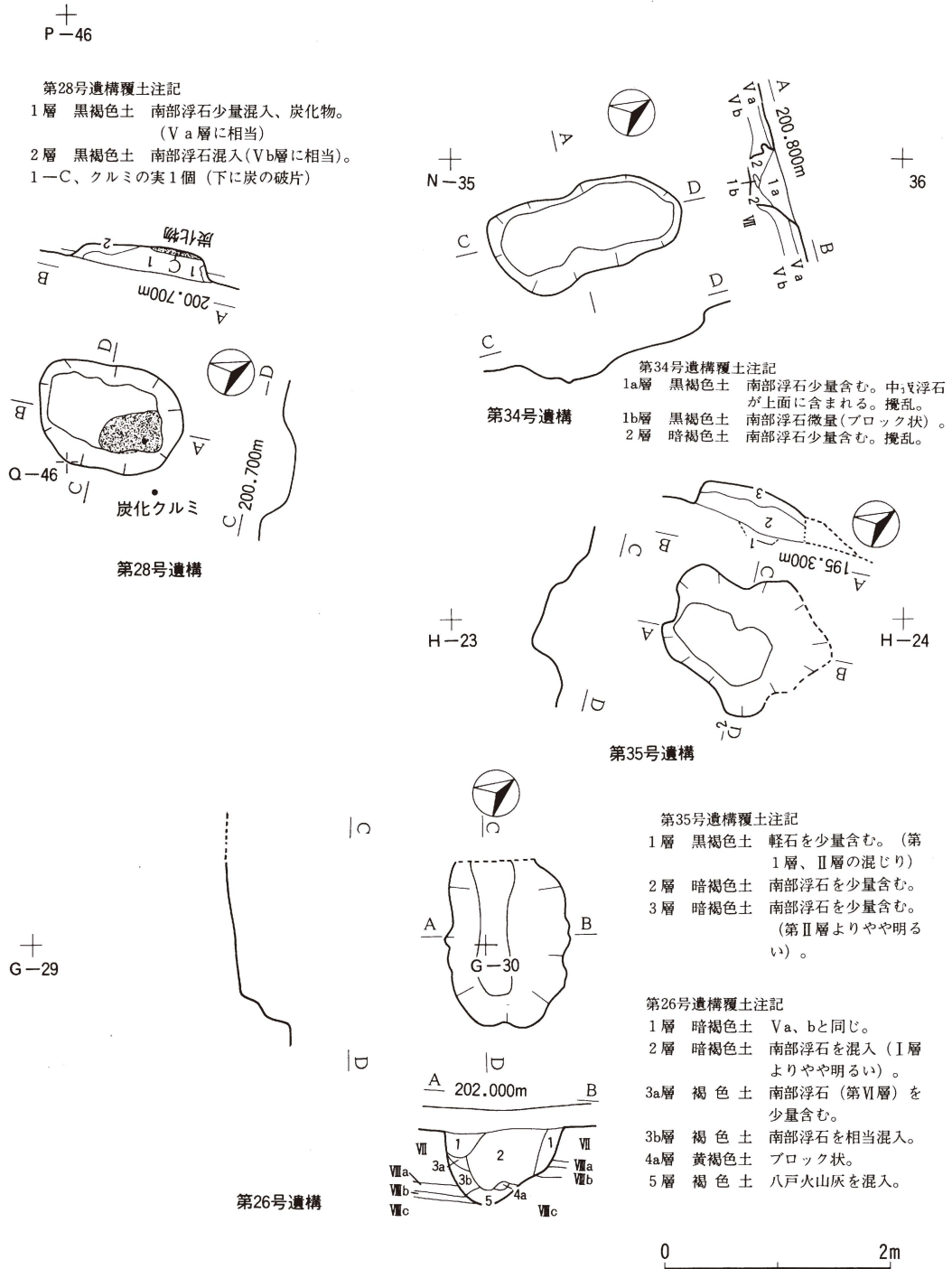
第14図 第19～22号遺構実測図

第34号遺構 (第15図, 第8表, 図版34)

B地区中央付近に位置するN-35区で検出した。確認面は第 a層で, 第 b層まで掘り込まれていた。平面形は不整な楕円形で, 断面形は船底状である。覆土は2層に区分できた。計測値は第8表に示した。近くのM-35区 層内から獣骨片が2点出土したが, 本遺構との関連性については明確にすることができなかった。

第35号遺構 (第15図, 第8表, 図版35)

B地区の西向き斜面に位置するH-35区で検出した。確認面は第 層で, 平面形は不整な隅



第15図 第26、28、34、35号遺構実測図

丸長方形，断面形は船底状である。覆土は3層に区分できた。計測値は第8表に示した。遺物は出土しなかった。

第8表 鴨平(1)遺跡小土壙計測表

(単位 cm)

No	遺構番号	地区	グリッド名	確認面	平面形	断面形	開口部径	壙底部径	深さ	長軸方向	覆土層数	遺構下層土層	備考(遺物有無)
1	2	A	N-16	Ⅲ	不整円形	梯形状	155×150	98×95	55	N 8°W	6	V	近くからムシリ式土器片出土
2	9	C	R-52	V b	隅丸長方形	バット状	100×150	85×40	30	N80°E	2	Ⅵ	遺構上位層に礫が3ヶ配置
3	10	C	R-62	Ⅲ	不整円形	凸レンズ状	75×65	47×43	23	N35°W	3	Ⅵ	同じグリッドから後期土器片が約20点出土
4	12	C	M-50	Ⅵ	隅丸長方形	浅いフラスコ状	105×75	110×80	15	N52°W	3+B	Ⅵ	
5	13	C	H-55	Ⅲ	不整楕円形	凸レンズ状	190×135	123×65	40	N47°E	4	Ⅵ	覆土に十和田a火山灰塊
6	15	C	M-50	Ⅲ	隅丸長方形	船底状	90×75	93×64	20	N72°W	1	Ⅵ	確認面に礫が1個配置
7	16	C	Q-51 R-51	Ⅵ	隅丸長方形	◇	130×80	102×55	20	N90°E	3+B	Ⅵ	
8	17	C	R-51	V b	隅丸長方形	◇	125×70	110×10	15	N50°E	2	Ⅵ	
9	19	B	K-31	V b	隅丸長方形	◇	115×88	90×57	21	N78°E	1	V b	覆土に土器片1点あり
10	20	B	K-31	V b	隅丸長方形	◇	190×100	157×76	18	N79°E	1	V b	覆土に土器片2片あり、ピット(根跡か)2ヶ壁を切る
11	21	B	J-3	V b	隅丸長方形	◇	158×77	140×70	8	N78°E	1	V b	
12	22	B	J-31 J-32	V b	不整隅丸長方形	◇	107×55	93×28	4	N68°E	1	V b	
13	28	C	P-46	V b	不整隅丸長方形	◇	128×94	102×57	24	N50°E	3+C	V b	壙底に炭化物とクルマミの炭化したもの出土
14	34	B	N-35	V a	不整楕円形	◇	172×70	156×40	34	N25°E	2	V b	近くから獣骨片出土(M-35V層)
15	35	B	H-23	V	不整隅丸長方形	◇	150×119	89×54	33	N48°E	3	V b	
16	26	B	G-29	Ⅶ	形状不詳(楕円形か)	U字状	(128)×100	(120)×35	80	N52°W	5	Ⅶ	2分の1位、調査地区外

注 Bはブロック、Cは炭化物を示す。第26号ピットは、小土壙ではないが、便宜上記載した。

(4) 形状不詳な遺構

第26号遺構(第15図, 第8表, 図版36)

B地区の西側に位置するG-29区において検出したが、遺構の西側が調査地区外に延びていたため完掘できなかった。したがって、全体の形状は不詳である。溝状ピットの構築作業中に放棄したものではないとも推測できる。確認面は第1層で、調査できた範囲の平面形は、長楕円形を半截したような形態、断面形は不整な「U字」状を示し、第1層まで掘り下げられた遺構である。覆土は5層に区分できたが、遺構に伴う遺物は出土しなかった。(北林)

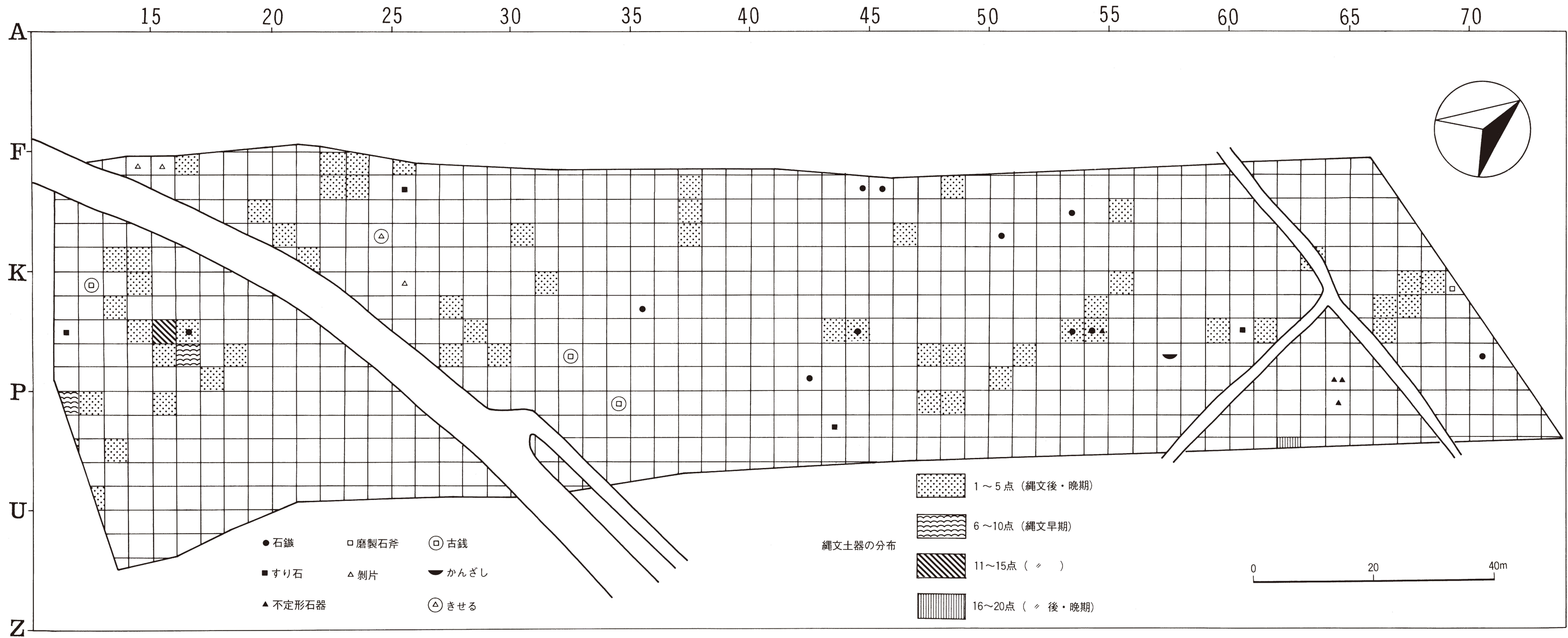


第16図 遺構出土土器拓影図

第9表 遺構出土土器観察表

(単位 cm)

挿図番号	図版番号	地区遺構名層位	器形部位	器高	口径	底径	最大径	外面施文	内面調整	その他の特徴				土色		胎土	焼成	分類	備考
										口縁部	胴体部	底部	その他	内面	外面				
第16図 -1	41 -1	B地区 第18号 確認面	鉢形 口縁		(32.0)			沈線文+隆帯状 貼付文	よこ 口唇 肥厚					黒、褐灰 灰黄、明黄褐	良	堅	十腰内 後期	同一個体O-41 I層出土	
-2	-2	B地区 第19号 覆土	深鉢 胴体					R L 縄文	よこ					赤 褐 赤 褐	良	堅	中末～ 後期?		
-3	-3	B地区 第20号 覆土	小鉢 口縁		(12.0)			R L 縄文 結束第二種	よこ 肥厚 気味					にふい褐 褐灰、にふい褐	良	堅	中末～ 後期		
-4	-4	B地区 第20号 覆土	深鉢 胴体					R L 縄文(無筋) +沈線文	よこ					明 赤 褐 明 赤 褐	良	堅	中末～ 後期初	( )内推定	



第17図 鴨平(1)遺跡遺物分布図



## 遺構外出土の遺物

遺構外の遺物は、設定した677グリッド（10,832m<sup>2</sup>）の中の83グリッド（1,328m<sup>2</sup>）から出土したが、これは全体の12.2%のグリッドから出土したことになる（第17～27図、第10～14表）。その出土量は縄文時代のもの約500点（第9表）、歴史時代の遺物は約10点である。全般的に遺物は希薄であったが、調査地区が遺跡のどの位置に当たるかは検出された遺構の分布も勘案して判断すべきであろう。

第 Ⅰ 層（表土）の多くは、牧草地や畑地として使われていたため、耕作による攪乱が随所に認められたが、遺物の大半はこの耕作土に包含されていた。

全体的には、基本土層の第 Ⅰ ～ Ⅴ 層に縄文後・晩期及び歴史時代の遺物が包含され、第 Ⅰ ～ Ⅴ 層には縄文早期の遺物が包含されていた。縄文早期の土器は、A地区の傾斜地（2,800m<sup>2</sup>）から集中的に出土した。その他の地区では、縄文後・晩期の遺物が主として出土した（第5、17図）。

この項では、縄文早・前期の土器、後・晩期の土器、石器・剥片・礫、土製品、その他の遺物を区分して記載する。なお、本項に記載する遺物の数は、復原した縄文土器5点、縄文土器片約100点（接合した土器は1点とした）、石器・剥片22点、土製品1点、金属製品6点である。

第10表 鴨平(1)遺跡遺構外出土遺物集計表

土 層	土 器・土製品		石 器・剥片・礫		炭 化 物		計	
	ポイント	一 括	ポイント	一 括	ポイント	一 括	ポイント	一 括
表 採		7						7
I		162	3	37		2	3	201
II	40	57	14	23	3	2	57	82
III	26		1				27	
IV	6		2				8	
V	34		8				42	
VI	0	0	0	0	0	0	0	0
VII	33		2				35	
VIII	0	0	0	0	0	0	0	0
計	139	226	30	60	3	4	172	290

## 1 土 器

### (1) 縄文時代早期の土器

#### 第 層出土土器 (第18・19図)

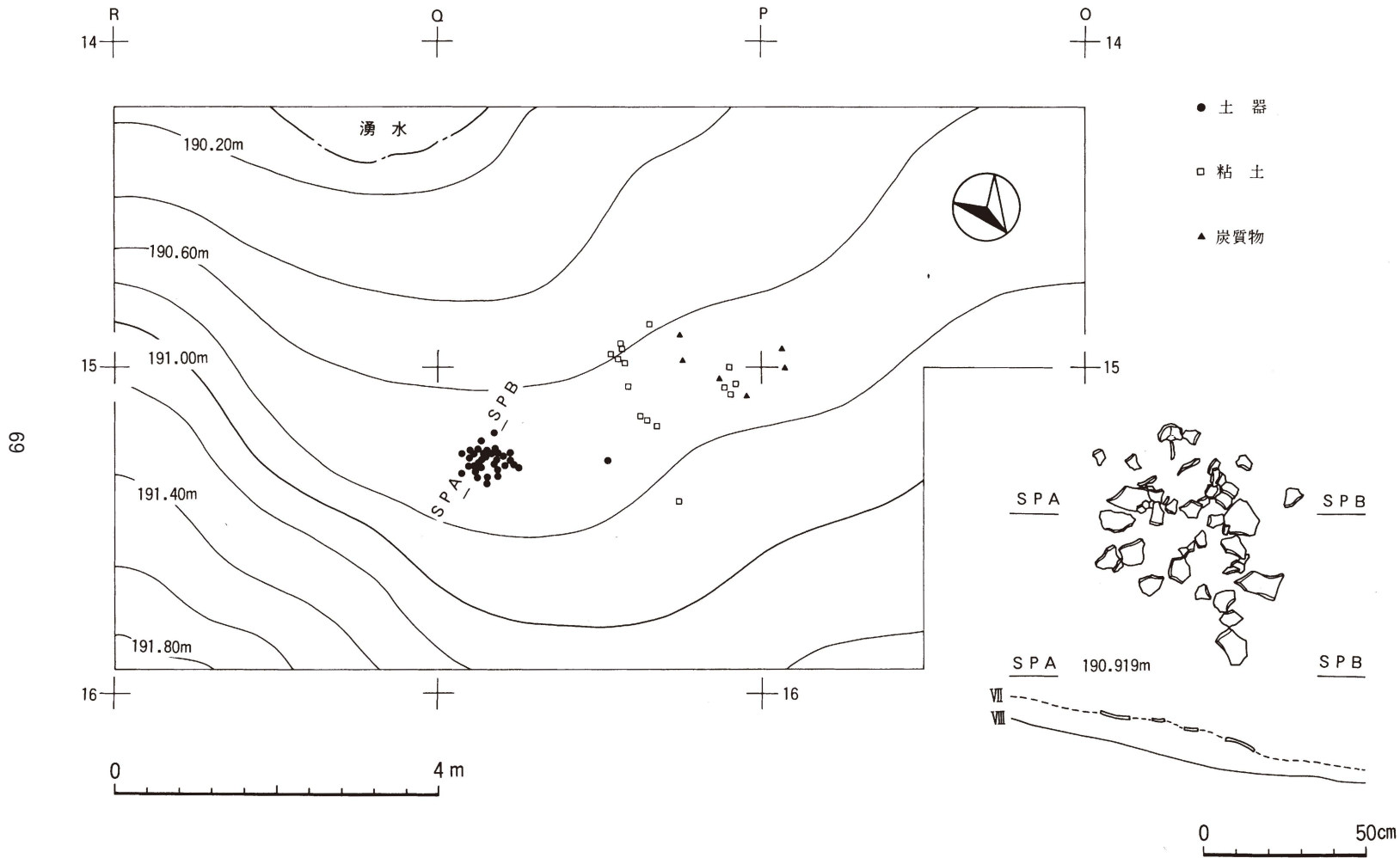
P - 15区の第 層 (南部浮石層下, 粘土質暗褐色土層) から, 復原可能な 1 個体分の土器が出土した。第18図における等高線は, 第 層上面で計測したものであるが, ほぼ当時の地形に近いものを示しているとみられる。これによると, 土器の出土した位置は, 南に面した緩傾斜面の末端に当たり, 現在の湧水面から約 4 m離れた地点である。土器は, 口縁部を約半分失っているが, 小範囲に, つぶれた状態で出土し, 斜面上方から流れたものとは考え難い。また, 付近の同層から, 粘土及び炭質物の小塊が出土しているので, 水辺で何らかの作業が行われた可能性がある。

出土した土器は, 口径約20.6cm, 器高約34.7cmの砲弾形尖底深鉢である。全体にほとんど屈曲のない器形であるが, 胴部に比べ口縁部がより直線的になっているため, やや外反する感じを与えている。器厚は, 口縁部で約 7 mm前後, 以下胴部にかけて厚くなるが, 底部に近い部分でいったん薄くなる。底部はやや丸みを帯び, 約15mmの厚さをもっている。

胎土として用いられた粘土は, 粘り気の強いものらしく, 混和材として相当量の繊維を含み, 長石, 石英, 輝石等の砂粒もみられる。粒径は, 大きなもので中粒砂及び少量の細礫, ほかに岩石の破片も含まれている。

器面は, 内外面とも比較的平滑に整形されているが, 外面には, 成形時の痕跡を示すと思われる凹凸がある。この凹凸は, 規則性をもってほぼ同心円状に観察されるが, 底部から約 1/4 ほどの部分に限って不規則になり, 器面も粗く, 指頭状の擦痕が顕著に残っている。また, この部分を境として, 器厚の差が大きく, 土器の中軸にも歪みを生じている。したがって, 胴部と底部を別個に製作し, 後でこれを接合したものと思われる。(以下, この接合部分から上を口縁・胴部, 下を底部として記載する)。

成形方法については, 外面の凹凸及び横方向の割れ方から, 輪積みに近い方法が考えられる。ただし, 内面に残る粘土帯の接合痕や割れ口が, 輪積みの場合に推定される粘土帯の接合線と斜めに交差する部分も少なくない。おそらく, 1 周ごとに完結した粘土の輪を積み上げていったものではなく, 適当な長さの粘土紐を継ぎ足しながらの段階的な作業であったと思われる。粘土帯の接合痕は胴部下半で良く観察され, この部分で約 2 ~ 4 cmの幅をもつ。接合個所における割れ口の形状が不規則であるため, 接合方法は把握し難い。また, 明瞭に接合痕を残す部分であっても, その隣接部から割れている場合もあり, 成形作業の速さを指摘することができる。



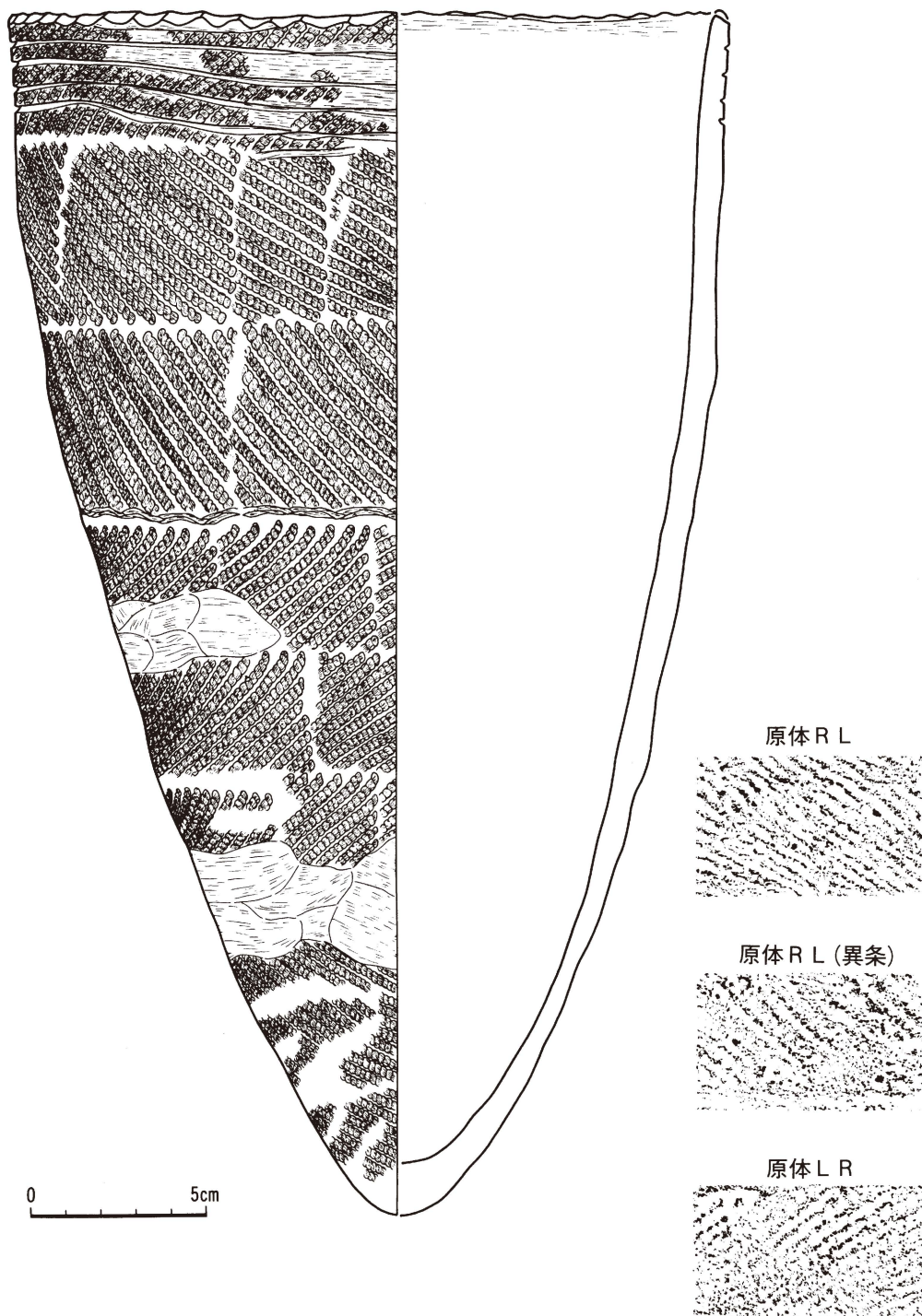
第18図 第Ⅶ層土器出土状態

文様は、外面のほぼ全面に縄文が施文され、その後、口縁部に平行沈線が4条、更に口唇部には刻目が加えられてある。縄文は3種類の原体が認められる。LRが1本、RLが2本であるが、RLのうち1本は、太さの異なる条を撚り合わせたもので、末端を別の細い縄又は繊維束で縛り止めてある。これらの原体は、すべて横位に回転されている。口縁・胴部では、口縁部側から、LR・RL・RL(異条)・LR・LR・LRの順に、6段にわたって帯状に施文される。特に3~5段目にかけては、縄文帯を強調するように、縄端に強い圧痕を残し、部分的には羽状縄文を構成する。底部では、RLのみ用いられ、帯状にはなっておらず、やや条が傾く部分もある。原体はいずれも単節であるが、撚りが弱いいためか非常に節が不明瞭で、一見無節のように見えるほどである。また、やや節のつぶれた圧痕を残す傾向があり、器面の動きからみても、縄文はまだ粘土が柔らかいうちに施文されたと思われる。原体の回転方向は、圧痕の強弱及び粘土の移動方向から、(土器を口縁部側から見て)反時計回りと判断される。施文の方向は、3~6段目では、口縁部側から底部側へと進行し、更に6段目の縄文帯は、口縁・胴部と底部との接合痕によって消されている。したがって、(右手を使って施文した場合)口縁・胴部の成形後、口縁部側を上にして立てた状態で縄を転がしてから、底部を接合したものと考えられる。

縄文施文後に加えられた沈線及び刻目についても、その縁に見られる粘土の移動の仕方から、それがまだ柔らかい状態にあったことがわかる。沈線は、最大幅約4mmほどであるが、部分によって幅の差異が著しく、(土器を口縁部側から見て)反時計回りの方向に、大きく波打つように引かれている。施文具は、弾力性の強いものらしいが、断面に鋭角的な稜を残している。刻目は、約6~10mm幅の広いものが密接に加えられているため、小波状を呈している。施文具は指頭様の柔らかいもので、圧痕に近く、口唇部に対して斜めに、内面側から外面側に向って力が働いている。

土器の断面を観察すると、器壁心部がやや黒ずんでいるものの、焼き上りは悪くない。ただし、胴上部から口縁部にかけて、器表面(特に外面)の剥離が顕著である。口縁部には一対の補修孔が穿たれているが、剥離はこの部分で最も著しい。使用の際、火熱の強く当たる部分とは見なし難いので、この部分の脆弱さについては、焼成方法に理由が求められるかも知れない。

尖底部を上から見ると、リング状の擦痕が観察され、強度の光沢を呈している。又、この部分の(縄目、擦痕等による)凹部には、白っぽく風化した粘土または火山灰と見られるものが付着している。第1層のように、粘性の強い固い面にねじ込んで突き立てた痕である。土器の色調は、ほぼベルト状に観察される。外面は、胴部中央を境として、下半部は明るい褐色を呈するが、底部下半ではくすんだ色調になる。上半部は、全体に暗い褐色を呈し、口縁部付近では、黒い光沢をもつ部分がある。内面は、底部下半が明るい褐色、底部上半は暗い褐色を



第19図 縄文・早期の土器 (第Ⅶ層)



呈し、部分的に黒い光沢をもっている。胴部から上は全体にくすんだ褐色を呈するが、かなりムラがあり、口縁部付近にも、底部上半に類似した光沢をもつ部分がある。底部外面のくすんだ色調を示す部分は、ちょうど、リング状の擦痕及び光沢が観察される範囲に一致し、土中にねじ込んだ部分に相当する。器面の黒っぽく変化した部分は、炭化物の付着によるとみられ、実験例等<sup>(注)</sup>によって、外面の炭化物はススの付着、内面のそれはコゲ付きと推定されている。ただし、この土器の場合、使用に際して、火熱が最も強くあつたとみられる部分（胴部下半～底部上半）はほとんど変色しておらず、器面の剥離も認められない。補修孔の存在とも考え合わせると、この土器の耐久性の低さを示すものとも言える。

注 青森県立郷土館 1976 「小田野沢」

横山英介他 1979 「函館空港・中野遺跡」

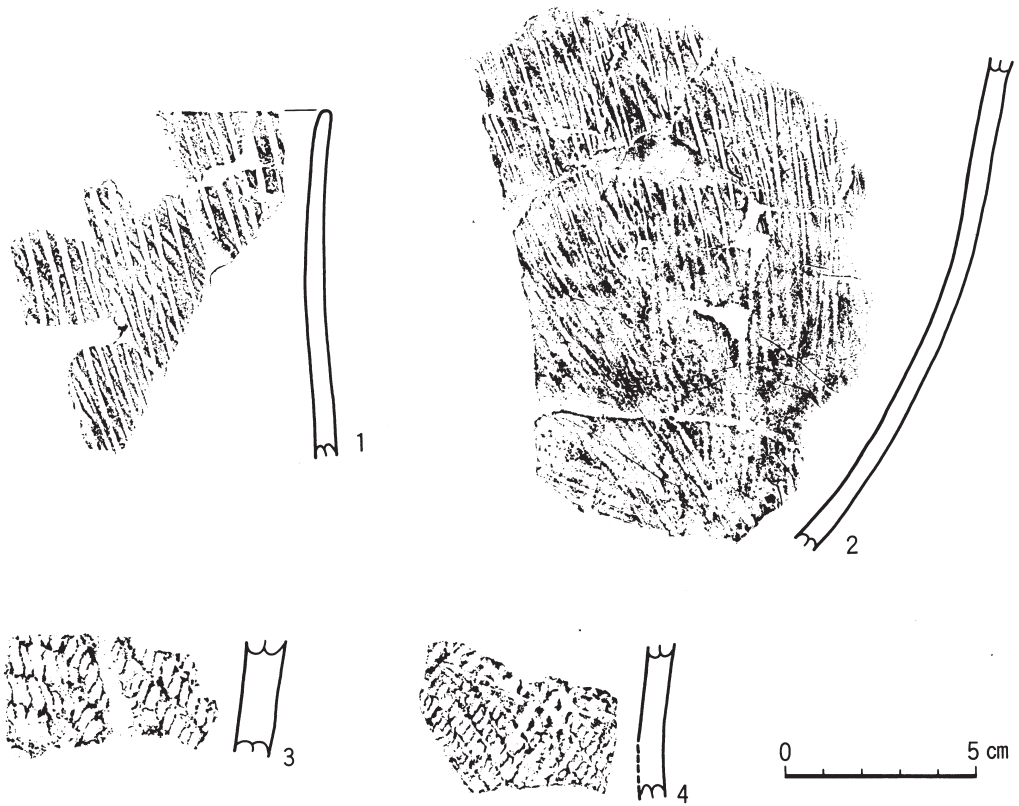
#### 第 層出土土器（第20図）

第20図 1, 2 は、同一個体と見られ、N - 16区から出土したものである。ムシリ 式に属する。器厚は、胴部で約 5 mm前後の薄手である。口縁部は先細りに整形され、やや外反する。胴部下半は、丸底気味に湾曲している。外面には、縦位ないし斜位の平行沈線が交差する形で斜格子状に引かれているが、胴部下半では、施文が浅く、乱雑なため、条痕または擦痕的な感じになっている。沈線は、口縁部側から底部側の方向に引かれたものである。内面には、主に縦位の条痕様のものが見られるが、浅く不鮮明である。胎土に細粒砂を含み、焼成の良い堅緻な土器である。

第20図 3 は、P - 11区からの出土で、早稲田第 5 類に属する。胴部下半の破片である。この部分で、器厚約 8 ~ 10mmを示し、厚手である。外面には、0 段多条とみられる R L の粗い縄文が横位に施文され、内面は、凹凸のある粗面となっている。胎土は粗く、繊維及び粗粒砂を含む。器壁心部は黒ずんでおり、焼成の良くない土器である。 (工藤 大)

#### (2) 縄文時代前期の土器

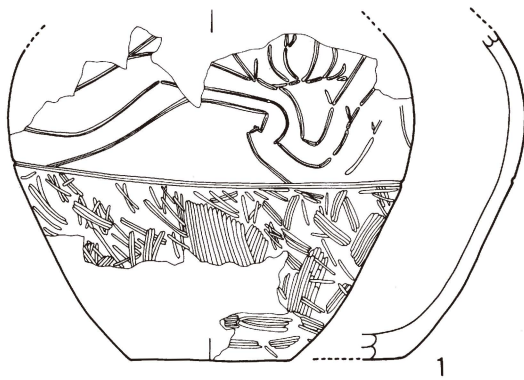
第20図 4 は、H - 20区から出土したもので、早稲田第 6 類に類し、前期初頭に位置するとみられる。器厚約 7 mm、外面にはやや節の長い R L の縄文が施文され、これに交差して別の条が走っているが、同一原体かどうかは不明である。拓影上部には、縄端の結縛部分らしいものの圧痕が認められる。内面は平滑に整形されている。胎土に繊維、粗粒砂及び細礫を含む。第20図 3 に比べ焼成が良い。 (工藤 大)



第20図 縄文・早期の土器(第V層)・前期の土器

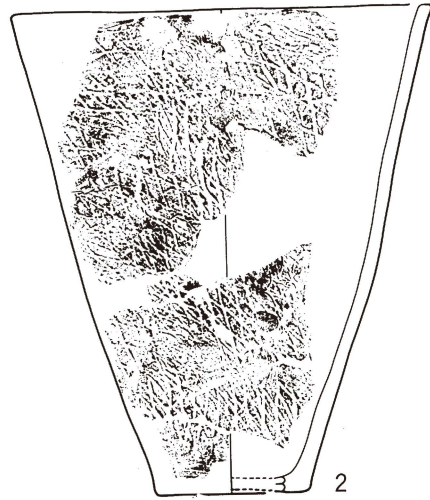
### (3) 縄文時代後・晩期の土器

一部接合して、およその器形を判断できたものを含めても細片が多い。しかも出土量が限られているため、一部復原(図上復原を含む)した土器と、比較的大型の土器片を縄文土器実測拓影図(第21~27図), 及び土器観察表(第10~13表)によって説明する。 (北林)



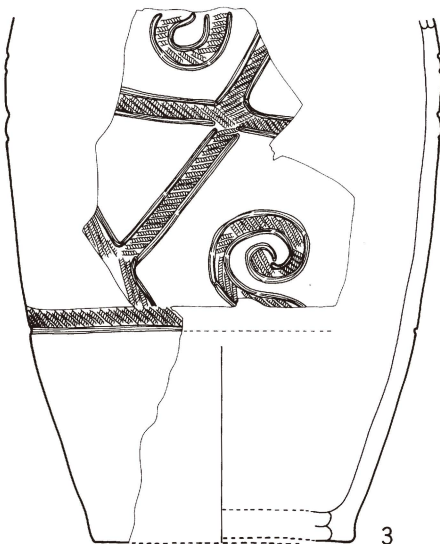
縄文土器観察表

挿図番号	第21図1	図版番号	40-3
地区・グリッド・層位	A地区M-16・II		
器形・部位	壺形		
器高	現 13.2cm	底径	6.9cm
口径	(9.0)cm	最大径	15.6cm
外面施文	上半・沈線文(下半 たてみがき)		
内面調整	よこ、入念		
その他の特徴	口縁 短頸 胴体 球状 底 あげ底 その他 胎土に極小砂粒を含む		
胎土	良	焼成	堅
土色	外面 黒褐・明赤褐・赤褐 内面 にぶい赤褐・黒褐		
型式時期	十腰内1式、後期初		
備考	復原部分以内に口縁不接合		



縄文土器観察表

挿図番号	第21図2	図版番号	40-2
地区・グリッド・層位	A地区J-14・II		
器形・部位	深鉢・復原		
器高	(19.5)cm	底径	6.2cm
口径	17.0cm	最大径	口径 cm
外面施文	網目状燃糸文		
内面調整	よこ		
その他の特徴	口縁 平縁 胴体 底 あげ底 その他 二次加熱赤変		
胎土	良	焼成	堅
土色	外面 にぶい赤褐・淡赤橙 内面 灰褐・暗赤褐		
型式時期	十腰内1式、後期初		
備考	破片毎に変色あり		



縄文土器観察表

挿図番号	第21図3	図版番号	40-1
地区・グリッド・層位	C地区R-62・I~III		
器形・部位	深鉢・胴・底		
器高	現 21.5cm	底径	10.6cm
口径	cm	最大径	cm
外面施文	磨消縄文(沈線+渦巻)		
内面調整	よこ		
その他の特徴	口縁 胴体 底 あげ底 その他 内底面に炭化物付着		
胎土	良	焼成	堅
土色	外面 灰褐・にぶい赤褐 内面 にぶい赤褐・明赤褐		
型式時期	十腰内1式、後期初頭		
備考	胎土に極小砂、二次火熱		

0 5cm

第21図 縄文時代後期土器拓影図



縄文土器観察表

挿図番号	第22図	図版番号	40-4, 5
地区・グリッド・層位	B地区G-35・II		
器形・部位	深鉢・復原		
器高	39.8cm	底径	10.3cm
口径	33.2cm	最大径	口径 cm
外面施文	縄文(斜位)		
内面調整	よこ		
その口縁	内傾気味		
胴体			
底	あげ底		
その他特徴	胎土に極小砂粒を含む		
胎土	良	焼成	堅
土色	外面 浅黄橙・黒褐		
	内面 灰褐・浅黄橙		
型式時期	晩期		
備考			

0 5cm

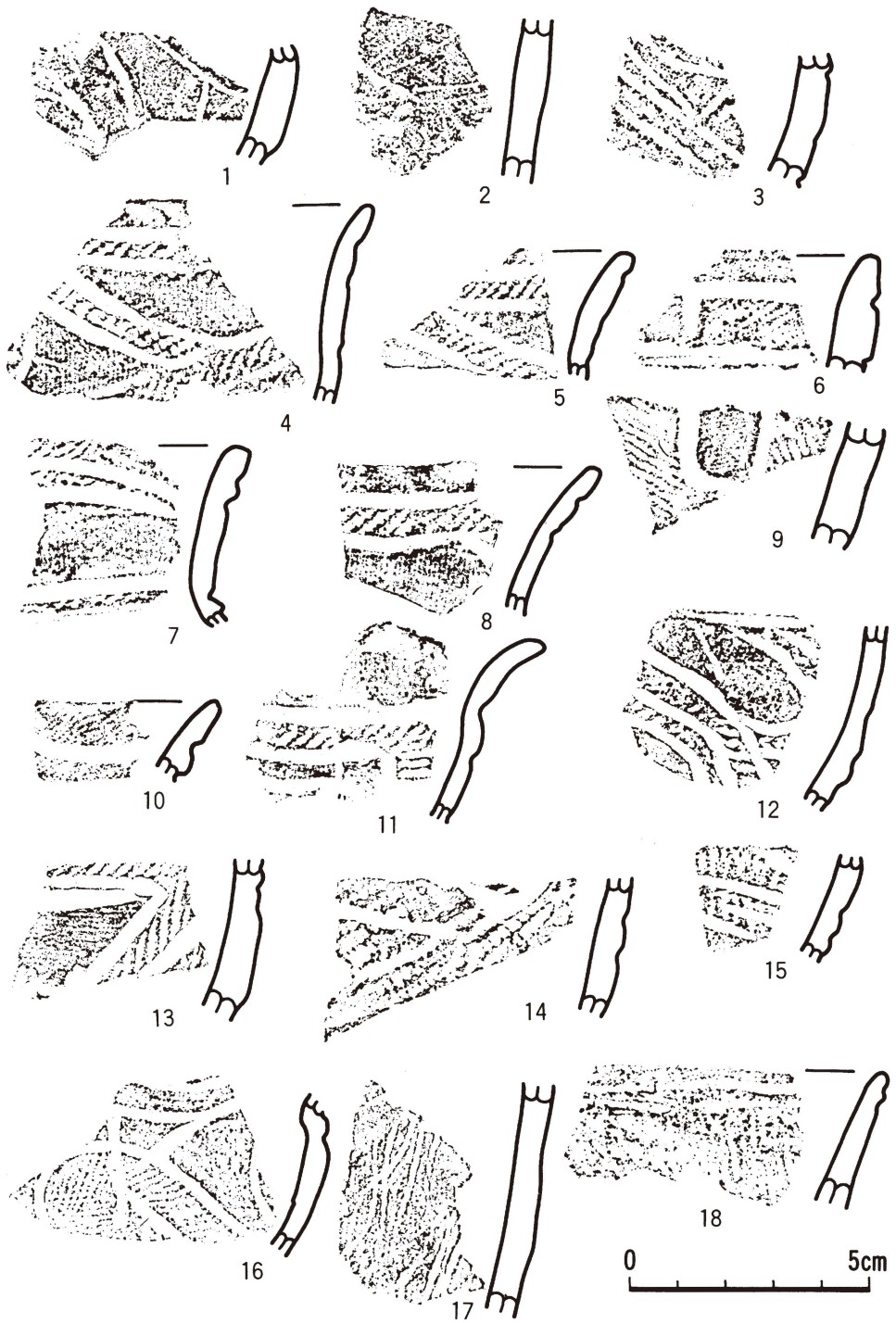
第22図 縄文時代晩期土器実測拓影図



(繩文土器觀察表 1)

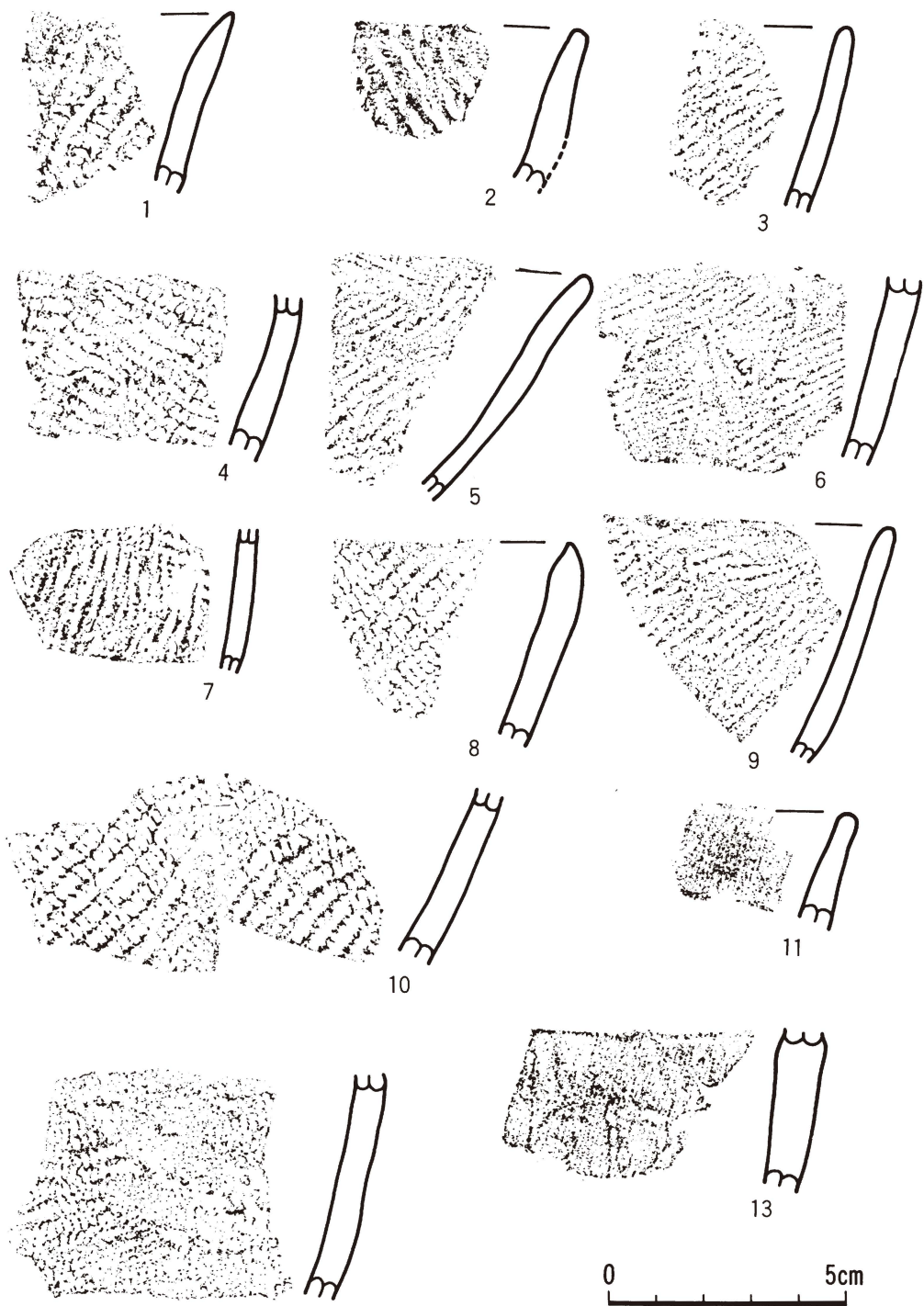
第23図 繩文土器拓影図(1)





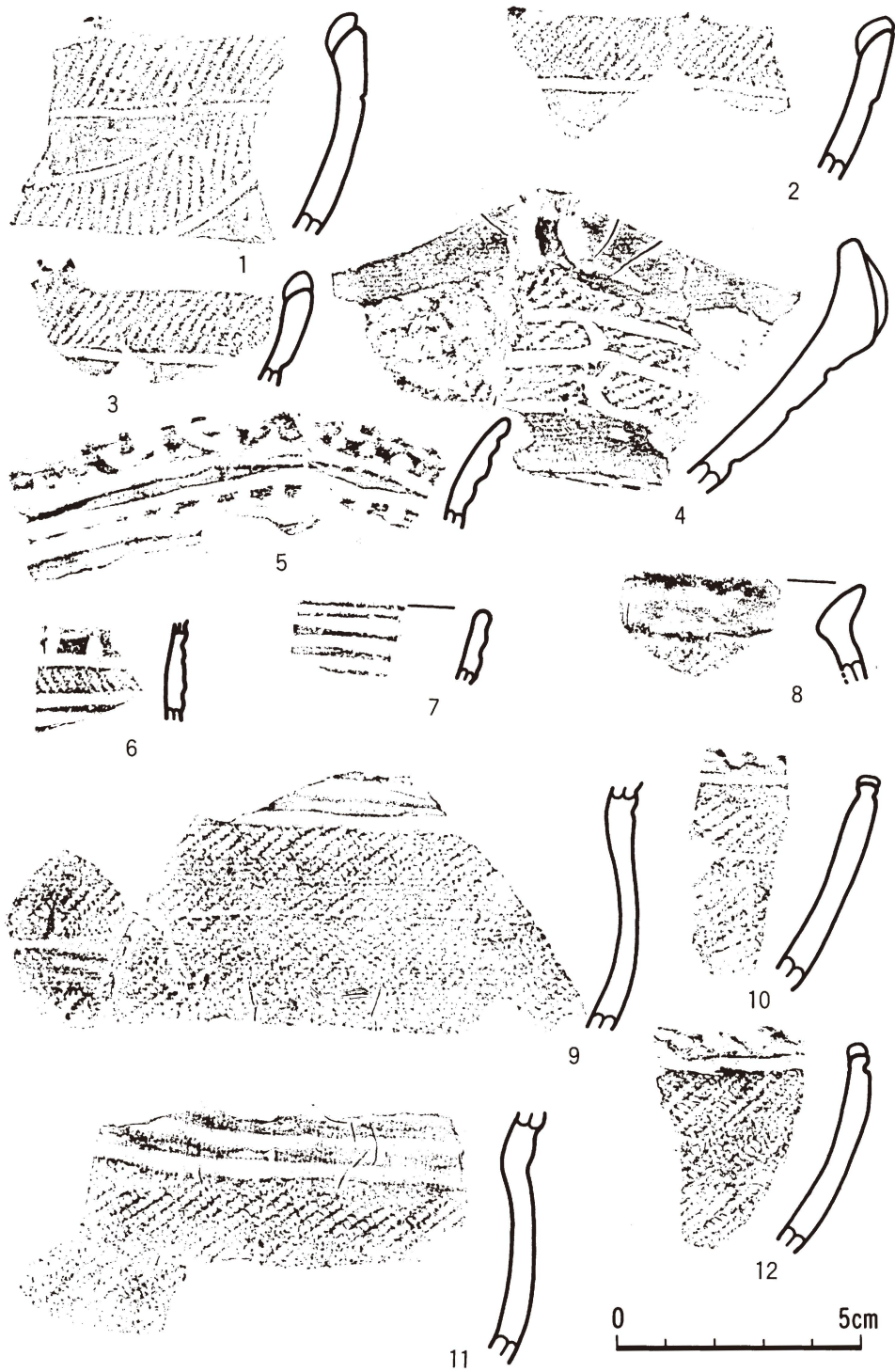
(縄文土器観察表 1. 2)

第24図 縄文土器拓影図(2)



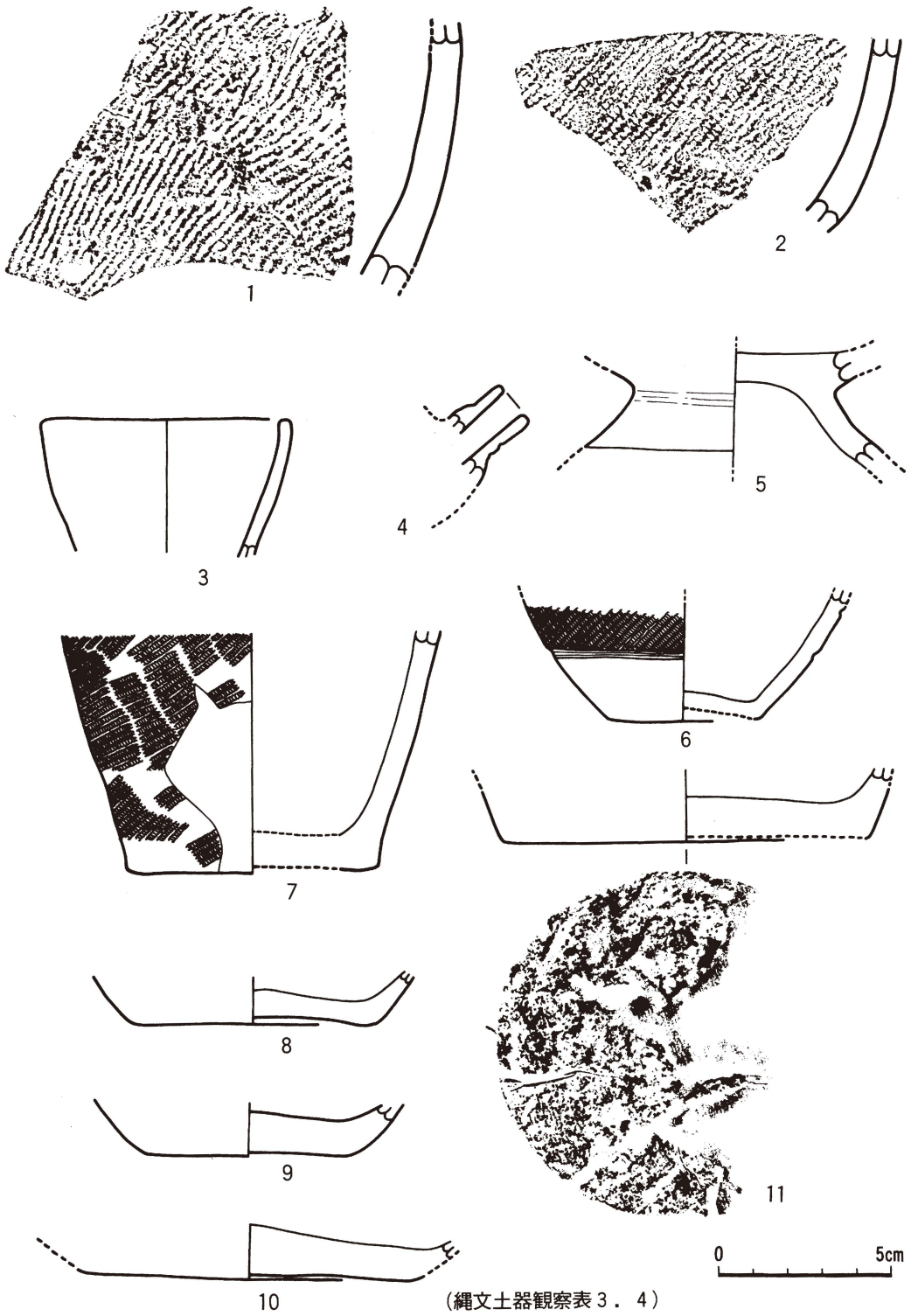
12 (縄文土器観察表 2)

第25図 縄文土器拓影図(3)



(縄文土器観察表 3)

第26図 縄文土器拓影図(4)



(縄文土器観察表 3. 4)

第27図 縄文土器実測拓影図



第11表 縄文土器観察表(1)

(単位 cm)

挿図番号	図版番号	地区出土層位	器形部位	器高	口径	底径	最大径	外面施文	内面調整	その他の特徴				土色	外面	胎土	焼成	分類	備考
										口縁部	胴体部	底部	その他						
第23図	41-5	A P-20 II	深鉢 胴体					燃糸文 (斜位施文)	たて よこ				極小砂多い	明灰褐 浅黄橙	良 堅	中期末か			
	41-6	B G-37 II	深鉢 口縁		(18.8)			竹管刺突文+縄 文	よこ 外反	平縁				にぶい褐 にぶい橙	良 堅	中期末か 後初			
	41-7	C I-35 I	小鉢 口縁		(10.2)			沈線文	不明						にぶい橙 にぶい橙	良 堅	十腰内 I式		
	41-8	B G-23 II	小鉢 口縁		(20.4)			平行沈線 (磨消縄文)	よこ	平縁					黒褐橙 橙	良 堅	十腰内 IV式		
	41-9	B O-41 I	深鉢 口縁		(32.0)			沈線文+隆帯	よこ	肥厚					にぶい褐 褐灰、にぶい褐	良 堅	十腰内 I式	18号出土 土器片と同一か	
	41-10	R I-38 II	台付鉢 口縁		(16.0)			沈線文	よこ						灰白 灰白	良 堅	十腰内 I式		
	41-11	B J-23 I	小鉢 口縁		(15.4)			沈線文	よこ	肥厚					橙 橙	良 堅	十腰内 I式		
	41-12	B O-38 V	小鉢 口縁		(16.0)			沈線文	よこ						浅黄橙 灰褐、黒褐	良 堅	十腰内 I式		
	41-13	B H-29 I	小鉢 口縁		(6.6)			沈線文	よこ	小波状					にぶい橙 にぶい橙	良 堅	十腰内 I式		
	41-14	B K-31 I	深鉢 胴体					無節縄文	よこ						淡赤橙 淡赤橙	良 堅	十腰内 I式		
41-15	A R-11 I	鉢 胴体					燃糸文 (斜位施文)	よこ						明褐灰 淡黄	良 堅	後期か			
第24図	41-16	C P-53 I	香炉? 胴体					入組状沈線文	なで なし					淡赤橙 灰褐	良 軟	後期 中葉			
	41-17	C H-47 I	深鉢 胴体					燃糸文	よこ					暗赤灰 にぶい橙	良 堅	十腰内 I式			
	41-18	C Q-43 I	深鉢 胴体					沈線文	よこ					にぶい橙 浅黄橙	良 堅	〃 〃			
	41-19	C M-46 I	小鉢 口縁					磨消縄文	よこ					にぶい褐 にぶい褐	良 堅	〃 〃			
	41-20	C Q-54 I	深鉢 口縁		(22.0)			磨消縄文	よこ					沈線太く深い方 形区画	にぶい赤褐 暗灰黄、浅黄橙	良 堅	〃 〃		
	41-22	C Q-54 I	小鉢 口縁		(10.0)			磨消縄文	よこ	波状					灰黄 灰黄	良 堅	〃 〃	胎土に中径礫含 む	
	41-23	C O-45 III	小鉢 口縁		(11.0)			磨消縄文	よこ	波状					にぶい褐 にぶい赤褐、黒	良 堅	〃 〃		
	41-25	A M-15 II	小鉢 口縁		(19.4)			磨消縄文 (無節縄文+沈 線文)	不明	波状?					灰褐 暗灰黄	良 堅	〃 〃		



第12表 縄文土器観察表(2)

(単位 cm)

挿図番号	図版番号	地区土層	器形部位	器高	口径	底径	最大径	外面施文	内面調整	その他の特徴				土色	外面内面	胎土	焼成	分類	備考
										口縁部	胴体部	底部	その他						
第24図	41-26	B H-19 Ⅲ	深鉢 口縁					磨消縄文 (無節縄文+沈 線文)	なな め					黒 にぶい橙	良	堅	十腰内 I 式		
	41-27	C Q-55 I	深鉢 胴体					磨消縄文	よこ 入念					橙、淡橙 橙	良	堅	〃		
	41-28	B G-37 V	深鉢 胴体					磨消縄文	よこ					灰 褐 灰 褐	良	堅	〃		
	41-29	B H-19 Ⅲ	深鉢 胴体					磨消縄文 (無節縄文+沈 線文)	なな め					黒 にぶい橙	良	堅	後期		
	41-30	B H-24 Ⅱ	深鉢 胴体					磨消縄文	よこ					黄 橙 黒 褐	良	堅	十腰内 IV 式か		
	41-31	A O-14 Ⅱ	壺 胴体					入組状磨消縄文	不明 継ぎ 目有				注口の可能性あり	黒褐、にぶい 褐 灰	良	堅	十腰内 IV 式		
	41-32	C N-51 V	深鉢 胴体					捻糸文 (無節)	よこ					にぶい橙 黒褐、浅黄橙	良	堅	十腰内 I 式		
	41-33	C R-56 Ⅲ	小鉢 口縁	(12.8)				平行沈線+捻糸 文(斜)	よこ 肥厚	平縁				橙、淡赤橙 淡 黄	良	堅	〃		
	第25図	41-34	B N-29 V	小鉢 口縁	(18.0)			L R 縄文	よこ					淡赤橙 にぶい橙	良	堅	〃		
		41-35	B F-16 V	小鉢 口縁	(18.4)			無節 R L 縄文	よこ	平縁				赤 橙 明赤灰	良	堅	後期か		
		41-36	C N-44 I	小鉢 口縁	(12.0)			L R 縄文	よこ	平縁 内傾				赤 橙 明赤灰、赤橙	良	堅	後期か		
		42-1	B J-21 Ⅲ	小鉢 胴体				R L 縄文	よこ					灰褐、橙 にぶい橙	良	堅	後期		
		42-2	C J-57 I	小鉢 口縁	(11.2)			L R 縄文	よこ	内傾				褐灰、明赤褐 にぶい橙、明赤 褐	良	堅	十腰内		
		42-3	C G-46 I	深鉢 胴体				L R 縄文 (無節)	よこ なな め				赤 菱	橙、黄橙 灰 褐	良	堅	〃		
		42-4	A R-13 Ⅲ	鉢 胴体				無節縄文	よこ					灰 赤 灰 褐	良	堅	後期		
42-5		C H-45 I	小鉢 口縁	(17.0)			L R 縄文	たて よこ	肥厚				暗赤褐 暗赤褐	良	堅	〃			
42-6		C J-57 I	小鉢 口縁	(11.2)			L R 縄文	よこ					褐 灰 にぶい橙	良	堅	〃			
42-8		C I-53 I	壺か 口縁				無文(たてみが き頸部平行沈線 か)	よこ	平縁				暗赤褐、明赤褐 にぶい橙、赤褐	良	堅	後期か			
42-9		B G-19 Ⅱ	深鉢 胴体				L R 縄文	よこ					にぶい褐 灰褐、褐灰	良	堅	後期			

第13表 縄文土器観察表(3)

(単 位 cm)

挿図番号	図 版 番 号	地 区 出 土 区 層 位	器 形 部 位	器 高	口 径	底 径	最大径	外 面 施 文	内面 調 整	そ の 他 の 特 徴				土 色	外 面 内 面	胎 成 土	焼 分 類	備 考
										口縁部	胴体部	底 部	そ の 他					
第26図 -1	42-12	A M-15 II	台付鉢 口縁		(22.0)			入組伏磨消縄文	よこ	口唇肥厚			内面にて割小突起	黒褐、淡赤橙 灰褐、浅黄	良堅	十腰内 IV式	赤変	
-2	42-13	A M-15 II	台付鉢 口縁		(22.2)			入組伏磨消縄文	よこ	口唇肥厚			〃	〃	良堅	〃	第26図 2-4同一個体	
-3	42-11	A M-15 II	台付鉢 口縁		(22.0)			入組伏磨消縄文	よこ	口唇肥厚			〃	〃	良堅	〃		
-4	42-10	B F-22 III	小鉢 口縁		(18.4)			平行磨消縄文	よこ 入念	小波状 内傾			黒褐、褐灰 黒 褐	良堅	十腰内 II式			
-5	42-16	C Q-57 I	台付鉢 口縁		(13.0)			羊歯状文	よこ 入念	B突起			にぶい橙 明 褐 灰	良堅	大 洞 B-C式			
-6	42-18	C N-5 <sup>△</sup> I	鉢 胴体					羊歯状文+磨消 縄文	よこ				淡 赤 橙 明 褐 灰	良堅	〃			
-7	42-17	C O-52 I	小鉢 口縁		(10.4)			平行沈線文	よこ				浅 黄 橙 褐 灰	良堅	晩 期			
-8	42-19	C S-63 I	広口壺 口縁		(15.0)			L R 燃系文	よこ	平 縁 無 文			褐 灰 褐 灰	良堅	晩期前半			
-9	42-22	C L-57 II	鉢 胴体					平行沈線文 L R 燃系文	よこ				褐灰、明褐灰 灰白、暗褐灰	良堅	大 洞 B C 式			
-10	42-21	C G-49 I	鉢 口縁		(22.0)			沈線文+L R 燃 系文	よこ	連続刻 み突起			黒 褐 黒 褐	良堅	大 洞 C I 式			
-11	42-23	C L-57 II	鉢 胴体					平行沈線文+L R 燃系文	よこ				褐灰、明褐灰 灰白、明褐灰	良堅	大 洞 B C 式	第26図9と同一 個体		
-12	42-15	C G-48 I	鉢 口縁		(21.0)			沈線文+L R 燃 系文	よこ	連続刻 み突起			橙 にぶい橙、灰褐	良堅	大 洞 C I 式	器壁内 黒褐色		
第27図 -1	43- 1~4	C L-57 II	壺鉢 胴体					L R 燃系文	よこ				灰黄、暗灰黄 浅黄橙、灰黄	良堅	後-晩期	胎土接合資料		
-2	43-6	A O-14 II	注口 口縁		(7.2)			無文(よこなで)	よこ 入念	平 縁			灰 褐 黒褐、灰黄	良堅	大洞B式			
-3	42-20	C G-45	注口 注口					沈線+雲形文	(備 考)			注口外径 1.3×1.4 内径0.7×0.8	明 赤 褐 灰 褐	良堅	大洞B- BC式	芦か竹を注口に 差し入れてある		
-4	43-7	C S-63 I	台付鉢 台		(9.8)			無 文	同心 円状			台径10cm以上 台高2cm以上	橙 灰 白	良堅	晩期初頭	台内面 黒褐色		
-5	43-9	A R-11 I	壺 底		(4.5)			磨 消 縄 文	同心 円よこ		あげ底		黒、灰褐 黒、褐灰	良堅	十腰内 IV式			
-6	43-5	C G-45 I	深鉢 底		(7.2)			L R 縄 文	同心 円よこ		外縁張 出	あげ底輪積み	明 赤 褐 にぶい 橙	良堅	後 期			
-7	43-1	C G-47 I	深鉢 底		(7.0)			無 文	同心 円状		あげ底		黒 褐 淡 黄	良堅	〃			

第14表 縄文土器観察表(4)

(単位 cm)

挿図番号	図版番号	地区出土層位	器形部位	器高	口径	底径	最大径	外面施文	内面調整	その他の特徴				土色	外面	胎土	焼成	分類	備考
										口縁部	胴体部	底部	その他						
第27図 -9	43-	B G-19 II	小鉢 底			(5.5)		(無文か)	同心 円状					にぶい橙 にぶい橙			良堅	後期	
-10	43-	C G-47 I	深鉢 底			(7.0)		無文				あげ底		黒褐 淡黄			良堅	〃	
-11	43-11	B Q-44 I	深鉢 底			(10.0)		(縄文)	同心 円状			笹の葉 圧痕		明赤褐 赤褐			良堅	〃	

## 2 土製品

1点だけの出土である。この土製品は、十腰内遺跡報告書（今井・磯崎：1968）では鐸形土製品と命名されたもので、後世の銅鐸，馬鐸，釣鐘などから連想したといわれている。また、『日本原始美術大系5』<sup>(注1)</sup>では、「土製垂飾」の名称を用いている。

A地区，K-13・L-13区の黒色土層（第層）から2片出土し，接合したが，身部の大半を欠いている（第28図，図版43-12）。

全体の土色は，明赤褐色～淡赤橙色であるが，片面に黒褐色の焼成むら斑点状に認められる。現存高4.2cm，身幅4.6×3.5cm（推定），頂上部に鱗状突起が造りだされ，この部分には，紐などをとおして垂下げたような，目形の小さな貫通孔があるが，磨滅痕は明瞭でない。

身の横断面形は，銅鐸のそのように扁円形（目形）で，全体の推定高は6～7cm，開口部径は身幅径よりも若干すばまる形態となるようである。身の両面には，沈線と刺突文の組み合わせによる馬蹄形状の文様が施されているが，全容は不詳である。

このような鐸形土製品は，縄文時代後期初頭の十腰内第群土器に伴出し，県内外の遺跡から出土例がある。<sup>(注2)</sup>十腰内遺跡（前出同：1968）では，a，b，cの3類に区分し，更に別類が追加できることを示唆しているが，粗製品と精製品に区分できるとすれば，本遺跡出土の鐸形土製品は，後者に属するものであろう。器形は異なるが，モチーフは岩手県日戸遺跡<sup>(注3)</sup>出土の土製垂飾に類似している。（北林）

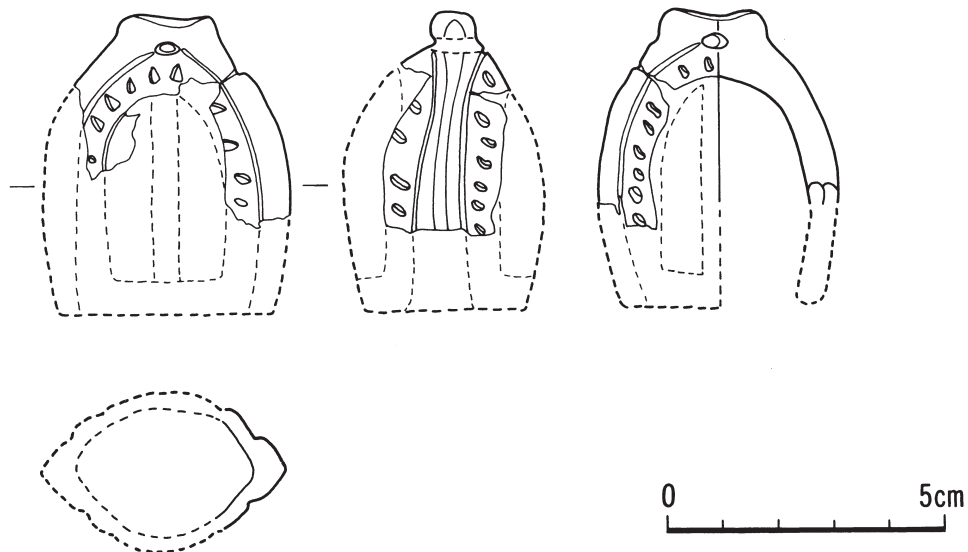
### 注

1．武器，装身具篇，47頁中段。講談社，1978年5月。

2．煩雑になるので，次の報文を掲げる。祭祀に使われた一種の楽器と考えられている。

高橋 潤 「鐸型土製品についての一考」『うとう』第82号，青森郷土会，1976年5月。

3．岩手県岩手郡玉山村，岩手大学所蔵。注1，所収。



第28図 土製品実測図

### 3 石器

磨製石斧1点，石鏃11点，剥片類5点，すり石類4点，計21点出土した。出土量が極めて少なく，分布状態も概して散在的であるが，剥片類の中には，かなりの距離を置いて接合したものがあ

る。

磨製石斧（第30図5，第15表）

基部上方で折損しており，基端側のみ出土している。

石鏃（第29図1～11，第15表）

完形品5点，欠損品6点の出土であるが，形態，大きさ共にバラツキが大きい。特に第29図1などは，矢尻としての機能が疑われる程の大きさを持っている。基部については，有柄，無柄及び平基，凹基等，各種の形状があり，尖頭部の整形も多様である。なお，第29図11は，ドリル状の突出した基部を持つが，この部分には，タール状の付着物が観察される。

剥片類（第29図12～16，第15表）

第29図12は，打面側を除く，背面のほぼ全周縁に調整剥離が加えられており，R-フレイク（retouched flake）あるいは不定形剥片石器の類に属する。13・16は，周縁の一部に剥離痕が認められるが，不規則で偶発性が強く，刃部を作り出したものとは見なし難い。14・15は，黒曜岩製のもので，共に表皮を残し，15の正面図右側縁には，微細な刃こぼれ状の剥離痕が観察される。

すり石類 (第30図 1 ~ 4, 第15表)

第30図 2・3 は、いわゆる「特殊磨石」に属するものである。柱状礫の稜に使用痕を残し、「三角柱状磨石」の呼称もある。1・4 は、片面にくぼみを持ち、1 は、側縁部に敲打痕、4 は、擦痕がみられる。  
(工藤 大・米沢真一・工藤 均)

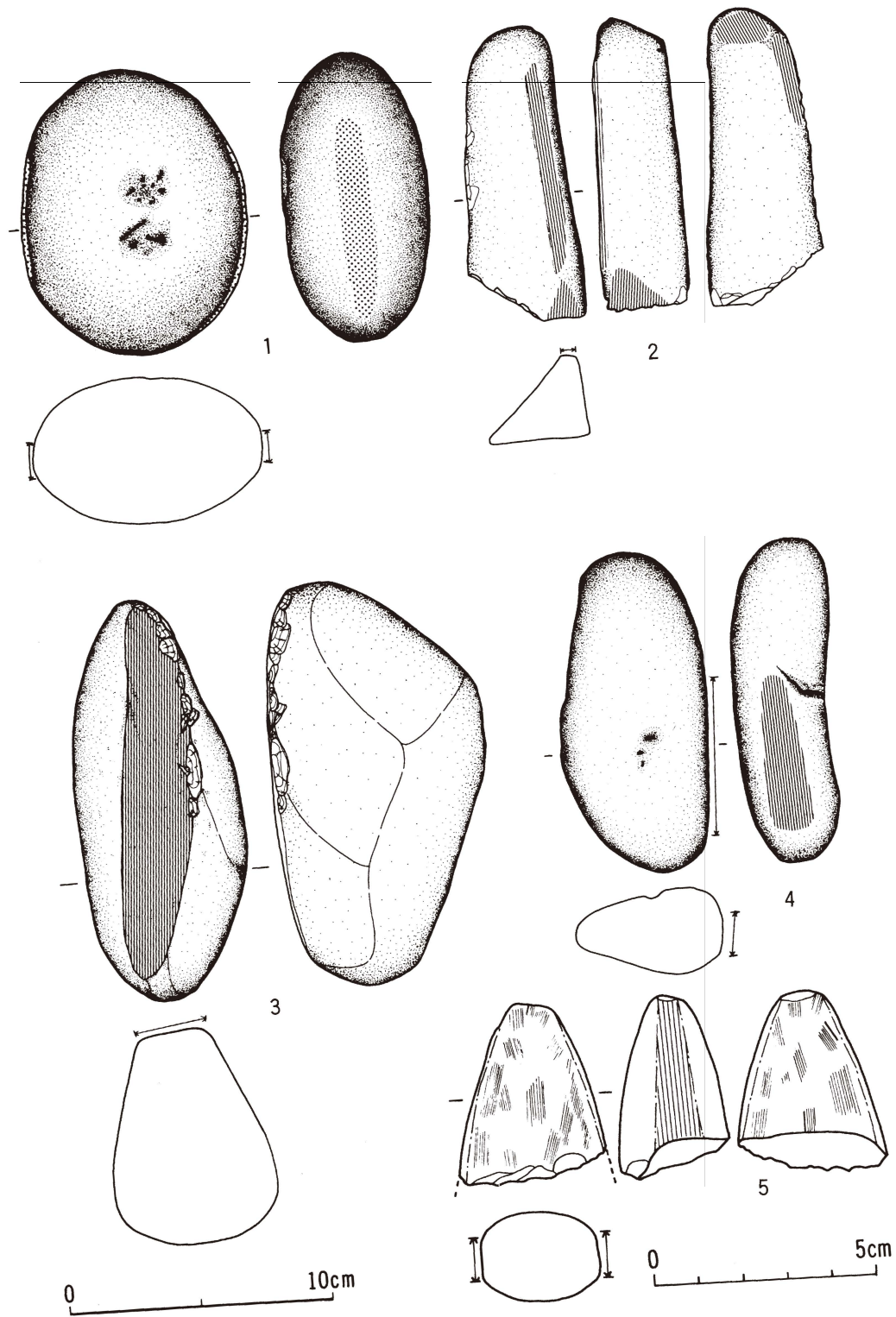
第15表 石器計測表

No	図版番号	器種	出土区・層位	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重さ (g)	石種	備考
1	第30図5	磨製石斧	K-70・I	(41)	(38)	(21)	(43.8)	はんれい岩	刃部欠損
2	第29図1	石 鏃	O-42・I	(56)	13	7	(5.0)	珉質頁岩	尖頭部基部欠損
3	2	〃	L-35・II	34	13	6	1.8	〃	
4	3	〃	N-70・II	(35)	15	5	(2.0)	玉 ず い	尖頭部欠損
5	4	〃	G-45・II	32	(13)	(3)	(1.7)	珉質頁岩	尖頭部・側縁部欠損
6	5	〃	M-54・II	21	15	4	0.7	〃	
7	6	〃	H-53・I	27	16	3.5	1.1	碧 玉	
8	7	〃	I-50・I	(20)	11	3.2	(0.5)	玉 ず い	尖頭部欠損
9	8	〃	M-16・I	(18)	11	4.2	(0.6)	珉質頁岩	〃
10	9	〃	G-44・I	(12)	10	(4)	(0.5)	玉 ず い	尖頭部・基部欠損
11	10	〃	M-44・II	15	11	2	0.3	〃	
12	11	〃	M-53・IV	24	14	5	1.3	珉質頁岩	基部にタール状の付着物
13	12	剥片類	M-54・II P-64・I	60	52	11	49.6	〃	2点接合
14	13	〃	O-64・II	56	40	12	2.4	〃	〃
15	16	〃	K-25・I	38	36	12	10.2	〃	
16	14	〃	F-15・V	42	27	8	7.0	黒 曜 岩	表皮を残している
17	15	〃	F-14・VI	23	14	7	1.7	〃	〃
18	第30図1	すり石類	Q-43・I	109	87	55	768.8	石英はん岩	凹・敲打痕をもつ
19	2	〃	M-11・II	114	41	31	200.2	砂 岩	稜にすり面をもつ
20	3	〃	M-60・II	156	74	82	100.1	〃	〃
21	4	〃	G-25・I	122	59.2	34	34.7	〃	凹・擦痕をもつ





第29图 石器实测图(1)



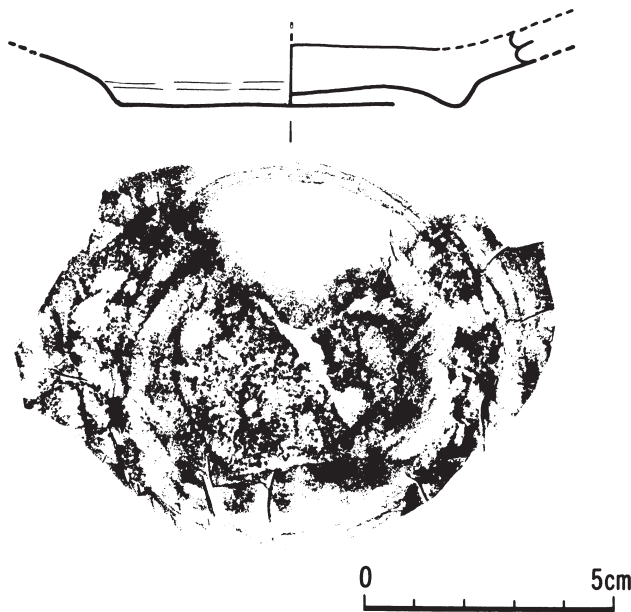
第30図 石器実測図(2)

#### 4 その他の遺物

表採品を含めると、土器 1 点、古銭 3 点、きせる（煙管）2 点、かんざし（簪）1 点である。第17図のように分布し、基本土層の第 Ⅱ 層から出土したが、いずれも遺構に伴うものではなかった。

##### (1) 土 器

1 点出土した（第31図，図版46 - 1）。特徴などについては観察表に示したが、器種，時代など不詳な点が多い。



第31図 歴史時代土器拓影図

土 器 観 察 表

挿図番号	31	図版番号	46-1
地区・グリッド・層位	A地区・M-13・I		
器 形 ・ 部 位	台付皿・台部		
器 高	cm	底 径	7.7cm
口 径	cm	最大径	cm
外面施文	無し(勾台内同心円状で粗雑)		
内面調整	入念		
口縁			
胴体			
底	低い勾台状		
その他特徴	硬度は土師器<須恵器		
胎 土	良	焼 成	堅
土色	外面	(くすんだ)灰白	
	内面	(くすんだ)灰黄	
型式時期	土師器以後か		
備 考			

##### (2) 古 銭

3 点出土した（第32図，第16表，図版46 - 2 ， 3 ， 4）。江戸～明治時代の寛永通宝 2 点と大正時代の一銭銅貨 1 点である。

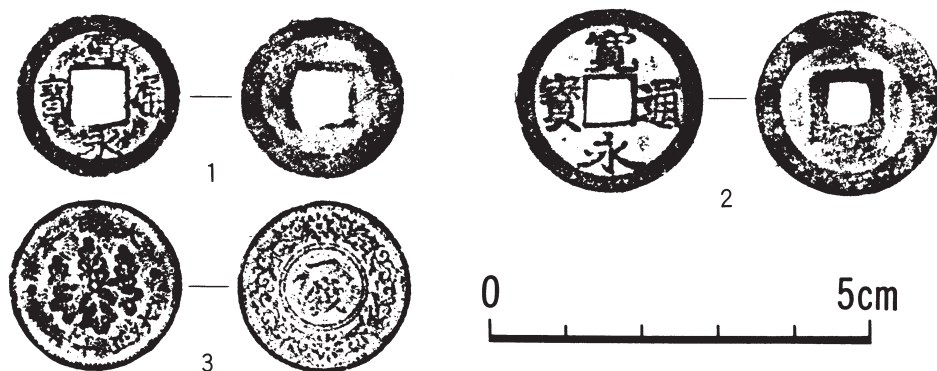
第16表 古 銭 観 察 表

挿図番号	図 版 番 号	グリッド名	層位	銭 貨 名 (面文)	背文	材 質	銭 径 (mm)	輪 幅 (mm)	孔 径 (mm)	銭 厚 (mm)	重 さ (g)	備 考 (注1)
第 Ⅲ 図 -1	46-2	Q-35	Ⅱ	寛永通宝	なし	銅ほか	21	2	7.5×7	0.6	1.65	折れ曲って多少錆が浮く。
-2	46-3	L-13	Ⅱ	寛永通宝	なし	銅ほか	23.5	2.3	5.5	0.8~ 1.0	2.7	保存良好
-3	46-4	O-33	I	(一銭)		銅ほか	22.5	0.5		1.0	3.4	大正十年(1921年) 鑄造、二次的 火熱のため変色、錆が浮く。

第32図 1 は、「八宝」、第32図 2 は「ス宝」とみられる。「ス宝」は、「古寛永」(1626～1656年鑄造)、「八宝」は、「新寛永」(1668～1870年代)に分類される。<sup>(注2・3)</sup>いずれも、江戸時代から明治時代初期までの約200年間通用した銅一文銭である。

寛永通宝の出土例は多いが、次の遺跡及び文献等を列記しておく。

藤崎, 柏木, 猿賀	工藤 正	1961, 1968	
脇野沢村小沢	奈良 仁	1972	
浪岡城跡	浪岡町教育委員会・工藤	1980	
尻八館跡	県立郷土館・岩本ほか	1980	
平賀町富山遺跡	県教育委員会	1975	県埋文21集
" 鳥海山遺跡	"	1977	" 32集
浪岡町杉の沢 "	"	1979	" 45集
大鱈町砂沢平 "	"	1980	" 53集
碓ヶ関村古館 "	"	1980	" 54集
" 永野 "	"	1980	" 56集
階上町志民(2) "	"	1981	" 65集
六ヶ所村発茶沢 "	"	1982	" 67集
南郷村石ノ窪 "	"	1982	" 69集
" 馬場瀬(1) "	"	1982	" 70集
" " (2) "	"	1982	" 70集
八戸市根城跡	八戸市教育委員会	1980	工藤竹久氏らの御教示による(注4参照)。
" 葦窪遺跡	県教育委員会		1982年発掘調査資料による(注5参照)。



第32図 古銭拓影図

### (3) き せ る

2点出土した。そのうち完形品(第33図1, 図版46-5)は表採品で, 別の1点(第33図2, 図版46-6)は, B地区J-25区第 層から出土した。

「きせる」は, きざみたばこ(煙草)の喫煙具であり, 一般に両端の雁首と吸い口は金属製(金, 銀, 銅, 鉄, 真鍮など)で, 中間に<sup>(注7)</sup>羅宇(らお)竹でつくられているが, 形変わりも多い。第33図1は, 全長18.1cm, 重さ31.6gで真鍮製とみられる。この「きせる」は, 中間部分も金属製で, 雁首から吸い口まで同じ地金でつくられており, 俗称「なたぎせる」という携帯用のものと思われる。「ろう吹き」は正面合わせで, 雁首部分には, 「灰落し」をたいたためについた軽い打痕が多数残っている。「きせる」の中にマッチ(燐寸)の軸木がつまっていたことから, この「きせる」は, 明治時代以後に製作, 使用されたものであろう。

第33図2は, 「きせる」の吸い口である。二次的な火熱と腐食・青錆の跡が残り, 「く」の字状に折れ曲っている。長さ7.5cm, 吸口径0.4cm, 羅宇径0.9cm, 重さ11.7gで真鍮製とみられる。地金には, <sup>たがね</sup>鑿による唐草模様の毛彫りと, 桜花模様のメッキ痕<sup>?</sup>がかすかに認められる。地金の装飾から, 18世紀(8代将軍吉宗の頃)以降の製品であらう。

県外における「きせる」の出土例は多いが, 県内では, 浪岡城跡(浪岡城跡, 1980), 下北郡東通村浜通遺跡<sup>(注9)</sup>, 八戸市長者森遺跡<sup>(注8)</sup>, 同市葦窪遺跡<sup>(注9)</sup>などの例がある。

### (4) かんざし(簪)

1点(第33図3, 図版46-7)のみ, C地区O-57区第 層から出土した。かんざしは, 「髪<sup>かみ</sup>刺<sup>さし</sup>」の音便ともいわれているが, 婦女子の頭髪に差す一種の装飾品で, 縄文時代から出土例がある。<sup>(注10)</sup>

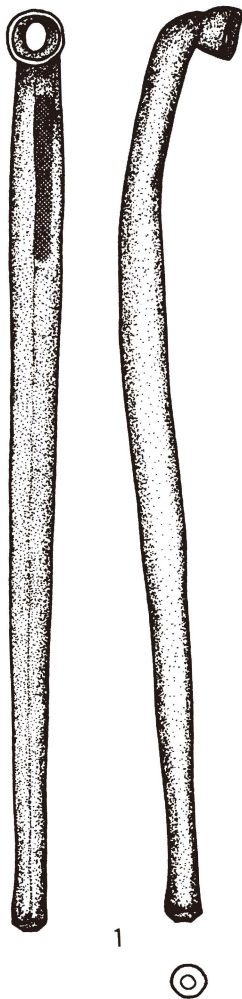
現長13.5cm, 厚さ2mmの真鍮(銅と亜鉛との合金, 黄銅)製, 重量8.75gである。頭部に耳掻きが付けられ, 松葉状の脚部と耳掻きの間には, 径11mmの平打状の円板がつくられ, 花卉状(「家紋」か)の彫刻が表裏に施されている。

江戸時代のかんざしは, 南郷村外長根<sup>(注11)</sup>遺跡から1点出土している(第33図)。 (北林)

#### 注

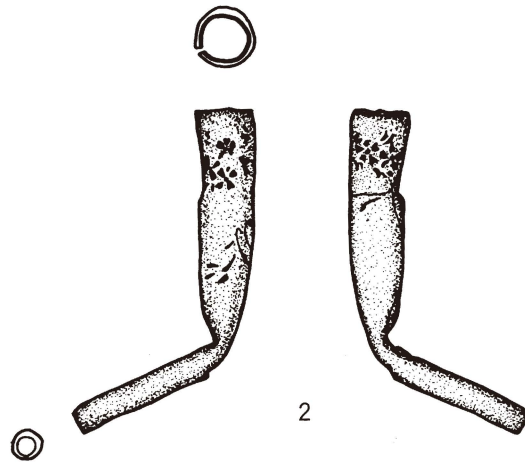
1. 銭径, 孔径は, 縦径と横径をはかり, 同一数値の場合は1数値を記した。銭厚は, 外輪部を計測した。重量測定は, 村上式自動上皿天秤を使用した。
2. 小葉田淳 1966 『日本の貨幣』, 日本歴史新書, 至文堂。
3. 青山礼志 1972 『貨幣手帳』, 頌文社。
4. 八戸市教育委員会 1980 『史跡根城跡発掘調査報告書』, 昭和54年度。八戸市埋蔵文化財調査報告書第2集, 6点出土。



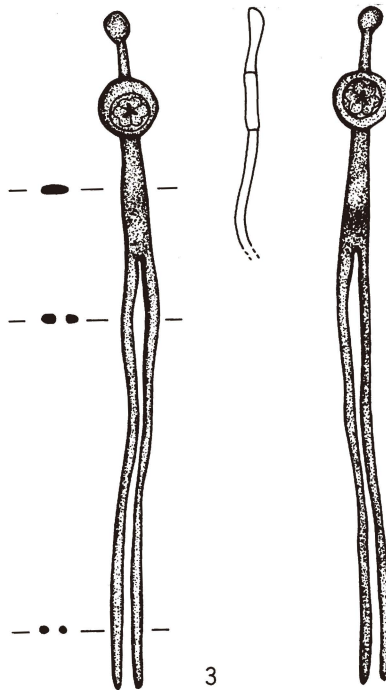


1

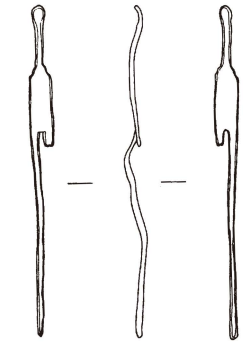
スクリーントーン部分は  
軽い打痕を示す。



2



3



外長根(4)遺跡出土 実測図  
0 5 cm  
(参考例)

0 5cm

第33図 きせる・かんざし実測図

5. 昭和57年に当センターが実施した発掘調査の際、2点出土した。
6. 注6, 7は、田中富吉著『日本の喫煙具』、日本専売公社総務部広報課、事業レポートNo.21、昭和40年12月。同『たばこと塩の博物館展示品図録』昭和53年11月所収。同博物館、半田学芸員の御厚意によって文献を入手することができた。

「きせる」の語源は、カンボジア語の吸管に由来する。煙管と書くようになったのは、「たばこ」が煙草と記すようになった頃と同時期であるが、その時期は明らかにされていない。

たばこは、天文12(1543)年に日本に伝わって、慶長10(1605)年以後庶民に急速に普及した。たばこは、最初に一種の巻たばこの類が入り、パイプ式の竹ぎせるが誕生(弘化3年)し、次いで織田信長の時分(天文3~天正10年, 1534~1582)には金属製のきせるが登場していた。その後、江戸時代になると美術工芸品の域に達した。なお、巻たばこの発売は、明治18年(1886年)で、「きせる」を携行する場合は「提たばこ入れ」とセットになった。
7. 羅宇竹は、ラオス(Laos) = インドシナ半島の一部に属し、北ベトナムに隣接する = から渡来した竹を使用したことに由来する。
8. 昭和56年に当センターが実施した発掘調査の際出土した。
9. 昭和57年に当センターが実施した発掘調査の際出土した。
10. 例えば、縄文時代後・晩期の骨角製かんざしは、宮城県沼津貝塚から出土している。『日本原始美術大系5』、1978年5月、講談社所収。
11. 青森県教育委員会 1981 『国営八戸平原開拓建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』、県埋文64集。

## 考察とまとめ

以上が、八戸市大字是川、三戸郡南郷村大字泥障作の地籍に所在する鴨平(1)遺跡の発掘調査における検出遺構と出土遺物の概要である。

ここでは、発掘調査によって得られた成果を整理し若干の考察と問題点などを指摘してまとめとしたい。

### 1 遺跡の立地

本遺跡の東方約 8 kmには、新井田川が北流して地勢を区切り、また、西方を馬淵川が八戸湾に向けて流れている。本遺跡は、ちょうどこの両河川にはさまれた丘陵上に所在する。この地域の標高はほぼ180~260m前後で、多くの屈曲した小支谷とかなり開折された地形から形成されている。発掘調査地区は、南端と北端が傾斜地、中央部が平坦地となった標高200m前後の丘陵に立地し、その比高差は10m以上となっている。また、南東部の緩傾斜地には湧水地があり、水道が付設されるまで利用されていたといわれている。調査地区は遺跡の中心部からはそれているとはいうものの古代人の居住地としては良好な環境であったろう。

### 2 遺跡の基本土層

調査地区内の基本土層は 8 層に区分された。第 1 層の十和田 b 火山灰、第 2 層下位と第 3 層の中礫浮石層、第 4 層の南部浮石層、第 5 層、第 6 層の八戸火山灰層などの火山灰層は鍵層とすることができたが、基本土層のとおり堆積していたのは、A、C 両地区の傾斜地だけであった。B 地区の平坦地及びその両側の斜面上部は、第 7、8 層が欠除し、第 9、10 層は表土と共に攪乱されていたため、その部分においては層位的に遺構及び遺物の時代を傍証することはできなかった。

遺物は、遺構覆土から出土した数点を除くと、基本土層の第 1 ~ 6 層と第 7 層から出土した。第 1、2、3 層からは、主として縄文後期(十腰内 ~ 式)及び晩期(大洞 B - C ~ C<sub>1</sub>式)の土器が出土した。第 4 層からは縄文早期のムシリ式土器が 1 個体、第 5 層からは、従来器形の全容を掌握できなかった縄文早期の尖底土器が 1 個体出土したが、この土器の出土土層は攪乱を受けていなかった。

### 3 検出遺構

#### (1) 遺構の立地と構成

検出した遺構は27基で、内訳は、溝状ピット7基(第1, 3, 6~8, 23, 24号遺構)、円形・フラスコ状ピット4基(第4, 5, 18, 27号遺構)、小土壇15基(第2, 9, 10, 12, 13, 15~17,

19～22, 28, 34, 35号遺構), 形状不詳 1 基 (第26号遺構) である。これらの遺構は, 平均すると21.7m四方に 1 基の割合で検出されたことになるが, 過密な地区では 4 m四方に 2 基 (第16, 17, 19～22号遺構) の場合も認められた。また, 遺構の種類によって, 構築された地形が異なっている様子は, 第6図の遺構分布図によって確かめられた。

遺構の分布を立地 (占地) のうえから次の 3 群に分類することができるが, 形状不詳の第26号遺構は除外する。

A 群は, 調査地区の南側の傾斜地に立地 (占地) し, 南西に向き, 約10mの比高差がある。溝状ピット 3 基 (第 1, 3, 7 号), 円形・フラスコ状ピット 1 基 (第18号), 小土壌 6 基 (第 2, 19～22, 35号) から構成されるが, 遺構間には時期差がある。

B 群は, 調査地区の B 地区から C 地区に及ぶ標高200m前後の平坦地に立地し, 円形・フラスコ状ピット 1 基 (第27号) と小土壌 8 基 (第 9, 12, 13, 15, 16, 17, 28, 34号) から構成される。

C 群は, 調査地区の北側の傾斜地に立地 (占地) し, 北西に面して約10mの比高差が認められる。溝状ピット 4 基 (第 6, 8, 23, 24号) と円形・フラスコ状ピット 2 基 (第 4, 5 号) から構成されているが, 遺構間の時期差や分布上の規則性などは認め難い。これは, 前記 A, B 群と同様である。

A 群と C 群は遺構の構成 (種類) に相似性が認められるが, B 群とはその遺構構成が対照的である。それは, B 群 (平坦地) には溝状ピットが検出されていない点である。また小土壌が単独あるいは複数 (集団的) で分布し, これらに規則性が認められる点を指摘できる。A, C 群は, 溝状ピットが 3～4 基と円形・フラスコ状ピット 1～2 基で構成されているが, 小土壌は, A 群だけでなく C 群にも存在した可能性は否定できないので, 両群に存在したと仮定すると, 遺構群の構成上類似性が濃いことになる。したがって小土壌と円形・フラスコ状ピットは, 傾斜地と平坦地に立地 (占地) する A, B, C の 3 群に共通して認められる遺構であるが, 溝状ピットは, A, C 群のように傾斜地にのみ構築された遺構であると推論できる。

なお, 遺構の形態的分類は, 検出の項で述べたとおりである。

## (2) 遺構の規模

種類ごとに計測値, 長軸方向等を表にまとめて, 第18, 19, 21表に示した。

## (3) 溝状ピット

最近の発掘調査で多数検出されている遺構のひとつである。その分布は広く東日本の太平洋側一帯を中心に, 北海道から神奈川県にまで及ぶが, 福島, 宮城, 山形の 3 県においては検出例の少ないピットのようなようである。

名称についても, 各地区各様の観がつよく, また, 調査年代の新旧によってもいろいろ異なっ

ている。その名称は、形態、用途の観点から、例えば北海道では「Tピット」(Tはトラップ=Trap(わな)の頭文字)、岩手県では、「陥し穴状遺構」、神奈川県霧ヶ丘遺跡では単に「土壇」の名称を用いているが、用途は「おとし穴」としている。青森県では、昭和48年に最初の溝状ピットが発見された当時は、「小竪穴遺構」と命名していたが、最近では「溝状ピット」に統一されている(第18表参照)。

全国各地の遺跡において検出されたピットの数は、1遺跡最小1基最大431基とまちまちであるが、1遺跡100基以上まとまって出土した例としては、岩手県都南村湯沢遺跡、神奈川県霧ヶ丘遺跡、青森県長七谷地貝塚、長七谷地遺跡、売場遺跡、和野前山遺跡、発茶沢遺跡などがある。

青森県内での出土遺跡は、約44か所、出土総数は約1239基に達している(第18表)。これらを地域別にみると、津軽地方(青森市及び全ての津軽郡)4遺跡16基(1.2%)、下北地方7遺跡29基(2.3%)、県南地方(八戸市・三戸郡・上北郡)33遺跡1194基(96.3%)となり、県南地方に集中している特徴を認めることができる。

溝状ピットは7基検出したが、試掘調査のトレンチとの複合や、農道部分への延長などが原因となって、全体を完掘し、計測できたピットは3基だけである。ここでは、これまで報告された県内外の出土例を参考にしながら若干の分類と対比を行うことにしたい。

遺構の確認は、所在していたところの土層によって異なるが、基本土層の第1層が2例、第2層上位面が5例であった。これらの遺構は、基本土層の第1層まで掘り下げられ構築されている。

平面形態と規模

平面形

葉巻形(第1, 23号)、 隅丸長方形(第6, 8号)、 長楕円形(第7, 24号)に大別した。 類は発茶沢遺跡のA類、 類はD類、 類はC類にそれぞれ類似するものである。なお、八戸市長七谷地貝塚では101基のうち99基が葉巻形であった。

規模

開口部の長さ(長軸)は、およそ344から446cmまでである。発茶沢遺跡では、250cm前後~440

第17表 鴨平(1)遺跡溝状ピット計測表

(単位 cm)

No	遺構番号	地区	グリッド名	確認土層	平面形	口 径	中間 径	底 径	深 さ	断 面 形		長軸方向	覆土	遺構下 限土層	備 考
										長軸	短軸				
1	1	A	Q-21・22 R-22	I下 V上	葉巻形 I	446×64	446×38	474×18	87	A	Y <sub>1</sub>	N53°E	5(B)	Ⅶ	
2	3	A	O-14・15	Ⅲ	( )	( )	428×26	440×18	152	(B)	(V)	N28°E	6(B)	Ⅶ	試掘 開口部欠
3	6	C	H-64・65 G-65	V上	隅丸長方形 Ⅲ	(344)×94	330×52	420×24	154	A	Y <sub>1</sub>	N45°E	7(B)	Ⅶ	
4	7	B	F-27 G-26・27	Ⅲ 相当	長楕円形 Ⅲ	402×90	374×30	388×10	114	B	Y <sub>2</sub>	N17°W	9(B)	Ⅷ	
5	8	C	O-69 P-69・70	V上	隅丸長方形 Ⅲ	366×96	336×70	412×26	138	A	Y <sub>1</sub>	N78°E	11(B)	Ⅶ	
6	23	C	H-61・62	V上	葉巻形 (I)	(240)×100	(220)×40	(230)×20	124	(A)	Y <sub>2</sub>	N29°E	9(A)	Ⅶ	ローム埋 戻し未究
7	24	C	I-63・64 J-63	Va	長楕円形 (II)	(394)×(86)	380×42	406×14	164	(A)	Y <sub>2</sub>	N14.5°E	14(A)	Ⅶ	ローム埋 戻し未究

注 ( )内は、掘り過ぎ又は調査不能なところに位置して完掘できないもの。



第18表 青森県溝状ピット出土遺跡一覧表(1)

No	遺跡名	所在地	名称	基数	調査面積㎡	相伴遺構時代	備考	文献	刊行年
1	発茶沢(2)	上北郡六ヶ所村	小竪穴遺構	3	364	縄文・平安	試掘調査	県埋文9集	昭49年 1974年
2	発茶沢(3)	〃	〃	4	340	〃・〃	〃	〃 24集	1975
3	千歳(13)	〃	溝状ピット	10	(対象) 40,000	縄文・弥生	1974年、1975年調査	〃 27集	1976
4	新納屋(1)	〃	〃	3	2,000	縄文・平安	試掘調査	〃 28集	〃
5	古街道長根	三戸郡五戸町	〃	2	1,200	縄文・奈良	中振浮石層を切る	〃 29集	〃
6	近野(Ⅲ)	青森市	〃	1	(40,000?)	〃・平安	平安住居が溝状ピットを切る	〃 33集	1977
7	源常平	南津軽郡浪岡町	〃	4	(11,500)	〃・〃	縦貫道関係	〃 39集	1978
8	売場(Ⅰ、Ⅱ)	八戸市	〃	60余り	4,145	〃・〃	1978、1979年発掘調査	報告書未刊 (1982 Ⅲ発掘)	
9	104号	上北郡六ヶ所村	〃	1	3,128	縄文	試掘調査	県埋文48集	1979
10	長七谷地 1～8号	八戸市	〃	75	5,927	〃	試掘2～8号発掘1号の合計	〃 51集	〃
11	砂沢平	南郡大鰐町	第〇号土垣	2	10,300	縄文・平安	1979年調査	〃 53集	1980
12	大面	南津軽郡碓ヶ関村	溝状土垣	2	13,500	縄文・弥生、平安、 中世	〃	〃 55集	〃
13	長七谷地 貝塚	八戸市	溝状ピット	101	12,400	縄文	1977、1978年調査分の合計	〃 57集	〃
14	表館	上北郡六ヶ所村	〃	15	19,854	縄文・平安	1979年調査	〃 61集	1981
15	新納屋(2)	〃	〃	1	2,000	縄文(早期)	〃	〃 62集	〃
16	鷹架	〃	〃	3	13,150	縄文(後期)	〃	〃 63集	〃
17	田ノ上	三戸郡南郷村	〃	1	817	縄文	〃	〃 65集	〃
18	発茶沢	上北郡六ヶ所村	〃	431	49,870	縄文・平安	1979、1980年調査分の合計	〃 67集	1982
19	山崎	東津軽郡今別町	〃	7	17,900	縄文(前・中)	1979～1981年の3ヶ年継続	〃 68集	〃
20	三合山	三戸郡南郷村	〃	1	3,500	縄文	1980年発掘調査	〃 69集	〃
21	石ノ窪	〃	〃	6	4,000	縄文	〃	〃 69集	〃
22	馬場瀬(2)	〃	〃	1	6,100	縄文(後晩)	〃	〃 70集	〃
23	前坂下(1)	下北郡東通村	〃	(8)			1980年試掘調査	〃 71集	〃
24	前坂下(3)	〃	〃	13	1,002		〃	〃	〃

第18表 青森県溝状ピット出土遺跡一覧表(2)

No	遺跡名	所在地	名称	基数	調査面積㎡	共伴遺構時代	備考	文献	刊行年
25	前坂下(5)	下北郡東通村	溝状ピット	5			1980年試掘調査	県埋文71集	1982年
26	〃 (6)	〃	〃	1			〃	〃	〃
27	〃 (7)	〃	〃	1			〃	〃	〃
28	〃 (8)	〃	〃	(1)			〃	〃	〃
29	長七谷地 2号	八戸市	〃	58	3,500	縄文	〃	1980、1981 調査 八戸 市埋文8集	〃
30	〃 7号	〃	〃	116	1,000	〃	〃	〃	〃
31	〃 8号	〃	〃	25	10,900	〃	〃	〃	〃
32	鴨平(1)	南郷村 八戸市	〃	7	12,800	縄文(早、後、晩)	1982年度刊行	埋文あおも り1号 県埋文72集	1982年1月 1983年3月
33	〃 (2)	八戸市	〃	6	9,700	縄文(後、晩)	〃	〃 県埋文73集	〃 〃
34	昼巻沢	〃	〃	9	7,700	縄文	1981、1982年分合計 1984年刊行	埋文あおも り1号	1982年1月
35	長者森	〃	〃	7	10,000	〃	1982年度刊行	県埋文74集	1983年3月
36	白山平(2)	〃	〃	9	17,000	〃	1981、1982年度調査	埋文あおも り1号	1982年1月 〃
37	前坂下(13)	下北郡東通村	〃	29	9,000	縄文(早、前、後、 晩)	縄文後・晩期と推定	〃	〃
38	和野前山	八戸市	〃	115	11,800	縄文・平安	刊行未定	〃	〃
39	鶉窪	〃	〃	11	9,600	縄文・奈良	1982年度刊行予定	〃 県埋文76集	〃 1983年3月
40	松原	上北郡上北町	〃	4	1,200	〃	〃	〃 県埋文77集	〃 〃
41	大タルミ	八戸市	〃	9	3,300	縄文	1981年一試掘、1982 年一発掘	埋文センタ ー57年度調 査概要	1982年12月
42	売場(Ⅲ)	〃	〃	57	7,000	縄文・平安	1982年調査	〃	〃
43	葎窪	〃	〃	5	10,000	縄文(中末～後初)	〃 1984年刊行 予定	〃	〃
44	牛ヶ沢(3)	〃	〃	9	9,100	縄文(後期)	〃	〃	〃
計	44			1,239			( )内はピット確認のみを含む、及び記載なしを示す。		

注 本表作成にあたり、成田滋彦氏と資料を交換した。

昭和57年度に文化課が調査を行った六ヶ所村弥栄平(2)、及び幸畑(7)遺跡からも数基出土した。

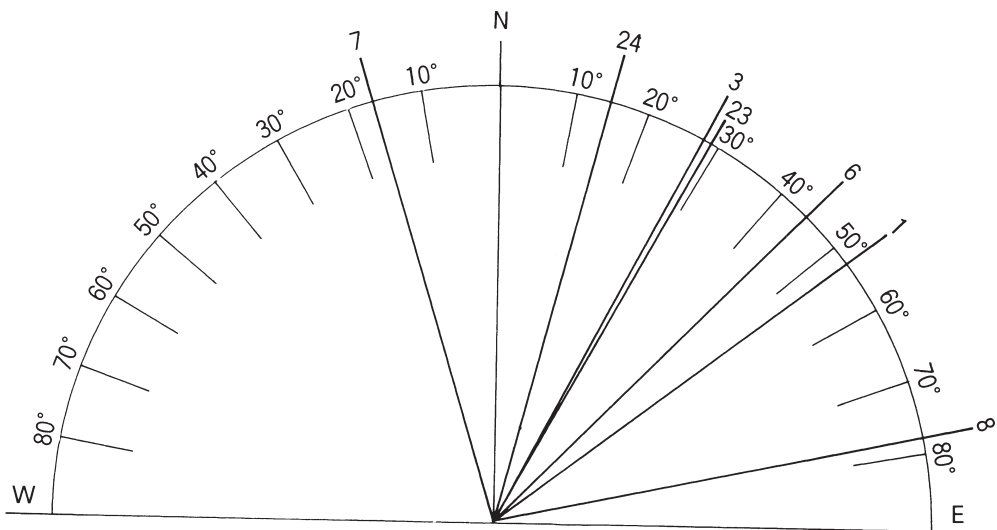
cm前後まで認められたが、300～380cm前後の長さのピットが大多数を占めた。長七谷地貝塚では、245～412cmのサイズが認められたが、平均350cm、310～400cmまでの長さが80%を占めていた。

開口部の幅（短軸）は、64から100cmまでみられたが、90cm前後が5例あった。発茶沢遺跡では20cm未満から115cm前後までの例のうち、40～80cmが大多数を占めた。長七谷地貝塚では、40～206cmの幅がみられたが、平均70cm、45～90cmの類が65%を占めた。

開口部長軸方向の断面形は、次のA、B<sub>2</sub>類に分類した。A類は、長軸方向の壙底部が、開口部の幅よりも両側へ巾着状にふくらむ類のピット（第1、6、8号）である。B類は、長軸方向の壙底部が開口部長軸の幅と同じか、狭い類（第4号）である。本遺跡のA類は、発茶沢遺跡のD類、B類はA～C類（同書第101図、148頁）に含まれる類である。

壙底部の長さ（長軸）は、388～474cmのものがみられたが、400cm前後のピットが4例あった。壙底部の幅（短軸）は、10～26cmまで認められたが、20cm前後の類がほとんどであった。長七谷地貝塚では、10～20cmの類が90%を占めた。

短軸方向の断面形は、三味線の撥状のY<sub>1</sub>類と、滴（しずく）状のY<sub>2</sub>類に分けたが不詳の類もある。Y<sub>1</sub>類には第1、6、8号、Y<sub>2</sub>類には第7、23、24号が該当する。Y<sub>1</sub>類は、発茶沢遺跡のC類、長七谷地2号遺跡のタイプ に相当する。また、Y<sub>2</sub>類は、発茶沢遺跡のD類及び長七谷地2号遺跡のタイプ ～ に類似している。長七谷地貝塚の覆土堆積過程模式図（同書597頁）を参考にすると、Y<sub>1</sub>類は正常（堆積）タイプでY<sub>2</sub>類は崩落タイプあるいは複合タイプに属するものである。



第34図 鴨平(1)溝状ピット長軸方向頻度図

溝状ピットの長軸方向は、第34図に示した。真北から東へ14度～78度傾く類（第1, 3, 6, 8, 23, 24号）と真北から西へ17度傾く類（第7号）に分かれる。長軸方向の方位度の最大偏差角度は、95度である。ちなみに、発茶沢遺跡での長軸方向は、A, B, C地区とも圧倒的に西に偏向しているが、A地区（101基）では76度、B地区（292基）では102基、C地区（37基）では96度のばらつきが認められている。

長軸方向と立地、方向、配列について「霧ヶ丘遺跡の土壌群に関する考察」（今村：1983）は、遺跡の所在する「土地の傾斜方向と土壌（溝状ピット）の長軸のなす角度」すなわち等高線と溝状ピットの長軸方向との関係をグラフ化する方法で分析しているが、その方法を本県でも援用した遺跡もある。長七谷地貝塚（市川・県埋文57集：1980）と長七谷地7号遺跡（坂川・八戸市埋文8集：1982）である。それによると、長七谷地7号遺跡は、霧ヶ丘遺跡と同様北向きの斜面に所在している。長七谷地貝塚は、南西へ向いた斜面に所在しているが、長七谷地7号遺跡における分析結果は、長七谷地貝塚及び霧ヶ丘遺跡の傾向と全く逆の傾向を示した。長軸方向が等向線に対して斜行するタイプの溝状ピットが圧倒的に多く、同様の地形であっても概して谷を下る方向に向く場合（長七谷地7号）と逆の場合（長七谷地貝塚、霧ヶ丘）がある点は注目され、今後の分析方法の問題点として指摘しておきたい。

覆土は、遺構の原形や機能停止後の埋没過程を示すものであるが、2類（A, B）に大別できた。A類は第23, 24号ピットで、覆土最上部に黄褐色粘土質火山灰（ローム）を混ぜえた土層が認められた類である。このピットの短軸方向の断面形は、いずれも本遺跡の滴状Y2類<sup>しずく</sup>である。B類は、第1, 6, 7, 8号ピットで、自然堆積の類であり、短軸方向の断面形は、三味線の撥状のY1類（第1, 6, 8号）とY2類（第7号）に分かれる。A, B両類とも、墳底面の真上に黒色土が薄く認められ、その上位にピットの構築母胎となった土層（標準土層の第～層・ハードローム化した火山灰土）などが混合の度合いを異にして堆積しているので、最上位層（多くは遺構確認面相当）が人為的堆積か自然堆積（黒褐色土<sup>フラス</sup>+中撒浮石）かの相違を分類の基準としている。黄褐色粘土質火山灰土（ローム+浮石）を開口部に投げ込んで埋め戻した（開口部に盛土して閉塞し、当時の凹面を地表と同じ高さにしたような）ピットは、溝状ピットに限らず、フラスコ状ピットにも認められる。〔本遺跡第4号ピット、南郷村右エ門次郎窪遺跡第20号土壌、第55号土壌・石ノ窪遺跡（県埋文69集：1982）、葦窪遺跡2基（昭和57年度当センターの発掘調査の際出土）〕。発茶沢遺跡の溝状ピット431基中20基に、このような堆積が認められている。このような開口部上位面を埋め戻した土壌あるいは人為的堆積のある溝状ピットはこの種のピットが機能を失った場合の処理を示すものであろう。

溝状ピットの用途については「おとし穴遺構（ピット）」を含めて従来諸説があるが、（宮坂、宮坂：1966、今村：1973、県埋文57集：1980、浦川：1981、福田：1981、県埋文67集：1982、

八戸市埋文 8 集：1982ほか参照) 本遺跡では溝状ピットの出土数が 7 基と少なく、しかも検出時の制約もあって、いずれの仮説をとるか見解を述べ得るような確定的な根拠を見出すことはできなかった。

現在のところ、溝状ピットの用途は「おとし穴」説が最も有力とされ、その捕獲対象獣は、関東地方でシカ(今村：1973)、北海道ではエゾシカ(内山：1977)、本県ではニホンシカ(県埋文57集：1980)と考えられている。発茶沢遺跡(福田：県埋文67集：1982)では、「地形及び植生は、シカの生息条件に適合すると考えられ、また追い落しを目的とする「おとし穴」を設置するため好条件を備えている。その規模、配列、周辺に同一時期の住居跡が存在していないことなどからシカの群を「おとし穴」に追い込んで捕獲する共同(集団)狩猟用の「おとし穴」群と考えられる」としている。

溝状ピットが100～431基と多数検出された遺跡の標高は、13～30m前後(例えば長七谷地貝塚13～22m、発茶沢遺跡17～18m、長七谷地 2・7・8号遺跡13～20m、和野前山遺跡13.5～22m、売場15～30m、など)で、平坦な丘陵台地や緩傾斜地の地形である。しかも、当時の汀線に近い位置に所在している点が注目される。そして、1基から数基が検出された県南地方の遺跡は、標高が80～200mと、比較的高い位置に所在している傾向(田ノ上、三合山、石ノ窪、馬場瀬(2)、鴨平(1)、鴨平(2)、昼巻沢、長者森、白山平(2)、葦窪、牛ヶ沢)がある。1基から多くて10数基よりも検出されなかった遺跡の溝状ピットも、同じ動物の群を同じように追い込み、しかも、共同(集団)で捕獲する狩猟用「おとし穴」と考えるのか、一考を要するところである。本遺跡を含めて、山間部の斜面上に構築された溝状ピットは、狩猟の方法が異なっていたことも考えられる。追い込み猟ではなく、「けもの道」の近くにでも構築して、ピットに落ちるまで待つて捕える「おとし穴」とも考えられるのではないだろうか。溝状ピット以外の形態をもつ「陥し穴状遺構」(文献略)が、漸次増加していることを含めて、歴史時代の文献、民俗例のほか、地域の気象条件、動植物相、地形 - 例えば、シカのほかにカモシカ、イノシシ、オオカミ、野犬の襲来防止施設(「犬落し」) - などの関連資料の増加を待つて、更に比較検討し、究明しなければならない遺構である。

溝状ピットの年代を示すような遺物は全くなかったので、遺物によって年代を推定することはできないが、遺構の掘り込み面、すなわち、遺構確認面の土層を年代推定の傍証とし得るピットは 2 例(第 3, 7号)認められた。これらのピットは、第 層(中撒浮石層)で確認されたことから、中撒浮石(十和田市中撒<sup>ちゅうせり</sup>から命名した)の降下年代が手掛りとなるものと考えられる。中撒浮石の降下年代は、縄文時代中期後半とされ(松山「遺跡周辺の地質」『馬場瀬遺跡』：1982, 10頁第 2 表)ている。しかし、「本地域では、厚さ10～30cm以上の連続した地層や厚さ 5～20cmの浮石塊として断続する地層もあるが、大部分の地域では黒色土と混合した部分は二次



的な形成層であるから、年代の大まかな示標とはなっても、厳密な年代示標層としては使用できない」ともいわれている（松山，馬場瀬：1982）。なお，長七谷地貝塚における溝状ピットの年代は（市川：1980）縄文時代中期～晩期末と考えられている。また，発茶沢遺跡では，縄文時代後期から晩期までの間のいずれかの時期と考えられている（福田：1982）。

（4）円形・フラスコ状ピット

検出した円形・フラスコ状ピットは4基である。

第4号遺構は，C地区（北端）の傾斜地に立地し，開口部を欠失しているが，現存計測値は第19表のとおりである。断面形からみて，いわゆる「フラスコ状ピット」に分類できよう。

第19表 鴨平(1)遺跡円形・フラスコ状ピット計測表

(単 位:cm)

No	遺構番号	地区	グリッド名	確認面	平面形	断面形	口 径	底 径	深 さ	覆土	地底面ピット	遺構下 限土層	遺 物	備 考
1	4	C	H-63・64	Ⅶ	略 円	フラスコ状	(108×92)	146×140	(80)	5	0	X	0	開口部欠、2層は人為的埋戻
2	5	C	H-63 I-63	Ⅱ 下	円	円筒状	228×200	176×169	150	5	1	Ⅷ	覆土中に細粒炭化物	ピットは底面中央22×20×12cm
3	18	B	I-29・30	Ⅰ 下	円	円筒状	226×212	218×200	122	5	7	X	確認面に土器片1	土器片は縄文後期(十腰内I式)
4	27	B	L-34 M-34	Ⅰ 下	略 円	深鉢状	226×194	132×104	136	7	4	Ⅶ(B)	0	

注 ( ) 内の数字は、掘り過ぎた部分があるため、正確なデータに近い数字を示す。

第5，18，27号遺構は，B，C地区の平坦地に立地しているが特に分布上規則性があったとは認め難いピットである。標高はおよそ200m前後である。これらのピットと第4号ピット（以下このように略称する）と形態上大きく相違する点は，墳底面にそれぞれ1，4，7個の小ピットが確認されている点である。そのほかに，断面形が円筒状あるいは深鉢状である点も異なっている。計測値は第19表に示したが，これら3基の形態及び規模は，八戸市長七谷地第7号遺跡から3基出土した「陥し穴状遺構」と極めて類似している。長七谷地7号遺跡の立地は，北に面した緩傾斜面で，ピットが構築された標高は，16mに2基，14mに1基である。これら3基の遺構の時期は，縄文早期末葉頃と推定されている（坂川：1982）。また，当センターが昭和56年度に発掘調査を実施した八戸市田面木，鶉窪遺跡から出土した16基の「円形おとし穴」にも類似しているので鶉窪遺跡の概要を記してみる。「鶉窪遺跡は馬淵川右岸の小谷にのぞむ斜面に立地して，10基は斜面の等高線に沿うよう「く」の字に並び，6基は小さな沢の両岸にみられた。円形おとし穴は，口径2m以上，深さ1.2mを基準にして大型と小型に分けられ，8基の底面には1～7個の小ピットがあって，<sup>さかもぎ</sup>逆茂木を差した痕跡と思われた。（「埋文あおもり」1号：1982）実測図によると断面形は深鉢状となっている。そして「おとし穴の内部から遺物が出土していないため，明確な年代は不明であるが，縄文時代中期に降下したものとされる中撒浮石によって覆われたものが10基あり，縄文時代中期およびそれ以前につくられたものも含まれていることが明らかになった」（前出同）としている。更に「埋文あおもり」（前出同）によると，このような形態をもつピットは，八戸市長者森遺跡1基，同市鴨平(2)遺跡1基，同市白

第20表 おとし穴状遺構計測表

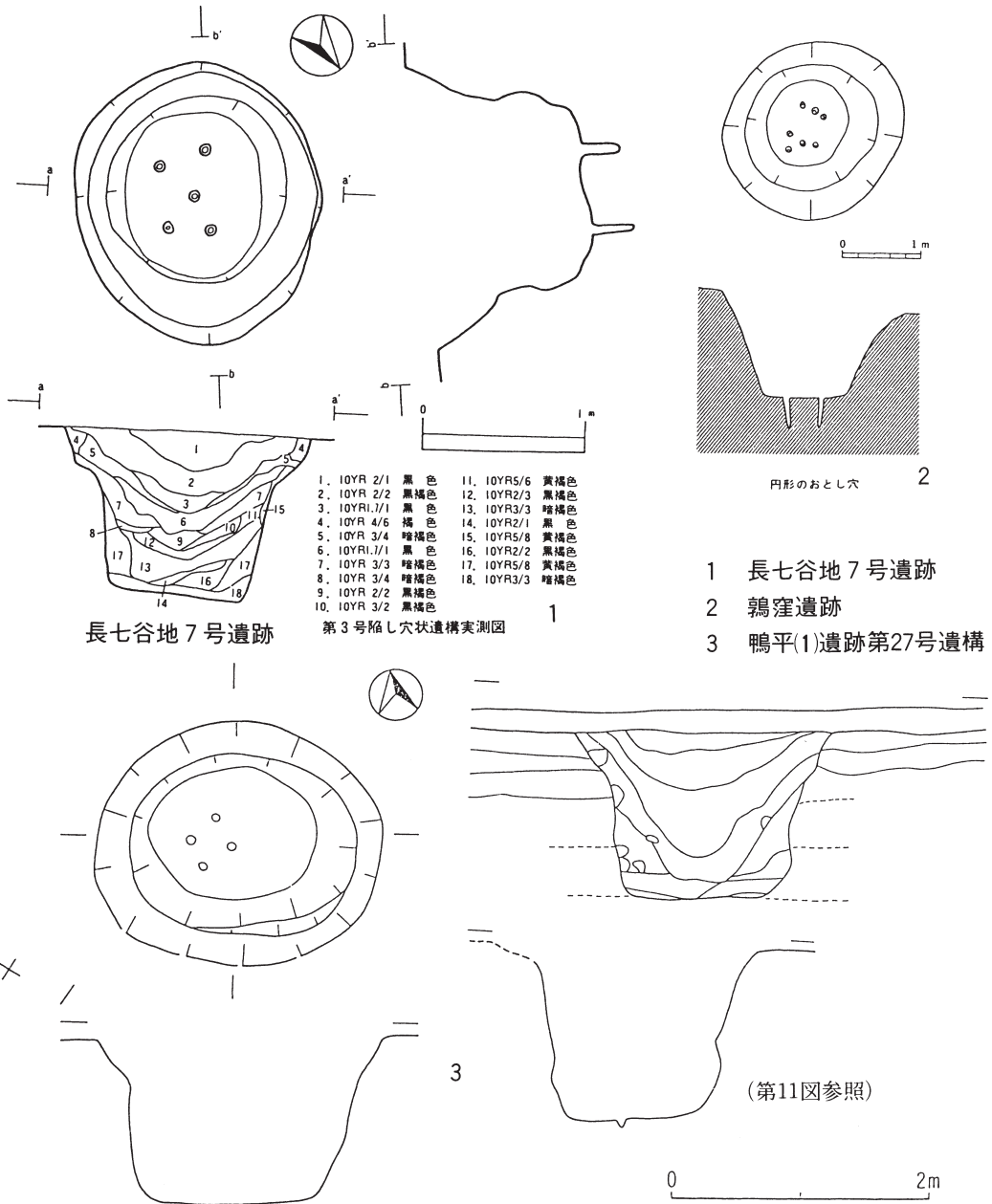
(単 位cm)

遺跡名	遺構No	確認面	形 状		大 き さ			坑底面のピット			備 考
			平面形	断 面 形	開口部径	坑底部径	深さ	数	径	深さ	
長七谷地7号	1	V a 上	円 形	上部に段をもつ、すり鉢状	144×134	85× 72	105	1	18	32	土層33層と細い。自然堆積。遺物なし。
								2	8	25	
	2	V a 上	円 形	〃	165×146	83× 59	119	0			20層 〃 〃
	3	V a 上	円 形	〃	176×152	130× 84	102	5	8 cm 前後	25 cm 前後	18層 〃 〃
鵜窪(八戸市)	2				240×210	122×112	140	1	28	37	省 略
	4				162×150	108× 96	73	1	10	28	〃
								2	7	31	〃
								3	4	27	
								4	6	33	
								5	7	14	
								6	5	18	
	5				212×205	142×126	85	0			〃
	6				228×225	97× 92	140	1	12	29	〃
								2	7	28	
							3	9	27		
							4	7	27		
							5	6	26		

注 鵜窪遺跡の計測値は、その一部を参考までに収録したもの。

山平(2)遺跡で1基発見されたと報告されている。「おとし穴状遺構」は、青森県内では、いずれの遺跡においても溝状ピットと併出していることと、現在のところ、八戸市周辺においてのみ発見されている特異な遺構である点が注目される。しかし、このような「土壇」は、中部地方においては昭和40年に「落とし穴」と推測され、長野県城之平遺跡(宮坂, 宮坂: 1966)の報告が初現であるといわれている。ついで、関東地方で昭和45~46年に神奈川県霧ヶ丘遺跡が調査されたが(霧ヶ丘遺跡調査団・今村: 1973)報告書によると、「土壇」の用途は「落とし穴」で、時期は縄文早期後半に該当するとしている。また、岩手県では、平面形が長楕円形、円形、隅丸長方形で、底面に小ピット(副穴)をもつピットが各地 - 都南村湯沢遺跡(岩手県埋文2集: 1978), 安代町荒屋( )遺跡(岩手県埋文21集: 1981), 金ヶ沢町館山遺跡, 水沢市袖谷地遺跡, 同市南矢巾遺跡, 滝沢村高柳遺跡ほか - で発掘され、いずれも「陥し穴状遺構」とされている(瀬川: 1981, なお、岩手県のおとし穴関係の文献は、岩手県教委32, 35集: 1979)。「出土遺物によって(陥し穴状遺構の)時期を比定できる遺構は、都南村湯沢遺跡の167基中の1例だけで(そのピットの坑底部ほぼ直上から縄文後期初頭の土器片が出土した)ある」。また、「(竪穴)住居跡との切り合い関係からも湯沢遺跡の陥し穴状遺構は縄文後期に比定されると思われる。荒屋( )遺跡の陥し穴状遺構は縄文時代中期の竪穴住居跡を切って構築している事から

縄文中期以降につくられた事は明らかである。そのほかの傍証 中礫浮石、火山灰の堆積 もあわせて、また溝状ピットの時期も併せて縄文時代中期から後期を中心につくられたものと比定しているが、この時期が全ての（陥し穴状遺構の）型式にあてはまるかどうかは明確にする資料がない」（瀬川：前出同）としている。



第 35 図 円形・おとし穴状遺構実測図

本遺跡出土の第4号ピットは、従来の遺構分類からするとフラスコ状ピットに該当し、最近、八戸市周辺の遺跡においても普遍的に出土している遺構で、県内外でも多数発見されている。この形態を示すピットは、縄文前期初頭（円筒下層B式）から晩期にわたって、多少その出土数に増減は認められるものの、各時期とも万遍なく認められており、県内では特に中期末葉～後期初頭が多いようである。その用途については、当初の使用目的と第二次以降の転用とに分けることが妥当であろう。第一次の用途は、植物性食料の貯蔵穴、二次以降の用途（転用）は、一様でなく墓壇 直葬（単独・集団）、甕棺墓（改葬）、ごみ捨て場、大型ピットの場合は避難・越冬小屋その他に利用したことが、各地の出土例によって推論されている。更に究明するためには、ピットの形態的分類、立地、集落内の分布位置、ピット掘り下げに使用した道具、開口部の閉塞材、貯蔵量（ピットの規模）と竪穴居住人口の算出などふれなければならない点が多いが、本遺跡の出土例はわずかに1基のみでは多くの点に論及できない。したがって、用途については前記の研究論文（堀越：1975、永瀬：1981）等の引用にとどめるが、本遺跡の第4号ピットは、集落あるいは竪穴住居跡から多少離れた傾斜地の最も高い稜線上の、しかも、掘り下げると直ちにローム層（黄褐色粘土質火山灰土）に達するような地点に設けられたことは確かである。貯蔵用のピットがフラスコ状に掘り込まれているのは、ピット内の温度、湿度を一定に保つため、開口部を最小限度の規模にするという生活経験上の知恵から順次改良され、このような形態に定着したものであろう。

時期については、遺物の伴出が認められないことから、的確な時期は求め得ない。しかし、覆土の第2層に、凸レンズ状に埋め戻されたような痕跡があることから、この「埋め戻しの技法」が溝状ピットの「埋め戻し」（第23、24号遺構、ほかの類似例）と多少共通性があるとすれば、この点に若干、時期を判断するうえでの手掛りが求められそうであるが、速断は避けたい。

第5、18、27号ピットは、前記のように、規模、形態のうえからは県内外で「おとし穴（陥し穴状遺構）」として、その用途が示されたピットとよく類似している。しかし、本遺跡から検出した3基の円形ピットが、すべて「おとし穴状ピット」の機能をもつものか断定できるだけのデータは得られなかった。第5、18、27号ピットの時期については、第18号ピット確認面から出土した縄文後期初頭に編年されている十腰内式土器片が手掛りとなる。したがって、その時期は、後期以前か後期初頭前後と推測されるが、3基が同時期に存在したか否かは判断し難いところである。

#### （5）小 土 壇

調査地区内から検出した遺構（ピット群）は27基であるが、その内訳を比率で表わすと溝状ピット25.9%（7基）、円形・フラスコ状ピット14.8%（4基）、小土壇55.6%（15基）、形状不

詳ピット3.7% ( 1 基)となり、小土壌は検出遺構の半数強を占めている。この小土壌群は、前記のように、遺構の平面形と断面形の形状や規模の大小等によって類別されたものであり、溝状及び円形・フラスコ状ピットの計測値よりも開口部径、墳底部径、深さなどの数値が小さな類である。これらの形態分類は、あくまでも現存した形状によったもので、それがそのまま構築当時の形態とは限らないことは無論のことである。

第21表の計測値をもとにして、改めて分類、検討してみたい。

小土壌の立地は、南向きの緩傾斜地 ( 第 2 , 19 ~ 22 , 35号の 6 基)よりも平坦地 ( 第 9 , 10 , 12 , 13 , 15 ~ 17 , 28 , 34号の 9 基)にやや多く、 2 対 3 の割合になっている。また、これらの小土壌は、単独で検出した類 ( 第 2 , 10 , 13 , 28 , 34 , 35号の 6 基)と複数 ( 集团的) で検出した類 ( 第 9 - 16 - 17号 , 12 - 15号 , 19 - ~ - 22号の 3 群)に分類することができるが、複数の基数は 2 ~ 4 基で全体的に複数例が多く、その割合は 2 対 3 となっている。

第21表 鴨平(1)遺跡小土壌計測表

(単 位cm)

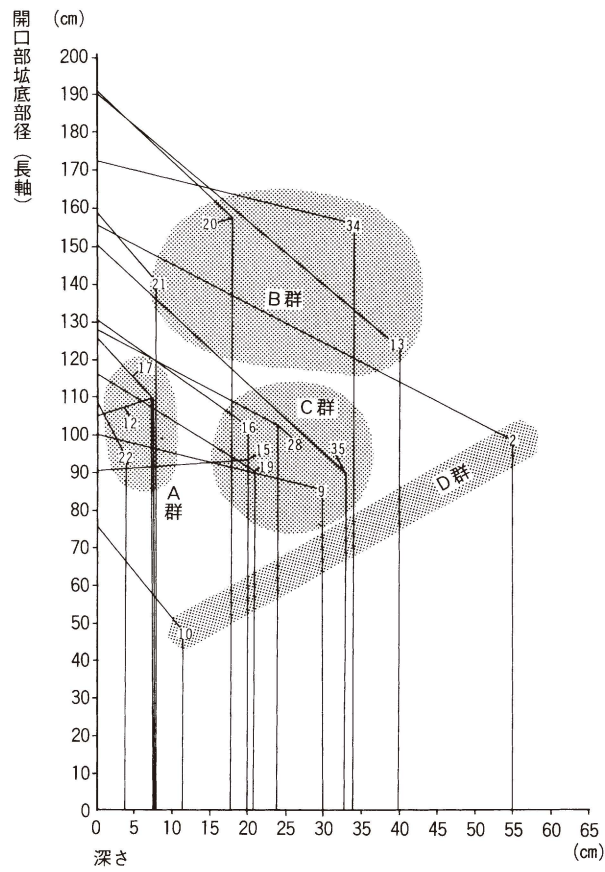
No	遺構番号	地区	グリッド	確認面	平面形	断面形	開口部径	墳底部径	深さ	長軸方向	覆土層数	遺構下限土層	備 考 (遺物有無)
1	2	A	N-16	Ⅲ	不整円形	梯形状	155×150	98×95	55	N 8°W	6	V	近くからムシリ式土器片出土
2	9	C	R-52	Vb	隅丸長方形	バット状	100× 50	85×40	30	N80°E	2	Ⅶ	遺構上位層に礫が 3ヶ配置
3	10	C	R-62	Ⅲ	不整楕円形	凸レンズ状	75× 65	47×43	23	N35°W	3	Ⅶ	同じグリッドから後期土器片が約20点出土
4	12	C	M-50	Ⅵ	隅丸長方形	浅いフラスコ状	105× 75	110×80	15	N52°W	3+B	Ⅶ	
5	13	C	H-55	Ⅲ	不整楕円形	凸レンズ状	190×135	123×65	40	N47°E	4	Ⅶ	覆土に十和田 a 火山灰塊
6	15	C	M-50	Ⅲ	隅丸長方形	船底状	90× 75	93×64	20	N72°W	1	Ⅶ	確認面に礫 1ヶ配置
7	16	C	Q-51 R-51	Ⅵ	隅丸長方形	〃	130× 80	102×55	20	N90°E	3+B	Ⅶ	
8	17	C	R-51	V	隅丸長方形	〃	125× 70	110×10	15	N50°E	2	Ⅵ	
9	19	B	K-31	V	隅丸長方形	〃	115× 88	90×57	21	N78°E	1	V b	覆土に土器片 1点あり
10	20	B	K-31	V	隅丸長方形	〃	190×100	157×76	18	N79°E	1	V b	覆土に土器片 2片あり ピット(根跡か)2ヶ壁を切る
11	21	B	J-3	V	隅丸長方形	〃	158× 77	140×70	8	N78°E	1	V b	
12	22	B	J-31 J-32	V	不整隅丸長方形	〃	107× 55	93×28	4	N68°E	1	V b	
13	28	C	P-46	V	不整隅丸長方形	〃	128× 94	102×57	24	N50°E	3+C	V b	坑底に炭化物とクルミの炭化したもの出土
14	34	B	N-35	V a	不整楕円形	〃	172× 70	156×40	34	N25°E	2	V b	近くから獣骨片出土 (M-35 V層)
15	35	B	H-23	V	不整隅丸長方形	〃	150×119	89×54	33	N48°E	3	V b	
1	26	B	G-29	Ⅶ	形状不詳 (楕円形か)	U 字 状	128×100	120×25	80	N52°W	5	Ⅷ	2分の1位調査地区外

注 Bはブロック、Cは炭化物を示す。第26号ピットは、小土壌ではないが、便宜上表に入れた。

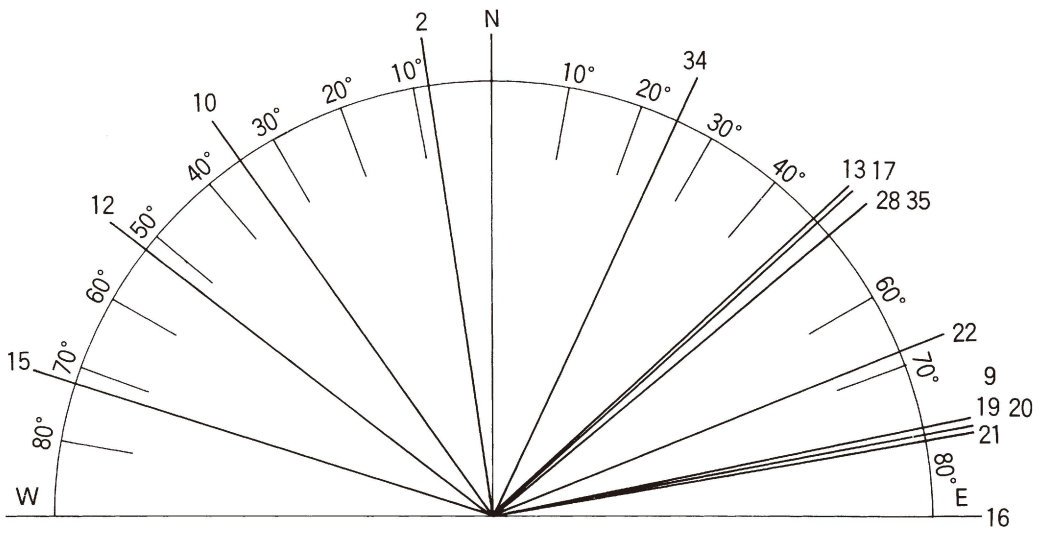
確認面は第 層が 4 例 ( 26.6% ), 第 層がなく、第 a層及び第 b層が 9 例 ( 60.0% ), 第 層が 2 例 ( 13.3% ) となっており、立地及び堆積土層と関係が深いようであるが、確認面は、一様ではない結果が認められる。

平面形は、不整円形 2 基, 13.3% ( 第 2 , 10号), 不整楕円形 2 基, 13.3% ( 第13, 34号),





第36図 鴨平(1)遺跡小土塚規模相関図



第37図 鴨平(1)遺跡小土塚長軸方向頻度図

不整隅丸長方形 3 基, 20.0% (第22, 28, 35号), 隅丸長方形 8 基, 53.3% (第 9, 12, 15~17, 19~21号) に分類できる。

断面形は, 梯形状, 浅いフラスコ状, パット状 (写真用) が各 1 例 (各6.7%), 凸レンズ状 2 例 (13.3%), 船底状10例 (66.7%) に分かれる。

開口部や壙底部及び深さなど規模については, 第36図 (小土壙規模相関図) にまとめて示した。

開口部の径は (長軸, 以下同じ) 最小75cm一例 (第10号), 75~100cm 3 例 (第9, 10, 15号), 105~150cm 7 例 (第12, 16, 17, 19, 22, 28, 35号), 155~190cm 5 例 (第 2, 13, 20, 21, 34号) である。

壙底部の径は, 最小47cm (第10号), 次いで85~98cm 6 例 (第 2, 9, 15, 19, 22, 35号), 102~123cm 5 例 (第12, 13, 16, 17, 28号), 140~157cm 3 例 (第20, 21, 34号) に分けられる。

深さは, 4~8cm 2 例 (第21, 22号), 15~24cm 8 例 (第10, 12, 15, 16, 17, 19, 20, 28号), 30~40cm 4 例 (第 9, 13, 34, 35号), 最新が55cm 1 例 (第 2号) である。

これらのデータに第36図 (小土壙規模相関図) を組み合わせると, 15基の小土壙は, 第36図のスクリーン・トーンで示したような, A~D群に分類することもできる。A群は, 開口部径105~125cm, 壙底部径93~110cm, 深さ 4~15cmの第12, 17, 22号ピットの 3 基が相当し, 20.0%を占める。B群は, 開口部径100~150cm, 壙底部径85~102cm, 深さ20~33cmの第 9, 15, 16, 19, 28, 35号ピットの 6 基が相当し, 40%を占めている。C群は, 開口部径158~190cm, 壙底部径123~156cm, 深さ 8~40cmの第13, 20, 21, 34号ピットの 4 基が含まれ, 26.6%を占める。A~C群から遊離したピットをD群とすると, 第 2, 10号ピットが該当し, データーは第36図に示したとおりで, 13.3%を占める。

開口部の長軸径と短軸径を対比するため, 短軸径を 1 として類別すると, 次のようになる。

1対1は第 2, 10, 15号の 3 例 (20.0%), 1対1.5は第12, 13, 16, 17, 19, 28, 35号の 7 例 (46.6%), 1対2は第 9, 20, 21, 22, 34号の 5 例 (33.3%) である。

長軸方向については, 第37図にまとめて示した。約160度の偏差度に分かれるが, 第13, 17, 28, 35号ピットの 4 基はほぼ同じ方向 - 北東 - 南西 - を示している。また, 第 9, 19, 20, 21, 22号ピットの 5 基もまた, ほぼ同方向を示している。これらの同じような長軸方向をもつピットのうち, 前者をA群, 後者をB群とすると, A群には, 単独で検出されたピットが多く, B群は, 複数 (集団) を構成したピットで占められている。また, 北から西へ寄った方向に長軸をもつピットは 5 例 (33.3%), 北から東寄りに傾くピットが10例 (66.6%) を占めているが, 長軸の方向性から用途を推定することは難しいところである。

用途や年代推定の手掛りとなるような遺物の出土例としては, 自然礫が遺構確認面又は上位

面に認められたもの 2 例（第 9，15号），覆土中に縄文土器片が認められたピット 2 例（第19，20号），覆土中に炭化物層，墳底面が焼土化したもの 1 例（第28号），降下火山灰（十和田 a）が残留していたピット 1 例（第13号）の計 6 例（40.0%）である。残りの 9 例は，降下火山灰を含む堆積土が不明瞭であったり，遺物が出土しなかったピットである。

用途については，第28号ピットは，ピット内でクルミを含む可燃焼物を燃やして埋めた穴とも考えられる。ピット上位面に自然礫を伴う 2 基と同じような方向にピットの長軸が配列された 4 基（第19，20，21，22号）は，土壌墓の可能性を含むピットである。ちなみに，青森市三内丸山（ ）遺跡（県埋文33集：1977）出土の土壌墓群（56基）- 縄文中期末葉 - のうち，規模の最多例は，口径130～170cm，底径30～80cm，次いで口径180～230cm，底径50～100cm，口径100～130cm，底径40～70cmとなっている。

縄文土器を伴った遺構は，第19号と第20号である。これらの土器は，小破片であり，流入の可能性もないとは断定できないが，土器片自体は，縄文中期末葉から後期初頭の特徴が見受けられる。このことから，これら第19～22号跡については，この時期を前後する頃のものと考えてよからう。

検出遺構についてまとめると，溝状ピットの用途は，一種のおとし穴と推定できることは可能であるが，それを実証できる明確なデータを得るところまで至らなかった。年代決定の手掛りとしては，中坵浮石層があるが，この浮石の降下年代については，考古学的に実証するため今後更にデータを集成し，検討することが必要であろう。

円形・フラスコ状ピットとした遺構のうち，フラスコ状ピットは，植物性食料品等の貯蔵穴であった可能性が濃厚であるが，結果的には確証は得られなかった。また，3 基の円形ピットについても，フラスコ状ピットの可能性は形態上からすて切れないが，反面最近，県内各地で出土例が増加している「おとし穴状遺構」と同じであるとするだけの確証も得られなかった。これらの遺構は，周辺から出土した遺物によって縄文後期前後から晩期と推定されるが，その時期を決定付けるものは確認されなかった。今後は，これらの遺構と溝状ピットの関係，時期，用途，系晋など，出土例の増加をまって更に検討を進めたい。

小土壌については，土壌墓状の形状を示したものが 2，3 認められたが，土壌墓と決定し得るデータが欠けており，これらの用途についても推測の域を出なかった。時期的には，遺構内及び遺構周辺出土の縄文土器の年代 - 縄文後期初頭（十腰内 式）～晩期（大洞 C 式） - と推定できるが，年代の決定は常に困難である。

（北林）

#### 4 出土遺物

##### (1) 早期の土器(第 層出土土器について)

第 層から出土した土器は、胎土、文様構成等からみて、日計式押型文土器に伴出する縄文施文土器に酷似し、日計式土器群<sup>(注1)</sup>に属するものと考えられる。出土層位もこれに矛盾して<sup>(注2)</sup>いない。ただし、この土器の場合、縄文、沈線等の施文原体については、日計式押型文土器に伴う他の縄文施文土器に比べて、やや特異なものがある。また、鴨平(1)遺跡<sup>(注3)</sup>では、押型文土器は出土していない。

日計式土器群に属する縄文施文土器の出土した遺跡で、押型文土器の出土していない遺跡としては、ほかに、青森県田ノ上遺跡<sup>(注4)</sup>、同和野前山遺跡<sup>(注5)</sup>、宮城県座散乱木遺跡<sup>(注6)</sup>がある。このうち、和野前山、座散乱木遺跡の資料中には、鴨平(1)遺跡の資料に類似した縄文原体を持つものがある<sup>(注7)</sup>。一万、青森、岩手、宮城県では、日計式押型文土器に伴って一般的な縄文施文土器も出土している。このことは、日計式土器群が編年的に細分された場合、押型文を伴わない縄文施文土器のみの時期が存在することを推定させるものである。

日計式土器群から沈線・貝殻文系土器群への移行過程については、岩手県風林遺跡<sup>(注8)</sup>、同県大新遺跡<sup>(注9)</sup>、宮城県松田遺跡<sup>(注10)</sup>等に良好な資料がある。これを簡単に述べると、縄文の衰退及び文様モチーフの沈線化に特徴付けられており、この変遷過程に鴨平(1)遺跡の第 層出土土器を位置付けることは、極めて難しい。したがって、第 層出土土器及び押型文土器を伴わない縄文施文土器については、日計式土器群の中で、最も古い位置付けを与えられる可能性が強いと言える<sup>(注11)</sup>。(工藤 大)

#### 注

1. 日計式押型文及びこれに関係する縄文、無文土器の総称とする。
2. 土器出土地点付近では、第 層(南部浮石層)が約30~40cmの厚さで堆積していた。南部浮石の降下時期については、<sup>14</sup>C法により、8,600±250年 B.P.(大池昭二・高橋一 1970「南部浮石の<sup>14</sup>C年代」地球科学24-6)の数値が出ている。また、八戸火山灰層(八戸浮石流)については、12,700±260年 B.P.(大池昭二 1964「八戸浮石層の絶対年代」地球科学70)の数字がある。
3. 日計式押型文土器に伴出する縄文施文土器の縄文原体は、一般的に節の明瞭な圧痕を残すものとほとんどである。沈線についても、断面に稜のない丸みをもったものが多い。
4. 青森県教育委員会 1981「国営八戸平原開拓事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」
5. 1981年度、青森県埋蔵文化財調査センター発掘資料。未報告。
6. 石器文化談話会 1978「座散乱木遺跡発掘調査報告書」。
7. 沈線は異なる。

8. 武田良夫 1982「岩手県における押型文土器文化の様相」赤い本創刊号。
9. 武田良夫・吉田義昭 1970「盛岡市大新遺跡」奥羽史談第54号 及び、1982年度、盛岡市教育委員会発掘資料。未報告。
10. 宮城県教育委員会 1982「仙南・仙塩・広域水道関係遺跡調査報告書」。
11. 座散乱木、鴨平(1)遺跡出土資料の位置付けについては、既に、柏原淳一氏の指摘がある。  
柏原淳一 1982「日計式土器群の成立と解体」赤い本創刊号。

## (2) 後・晩期の土器

章3節で既に記したように、縄文後・晩期の土器は、およその器形を判断できるものが4点、その他の土器は一部接合できたが殆んど細片であった。したがって、それらについては、土器の観察表にまとめるだけにとどめた。時期については、精製土器は位置付けられたが、特徴の少ない縄文粗製土器については判断できないものがあつた。若干の精製土器に、縄文後期の十腰内～式や晩期の大洞B-C～C<sub>1</sub>式の特徴が認められた。おそらく粗製縄文土器についても、これらの時期に位置付けても大過はないものとする。なお、これらの土器は、第～層から出土したものである。

## (3) 出土土器のまとめ

第層出土の土器は、胎土、文様構成等を観察したところ、日計式押型文土器に伴う縄文施文土器に極めて類似していると判断された。したがって、この土器は日計式土器群に属するものと考えられる。

第層出土の土器は、ムシリ式に比定される。早期の土器としてそのほか早稲田第5類に比定できるものである。したがって、早期の土器は、日計式土器群に属する類、ムシリ式、早稲田第5類の3類に分けられる。

縄文前期の土器は1片だけであるが、前期初頭に位置づけられる早稲田第6類に類似している。

数量的に多い後期の土器は、十腰内式に比定できるものであるが、十腰内式の土器も若干混在していた。晩期の土器は、前半の大洞B-C式、同C<sub>1</sub>式が認められた。

本遺跡においては、上記の時期の土器が出土したが、おそらくこれらの時期が本遺跡の営まれた年代であろう。

(北林)

## (4) 石器

石盤の大部分は第～層から出土しているが、ほぼ縄文後・晩期の所産とみられる。ただし、石鏃が過半数を占める偏った器種構成を示し、形態的な変化の大きさからみても各々の所属時期については、かなりの幅を想定する必要がある。

黒曜岩の剥片のうち1点は、第層上面からの出土であるが、この付近では、第層(南部



浮石層)が非常に薄くなっている。また、第 層の土器出土地点とはやや距離があるので、相互の関係を論ずることはできない。

(工藤 大)

## 引用参考文献

- 青森県教育委員会 1978 『青森県遺跡地図』。
- 〃 1978 『青森県遺跡地名表』。
- 青森県埋蔵文化財 1982 『埋文あおもり』 1。  
調査センター
- 青山礼志 1972 『貨幣手帳』 頌文社。
- 秋田県教育委員会 1979 『館下 遺跡発掘調査報告書』。
- 安孫子 昭 二 1978 「縄文土器の型式と編年」 『日本考古学を学ぶ』 1。
- 岩手県教育委員会 1979 「稻荷遺跡」「一本松遺跡」 『岩手県教委報告書』 第32集。
- 〃 1979 「古館駅前遺跡」「古館橋遺跡」「前九年 遺跡」「前九年 遺跡」  
『岩手県教委報告書』 第35集。
- 〃 1979 「東北新幹線関係」「東北縦貫道関係」 『岩手県文化財調査報告  
書』 第31集，第35集。
- 岩手県埋蔵文化財 1978 「長瀬 B 遺跡」「藤沢 遺跡」 『岩手県埋文報告書』，第 1 集。  
センター 1978 「都南村湯沢遺跡」 『岩手県埋文報告書』，第 2 集。
- 〃 1981 「安代町荒屋( )遺跡」 『岩手県埋文報告書』，第21集。
- 石本省三・長谷部一弘 1975 「函館空港第 4 地点遺跡」 『北海道考古学』 11。  
藤田 登
- 伊 東 信 雄 1977 「山内博士東北縄文土器編年の成立過程」 『考古学研究』 24 - 3，4。
- 今 井 康 博 について - 』 『調査研究集録』 第 1 冊，港北ニュータウン埋蔵文化  
財調査団。
- 井 上 晃 夫 1976 「縄文土器の製作」 『考古学ノート』 6，武蔵野文化協会考古学部会。
- 今 井 富士雄 1968 「十腰内遺跡」 『岩木山 - 岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書』  
磯 崎 正 彦 岩木山刊行会。
- 今 村 啓 爾 1976 「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較」 『物質文化』 27。
- 内 山 真 澄 1977 「札幌市 S - 267，268 遺跡」 『札幌市文化財調査報告書』
- 江 坂 輝 弥 1969 「縄文文化の発現」 『世界考古学大系日本』 1。
- 〃 1975 「縄文式土器」 『日本の美術』。
- 〃 1982 『縄文土器文化研究序説』 六興出版。
- 岡 本 勇 1974 「狩猟社会の発展と縄文時代」 『図説，日本の歴史』 1，集英社。
- 音喜多 富 寿 1959 「埋蔵文化財からみた八戸周辺の成立」 『東奥文化』 14。
- 〃 1960 『青森県八戸周辺に於ける遺跡，遺物地名表』 八戸市文化財シリー

ズ 1。

- 音喜田 富 寿 1961 『石器時代のはちのへ～主として縄文土器とその周辺～』。
- 小葉田 淳 1966 『日本の貨幣』日本歴史新書，至文堂。
- 小 山 正 忠 1973 『新版標準土色帖』。
- 河野広道・藤本英夫 1961 「御殿山墳墓群について」『考古学雑誌』46 - 4。
- 金 子 浩 昌 1965 「6 貝塚と食料資料」『日本の考古学』，縄文時代，河出書房新社。
- 北上市教育委員会 1978 『八天遺跡』。
- 霧ヶ丘遺跡調査団 1973 『霧ヶ丘』武蔵野美術大学考古学研究会。
- 今村 啓 爾
- 草 間 俊 一 1971 『貝鳥貝塚』岩手県花泉町教育委員会。
- 草間・鈴鹿良一 1974 『崎山弁天遺跡』岩手県花泉町大槌町教育委員会。
- 工 藤 正 1961 『猿賀出土古銭について』。
- 〃 1968 『平賀町館山出土古銭』平賀町教育委員会。
- 栗 村 知 弘 1960 『埋れた八戸 - 縄文文化時代から古墳文化時代まで - 』『概説八戸の歴史』。
- 小 林 達 雄 1972 「縄文土器」『日本原始美術大系』1。
- 〃 1977 「縄文土器」『日本原始美術大系』1。
- 斉藤 忠・上野佳也 1974 「縄文時代編年表」『日本考古学の視点』(上)付録。
- 埼玉県教育委員会 1973 『坂東山』埼玉県遺跡発掘調査報告書第 2 集。
- 札幌市教育委員会 1975 「S - 239遺跡」『札幌市文化財調査報告書』。
- 上野秀一・加藤邦雄
- 〃 1976 「S - 153遺跡」『札幌市文化財調査報告書』。
- 札幌市教育委員会 1977 『札幌市文化財調査報告書』。
- 〃 1978 『札幌市文化財調査報告書』。
- 市立函館博物館編 1977 『函館空港第 4 地点・中野遺跡』函館市教育委員会。
- 〃 1970 「函館市志海苔町出土古銭目録」『銭亀古銭と新資料展』。
- 須 藤 隆 1973 「土器組成論」『考古学研究』19 - 4。
- 瀬 川 司 男 1981 「陥し穴状遺構について」『(岩手県埋蔵文化財センター)紀要』。
- 芹 沢 長 介 1956 「縄文文化」『日本考古学講座』3。
- 田 中 富 吉 1965 『日本の喫煙具』日本専売公社，事業レポートNo.21。
- 〃 1978 『たばこと塩の博物館展示品図録』日本専売公社。
- 高 橋 潤 1976 「鐸形土製品についての一考」『うとう』82，青森郷土会。
- 千 代 肇 編 1974 『西桔梗』函館圏開発事業団。

- 坪井清足 1978 「武器・装身具」『日本原始美術大系』5, 講談社。
- 苫小牧市教育委員会 1977 『苫小牧東部工業地帯埋蔵文化財発掘調査概要報告書 - 昭和51年度版 - 』
- 永瀬福男 1981 「秋田県内におけるフラスコ状ピットについて」『秋田地方史論』半田教授退官記念会編。
- 名久井文明 1976 「北日本における石器時代の溝状ピットについて」『岩手県高等学校年報社会科研究』18。
- 浪岡町教育委員会 1980 『浪岡城跡』。
- 工藤清泰 1965 『古代人の生活と環境』校倉書房。
- 直良信夫 1968 『狩獵』法政大学出版局。
- 奈良仁 1972 「脇野沢村小沢出土古銭の研究」『うそり』9。
- 日本鉱業株式会社 1979 『大畑台遺跡発掘調査報告書』(秋田県)。
- 船川製油所
- 日本考古学協会 1964 『日本考古学辞典』。
- 藤田亮策 1979 『日本風俗史事典』弘文堂。
- 日本風俗史学会編
- 新村出編 1980 『広辞苑(第二版補訂版)』岩波書店。
- 函館市教育委員会 1967 『函館空港整備事業の内遺跡発掘調査実績報告 函館空港第 遺跡』。
- 〃 1977 「函館空港第4地点・中野遺跡」。
- 八戸市教育委員会 1980 『長七谷地貝塚発掘調査報告書』八戸市埋文報告書第3集。
- 〃 1980 『史跡根城跡発掘調査報告書』, 八戸市埋文報告書第2集。
- 〃 1982 『長七谷地遺跡発掘調査報告書 - 2, 7, 8号遺跡(昭和55, 56年度)』八戸市埋文報告書第8集。
- 林謙作 1965 「東北 - 縄文文化の発展と地域性 - 」『日本の考古学』。
- 福田友之 1981 「溝状ピット研究に関する覚書」『弘前大学考古学研究』1。
- 藤森栄一 1966 『古道』学生社。
- 保坂三郎 1972 『是川遺跡出土遺物報告書』。
- 蛭沢遺跡調査団 1979 『蛭沢遺跡』(青森市)。
- 北海道教育委員会 1977 『美沢川流域の遺跡群』。
- 〃 1978 『美沢川流域の遺跡群』。
- 〃 1979 『美沢川流域の遺跡群』。

鴨平 1 遺跡 1983

- 堀 越 正 行 1975 「小竪穴考(1)」『史館』第5号ほか。
- 黨 弘道・井上光貞 1980 「原始 - 飛鳥・奈良(-783)」『年表 日本歴史』1。
- 宮坂英弐・宮坂虎次 1966 「城之平竪穴群遺構遺跡」『蓼科』別編『尖石考古館研究報告叢書』第2冊，尖石考古学博物館研究室。
- 宮 沢 寛 1976 「縄文時代早期後半における土壌をめぐる諸問題 - いわゆる落とし穴について - 」『調査研究録』第1冊，港北ニュータウン埋蔵文化財調査団。
- 山 内 清 男 1964 「縄文式土器」『日本原始美術』1。
- 裕 光 1961 「市浦村十三出土古銭調査」『東奥文化』21。
- 渡 辺 誠 1974 「食料資源」『考古学ジャーナル』100号 ニュー・サイエンス社。



## 青森県教育委員会埋蔵文化財関係刊行物一覧表(1)

刊年	行月	集	報告書名	遺跡名・備考
37	2		青森県遺跡地名表(1)	
38	3		青森県遺跡地名表(2)	
39	3		青森県遺跡地名表(3)	
37	3		青森県二ツ森貝塚発掘調査概要	
48	3	1	むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財分布調査報告書	
47	4	2	青函トンネル資材運搬専用道路建設予定地内緊急遺跡分布調査概報	
48	3	3	むつ小川原開発予定地内埋蔵文化財試掘調査概報	表館(1)、発茶沢(1)、原原種農場(1)→弥栄平(1)に変更
48	3	4	昭和47年度東北縦貫自動車道埋蔵文化財分布試掘調査報告書	鳥海山、富山、永泉寺、浅瀬石、牡丹平南
48	3	5	国道 280号線道路改良工事(今別バイパス)関係埋蔵文化財試掘調査報告書	五郎兵衛、西田、浜名A、浜名
47	3	6	東北新幹線関係遺跡分布調査報告書(津軽半島)	(遺跡名省略)
48	3	7	中平遺跡発掘調査報告書	(青函トンネル関係)
49	2	8	昭和48年度東北縦貫自動車道埋蔵文化財分布試掘調査報告書	砂沢平、大平、高館、松元、杉の沢、源常平、羽黒平、熊沢
49	3	9	むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報	弥栄平(3)、発茶沢(2)、富ノ沢(1)
49	3	10	むつ小川原開発に伴う新住区予定地内埋蔵文化財分布試掘調査報告書	千歳(2)、千歳(7)、千歳(13)
49	3	11	小栗山地区遺跡発掘調査報告書	沢部Ⅰ、天王沢、沢部Ⅱ(弘前南部地区農道予定地区内)
49	3	12	近野遺跡(1)発掘調査報告書	(県営運動公園建設関係)
49	3	13	今別町浜名遺跡、中宇田遺跡、西田遺跡、五郎兵衛山遺跡、五所川原市原子溜池遺跡群発掘調査報告書	(今別B、P関係)
49	3	14	亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書	
49	3	15	富山遺跡、永泉寺遺跡調査略報	(東北縦貫自動車道関係)
49	3	16	三厩村中の平遺跡発掘調査略報	(青函トンネル関係)
49	12	17	建設省五戸バイパス関係発掘調査概報	(五戸町中沢西張遺跡)
49	12	18	むつ小川原開発に伴う新住区予定地内千歳遺跡(13)発掘調査略報	
50	1	19	東北縦貫自動車道関係遺跡分布試掘報告書	程森、古館、大面、永野、鳥海山
49	12	20	中里町大沢内溜池遺跡発掘調査報告書	
50	1	21	富山遺跡、永泉寺跡発掘調査報告書	(東北縦貫自動車道・県営ほ場整備関係埋蔵文化財発掘調査)
50	3	22	近野遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)	(県営運動公園関係)
50	2	23	土井3号遺跡発掘調査報告書	(幡竜橋架替工事による発掘調査)
50	3	24	むつ小川原開発地域内関係埋蔵文化財試掘調査概報	睦栄(1)、発茶沢(3)、大石平、富の沢(2)
50	2	25	中の平遺跡発掘調査報告書	(青函トンネル専用道路関係)

## 青森県教育委員会埋蔵文化財関係刊行物一覧表(2)

刊年	行月	集	報告書名	遺跡名・備考
51	3	26	黒石市牡丹平南遺跡、浅瀬石遺跡	(東北縦貫自動車道関係)
51	3	27	千歳遺跡(13)発掘調査報告書	(むつ小川原・新住区関係)
51	3	28	むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報	弥栄平(2)、弥栄平(4)、新納屋(1)
51	3	29	五戸町中沢西張遺跡、古街道長根遺跡	(一般国道4号五戸バイパス)
51	3	30	白山堂遺跡、妻の神遺跡発掘調査報告書	
51	3	31	泉山遺跡発掘調査報告書	(一般県道櫛引、上名久井、三戸線道路)
52	3	32	鳥海山遺跡発掘調査報告書	(東北縦貫自動車道関係) 弥生
52	3	33	近野遺跡発掘調査報告書(Ⅲ)・三内丸山(Ⅱ)遺跡発掘調査報告書	(県営運動公園建設関係)
52	3	34	水木沢遺跡発掘調査報告書	(一般国道279号線道路改良)
52	3	35	石上神社遺跡発掘調査報告書	(ほ場整備関係)
52	3	36	むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報	幸畑1)、幸畑4)、幸畑6)
53	3	37	青森市三内遺跡	(東北縦貫自動車道関係)
53	3	38	熊沢遺跡	( )
53	3	39	源常平遺跡発掘調査報告書	( )
53	3	40	高館遺跡発掘調査報告書	( )
53	3	41	三内沢部遺跡発掘調査報告書	( )
53	3	42	むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報	表館(1)、105号、弥栄平、室ノ久保(3)、鷹架沼竪穴、新納屋(2)、幸畑(3)、睦栄(8)、(10)
53	3	43	下北地点原子力発電所建設予定地内埋蔵文化財分布調査報告書	(遺跡名は第71集参照)
54	3	44	羽黒平遺跡	(東北縦貫自動車道関係)
54	3	45	杉の沢遺跡	( )
54	3	46	松元遺跡	( )
54	3	47	近野遺跡(Ⅳ)	(運動公園関係)
54	3	48	むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報	
54	3	49	細越遺跡	(ほ場整備関係)
54	3	50	むつ小川原開発予定地域内埋蔵文化財試掘調査概報	
54	3	51	桔梗野工業団地造成に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書	八戸市長七谷地1～8号遺跡
55	3	52	大平遺跡	(東北縦貫自動車道関係)
55	3	53	砂沢平遺跡	( )
55	3	54	碓ヶ関村古館遺跡	( )

## 青森県教育委員会埋蔵文化財関係刊行物一覧表(3)

刊年	行月	集	報 告 書 名	遺 跡 名 ・ 備 考
55	3	55	大面遺跡	(東北縦貫自動車道関係)
55	3	56	永野遺跡	(            ♪            )
55	3	57	長七谷地遺跡	(桔梗野工業団地関係)
55	3	58	神明町遺跡	
55	3	59	板留(2)遺跡	
55	3	60	五輪堂遺跡	
56	3	61	表館遺跡	(むつ小川原関係)
56	3	62	新納屋遺跡(2)	(            ♪            )
56	3	63	鷹架遺跡	(八戸平原関係)
56	3	64	外長根1)、前平(2)遺跡	(むつ小川原関係)
56	3	65	志民(2)、田ノ上遺跡	(八戸平原関係)
57	3	66	野辺地町明前遺跡	(東北電力、送電線)
57	3	67	発茶沢遺跡	(むつ小川原関係)
57	3	68	山崎遺跡	(今別町バイパス関係)
57	3	69	右エ門次郎窪、三合山、石ノ窪遺跡	(東北縦貫自動車道八戸線関係Ⅰ)
57	3	70	馬場瀬遺跡1)、(2)	(            ♪            Ⅱ )
57	3	71	下北地点原子力発電所建設予定地内試掘調査	銅谷(1)、(2)、(3)、前坂下(1)~(13)、南通、見知川山、浜通、アイヌ野の20遺跡)
58	3	72	鴨平(1)遺跡	(東北縦貫自動車道八戸線関係Ⅲ)
58	3	73	鴨平(2)遺跡	(            ♪            ♪            Ⅳ )
58	3	74	長者森遺跡	(            ♪            ♪            Ⅴ )
58	3	75	銅屋(1)、南通、前坂下(13)遺跡	(下北原発関係)
58	3	76	鶉窪遺跡	(八戸環状線関係)
58	3	77	松原、陣場川原、槻ノ木遺跡	(一般農道)
59	3		葎窪遺跡	(東北縦貫自動車道八戸線関係Ⅵ)
59	3		牛ヶ沢(3)・昼巻沢遺跡	(            ♪            ♪            Ⅶ )
59	3		白山平(2)遺跡	(            ♪            ♪            Ⅷ )
59	3		弥栄平(2)遺跡	(むつ小川原関係)
59	3		一の渡遺跡	(浅瀬石川ダム関係)
59	3		浜通遺跡	(下北原発関係)

(県立郷土館関係) (1)

刊行年	月	題 名 (書名)	著 者 名	所 収 書 名	巻 号
昭和48年 (1973)	6	下田代納屋 B 遺跡の発掘	三 宅 徹 也	青森県立郷土館だより	8 (単)
	9	風韻堂コレクション目録	青森県立郷土館	青森県立郷土館	
昭和49年 (1974)	8	下田代納屋 B 遺跡の発掘調査	三 宅 徹 也	青森県立郷土館だより	11
昭和50年 (1975)	1	下田代納屋 B 遺跡第 1 次発掘調査概要	井上・天間・三宅	青森県立郷土館報	1
	11	蟹田町大平山元遺跡試掘調査概要	三 宅 徹 也	青森県立郷土館だより	16
昭和51年 (1976)	2	下田代納屋 B 遺跡第 2 次発掘調査概要	井上・天間・三宅	青森県立郷土館調査研究年報	1
	2	西津軽郡深浦町吾妻野 II 遺跡の出土土器について	三 宅 徹 也	〃	1
	3	小田野沢一下田代納屋 B 遺跡発掘調査報告書一	井 上・天 間 三 宅・新 戸 部	青森県立郷土館調査報告(考古)	1
	3	縄文式土器のうつりかわり	井上・天間・三宅	青森県立郷土館	(単)
	12	宇鉄遺跡第 2 地点発掘調査概要	天間・井上・三宅	青森県立郷土館調査研究年報	2
12	大平山元 I 遺跡調査概要	三宅・井上・天間	〃	2	
昭和52年 (1977)	8	七戸町で土偶発見	天 間 勝 也	青森県立郷土館だより	8 2
	11	宇鉄 II 遺跡発掘調査概要	〃	〃	8 3
昭和53年 (1978)	2	大平山元 II 遺跡第 1 次発掘調査の概要	三 宅 徹 也	〃	8 4
	3	宇鉄 II 遺跡発掘調査概要	天 間 勝 也	青森県立郷土館調査研究年報	3
	3	尻八館第 1 次調査概要	岩 本 義 雄	〃	3
	3	円筒土器の概念とその崩壊	三 宅 徹 也	〃	3
	5	よみがえった縄文時代の女性	岩 本 義 雄	青森県立郷土館だより	9 1
	5	青森県における文字の初見一県内出土の墨書土器一	鈴 木 克 彦	〃	9 1
	8	縄文琴について一日本最古の琴一	〃	〃	9 2
11	下北郡脇野沢村出土の多頭石斧について	岩 本 義 雄	〃	9 3	
昭和54年 (1979)	2	円筒土器雑感	三 宅 徹 也	青森県立郷土館だより	9 4
	3	大平山元 I 遺跡発掘調査報告書	三宅・岩本・山口	青森県立郷土館調査報告(考古)	5
	3	宇鉄 II 遺跡発掘調査報告書	天 間・岩 本 三 宅・松 山	〃	6
					4
	3	蟹田町大平山元 II 遺跡発掘調査概報	岩 本・天 間 三 宅・鈴 木	青森県立郷土館調査研究年報	4
	3	尻八館第 2 次調査概要	岩 本 義 雄	〃	4
	3	「県重要指定の亀ヶ岡遺跡出土遺物」について	鈴 木 克 彦	〃	4
	5	縄文時代の土製仮面(土面)について	〃	青森県立郷土館だより	10 1
	8	青竜刀型石器について	〃	〃	10 2
12	弥生時代の土器	〃	〃	10 3	

## (県立郷土館関係) (2)

刊行年	月	題 名 (書名)	著 者 名	所 収 書 名	巻 号
昭和55年 (1980)	3	よりがえる奈良・平安時代の青森一特別展・展示解説図録一	鈴木 克彦	青森県立郷土館	(単)
	3	尻八館第3次調査概要	岩本 義雄 大橋 康二	青森県立郷土館調査研究年報	5
	3	岩版・土版の研究序説	鈴木 克彦	〃	5
	3	大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書	三宅 松山 山口 横山	青森県立郷土館調査報告(考古)	8
	6	青森県の風土と歴史(1)―亀ヶ岡・是川・田舎館	荒井 清明	県政のあゆみ	29 6
	7	青森県の風土と歴史(2)―みちのくとえみし―	〃	〃	29 7
	12	われわれの祖先はどのように生きたか	山道 天間 成 田 坂 本	教育こうほう(青森県)	31 9
昭和56年 (1981)	3	亀ヶ岡遺跡の調査1)	市川・鈴木・木村	青森県立郷土館調査研究年報	6
	3	土偶の研究序説	鈴木 克彦	〃	6
	3	尻八館調査報告書	三上・岩本・大橋 倉谷・鳴海・桜井 窪田	青森県立郷土館調査報告(歴史)	9
	3	大平山元Ⅲ遺跡発掘調査報告書	松山・山口・三宅	〃 (考古)	11





# 写 真 图 版





A 地区遠影 S▷



A 地区 S▷

図版 1 鴨平(1)遺跡近影





A地区 E▷



A地区 E▷W

図版 2 鴨平(1)遺跡A地区の調査





B、C地区 SE▷



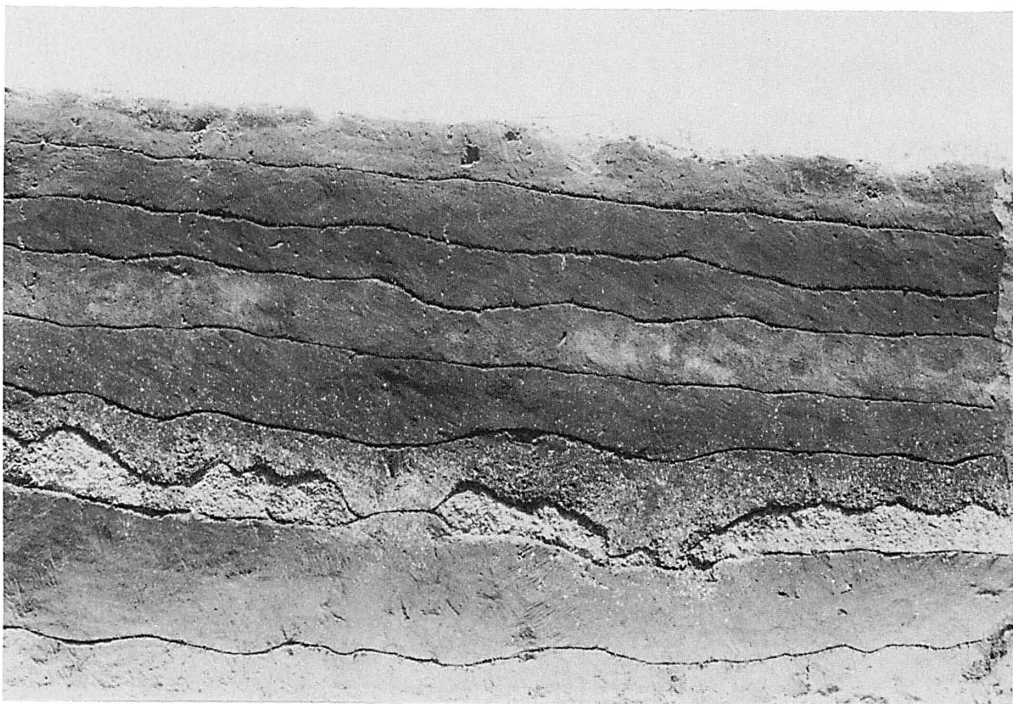
C地区 NW▷ (東側)

図版3 鴨平(1)遺跡B、C地区の調査





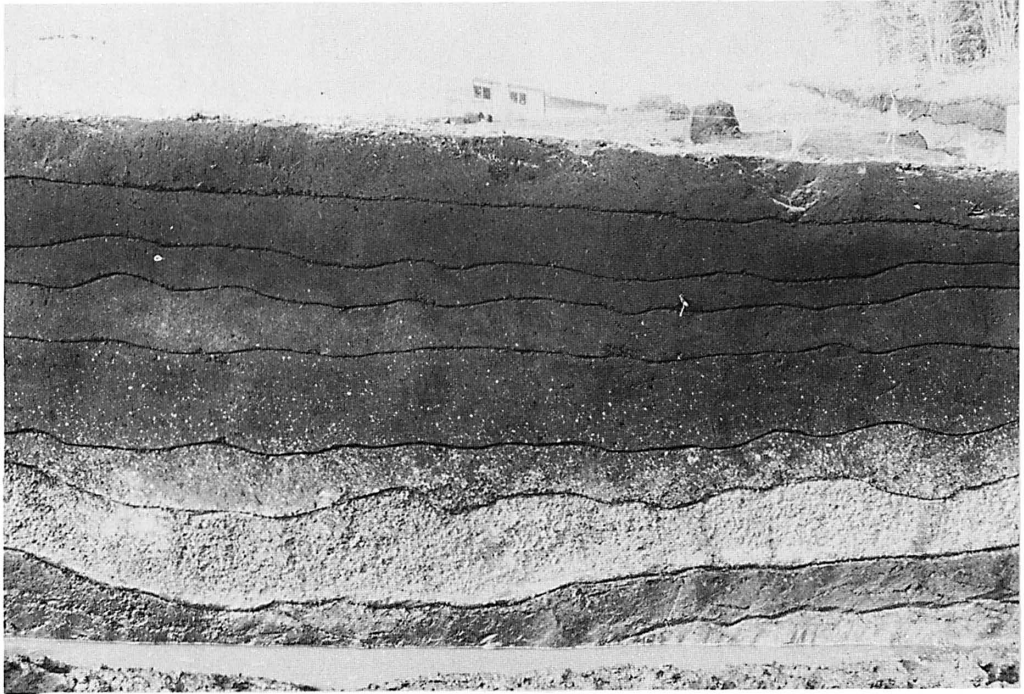
C地区 NE▷(西側)



A地区基本土層 14ライン(E-W)N-14~O-14 S▷

図版 4 鴨平(1)遺跡A、C地区の基本土層





A地区基本土層 14ライン(東西)O-14~R-14 S▷



B、C地区基本土層 41ライン(東西)H-41付近 S▷

図版5 鴨平(1)遺跡基本土層

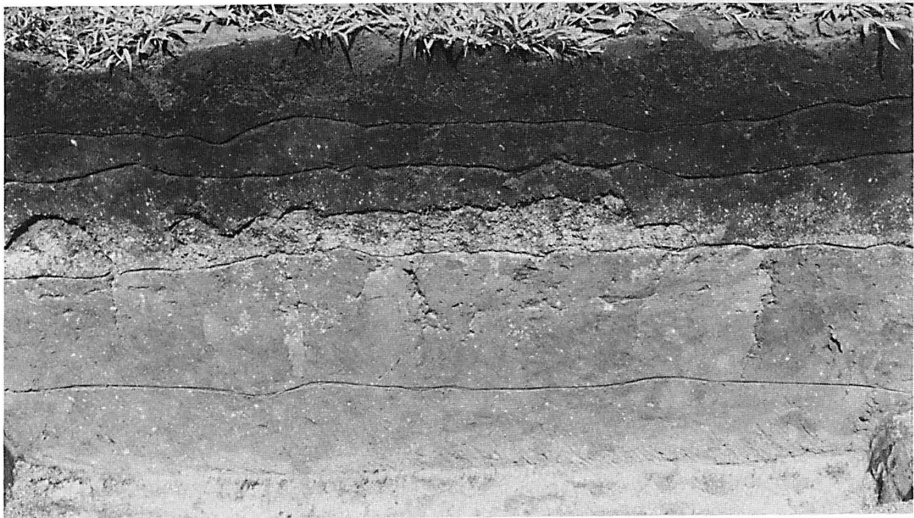




B、C地区41ライン(東西) I-41~J-41付近 S▷



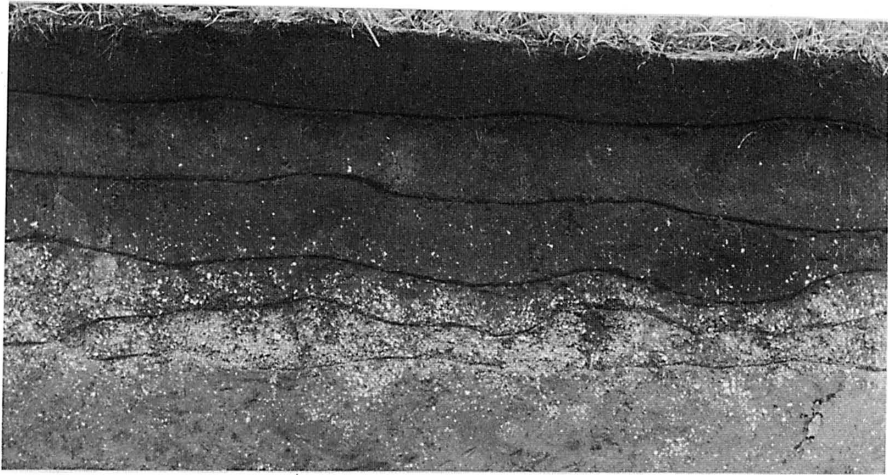
B、C地区41ライン(東西) N-41~O-41付近 S▷



C地区Mライン(南北) M-47付近 E▷

図版6 鴨平(1)遺跡基本土層





C地区Mライン(南北)M-56、57付近 E▷



C地区Mライン(南北)M-66、67付近 E▷



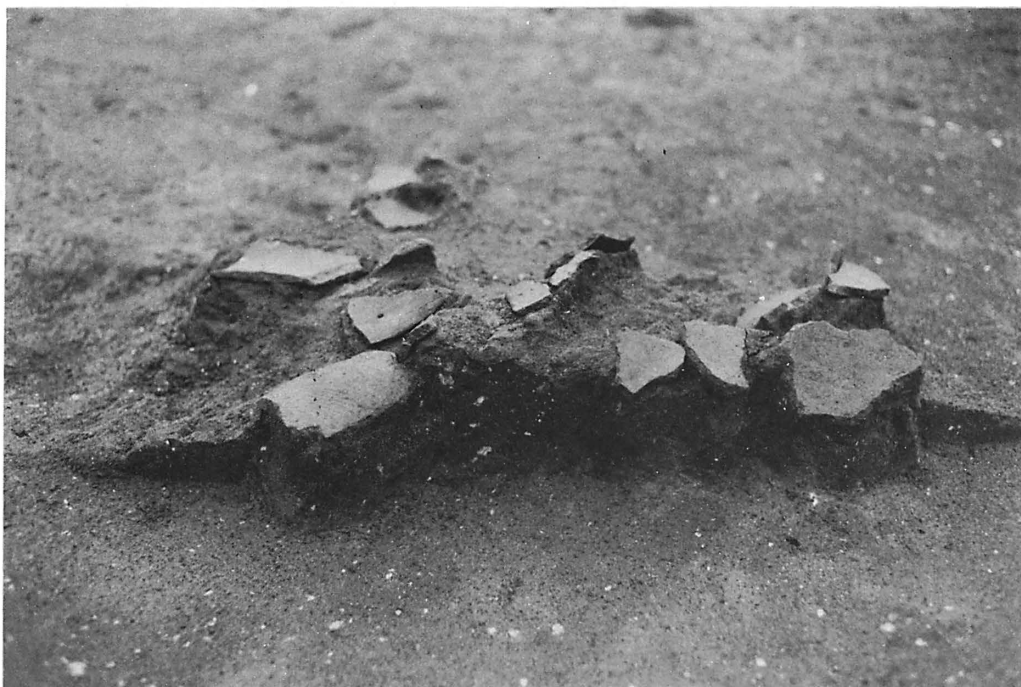
C地区南端中掬浮石(白い部分)堆積状況 W▷

図版7 鴨平(1)遺跡基本土層堆積状況





A地区第Ⅶ層の縄文土器出土状況



A地区P-15第Ⅶ層の縄文土器出土状況

図版 8 鴨平(1)遺跡遺物出土状況





A地区第Ⅶ層の縄文土器出土状況 N▷



A地区 同上

図版9 鴨平(1)遺跡遺物出土状況

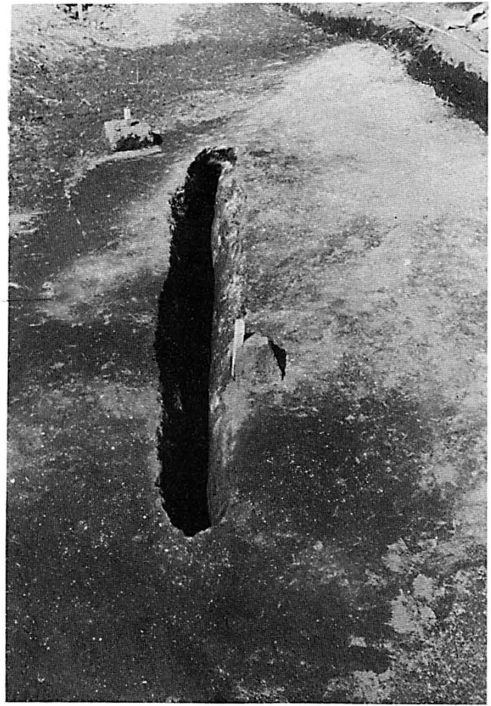




第 1 号遺構確認状況 SW▷



第 1 号遺構土層断面 S▷



第 1 号遺構完掘 S▷

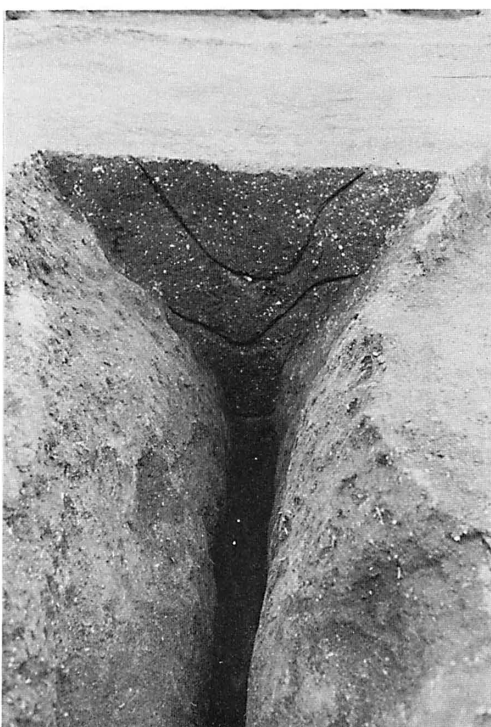
図版10 溝状ピット(1)



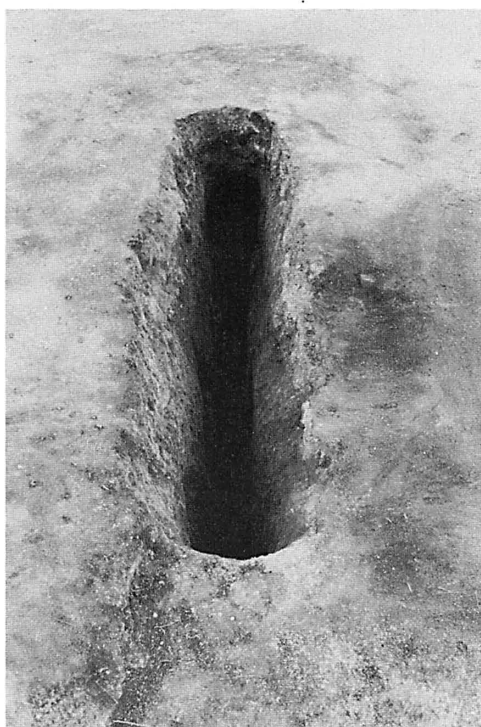
第3号遺構確認・土層断面 N▷



第3号遺構完掘 S▷



第6号遺構土層断面 S▷



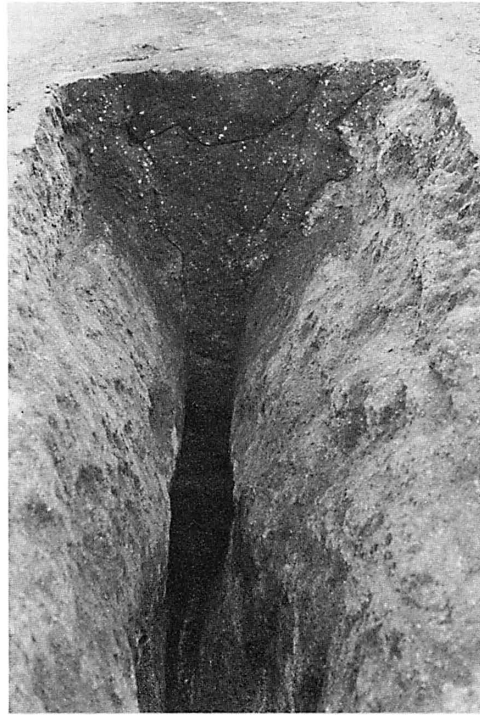
第6号遺構完掘 S▷

図版11 溝状ピット(2)





第7号遺構確認状況 S▷



第7号遺構土層断面 S▷



第7号遺構完掘 S▷

図版12 溝状ピット(3)





第 8 号遺構土層断面 E▷



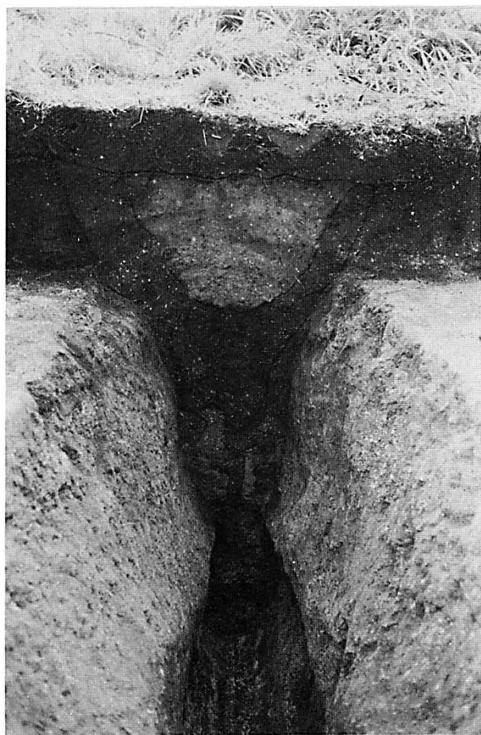
第 8 号遺構完掘 W▷



第 23 号遺構確認状況 N▷

図版 13 溝状ピット(4)





第23号遺構土層断面 N▷



第23号遺構完掘 S▷



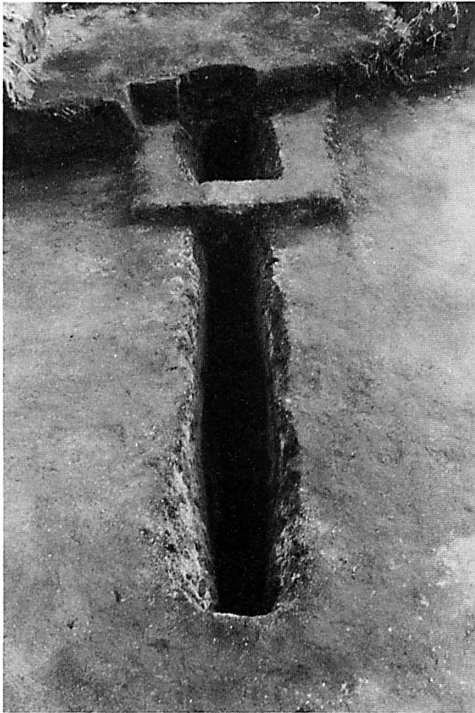
第23号遺構深掘土層断面 N▷



第24号遺構深掘土層断面 N▷

図版14 溝状ピット(5)

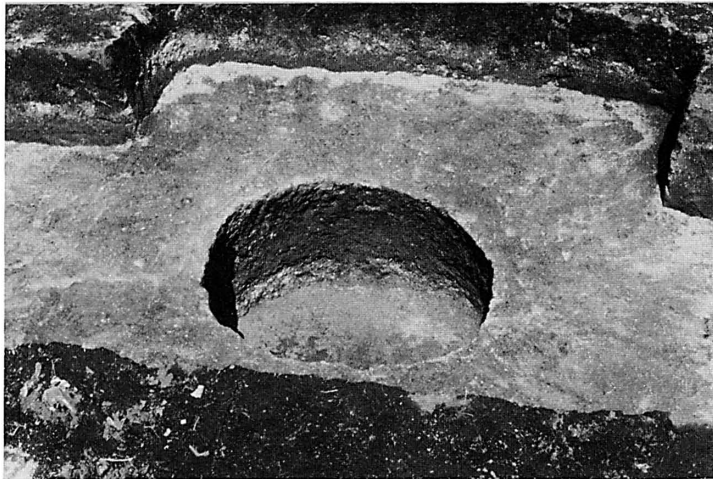




第24号遺構 N▷



第4号遺構確認状況 S▷

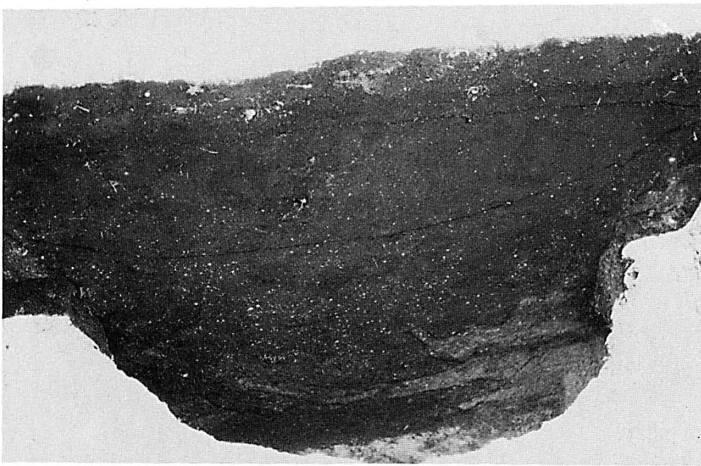


第4号遺構完掘 E▷

図版15 溝状ピット(5).円形・フラスコピット



第5号遺構確認状況 S▷



第5号遺構土層断面 N▷



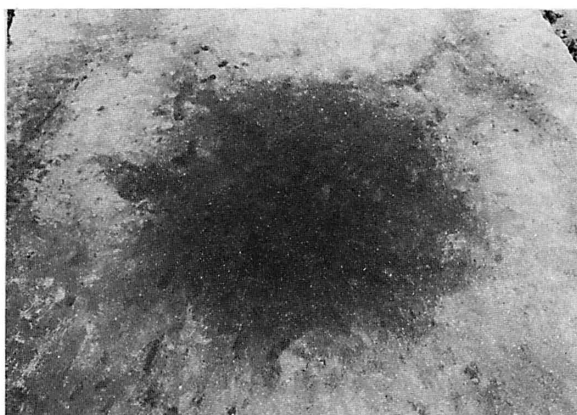
第5号遺構完掘 N▷

図版16 円形・フラスコ状ピット(2)

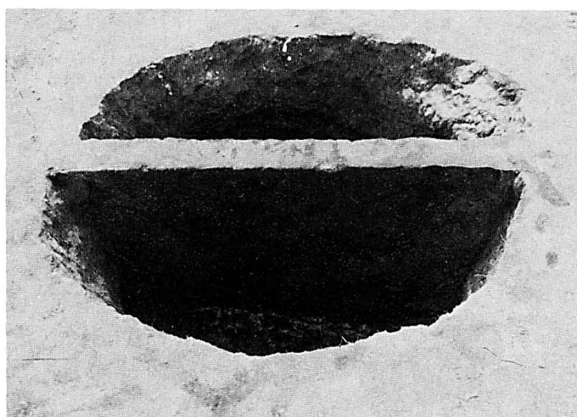




第4.5号遺構 S▷



第18号遺構確認状況 S▷



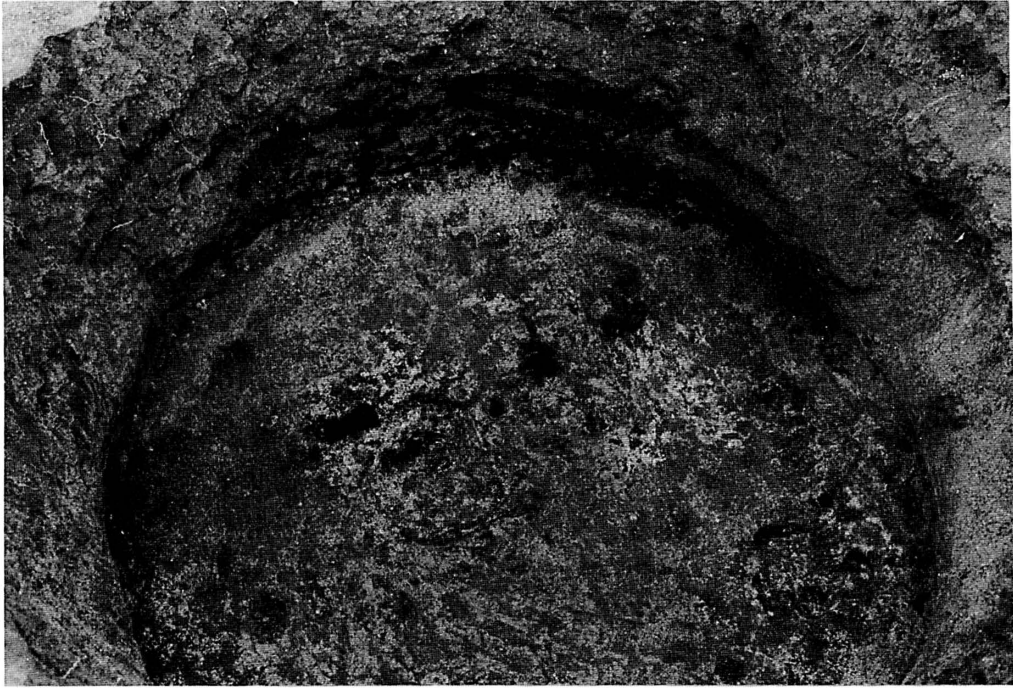
第18号遺構土層断面 E▷



第18号遺構完掘 W▷

図版17 円形・フラスコ状ピット(3)





第18号遺構底面の炭化物・小ピット E▷



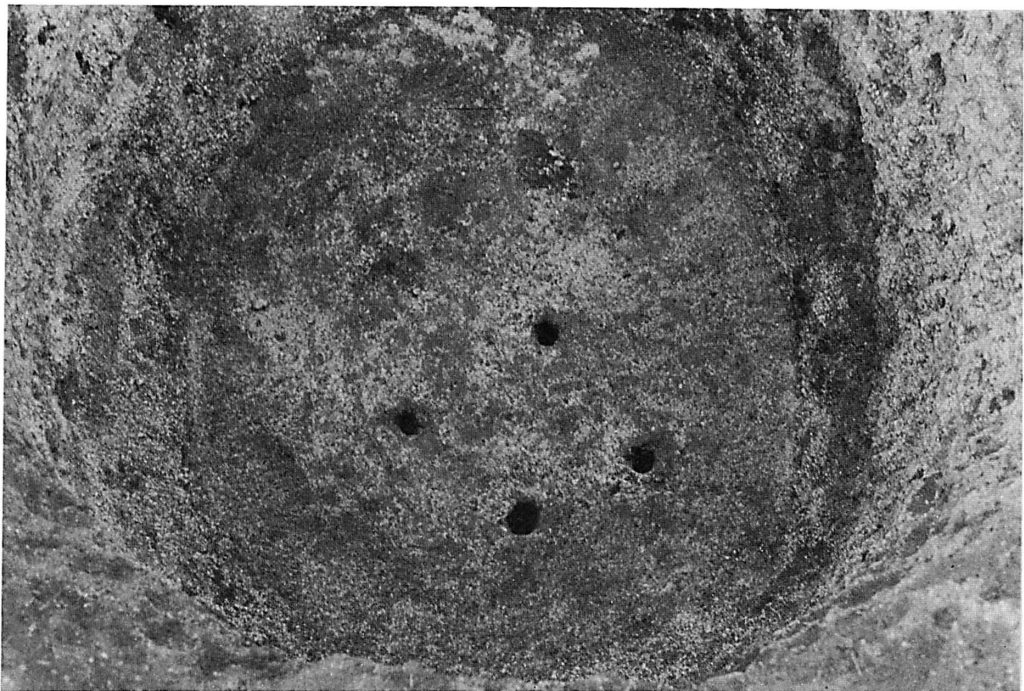
第27号遺構土層断面 E▷

図版18 円形・フラスコ状ピット(4)





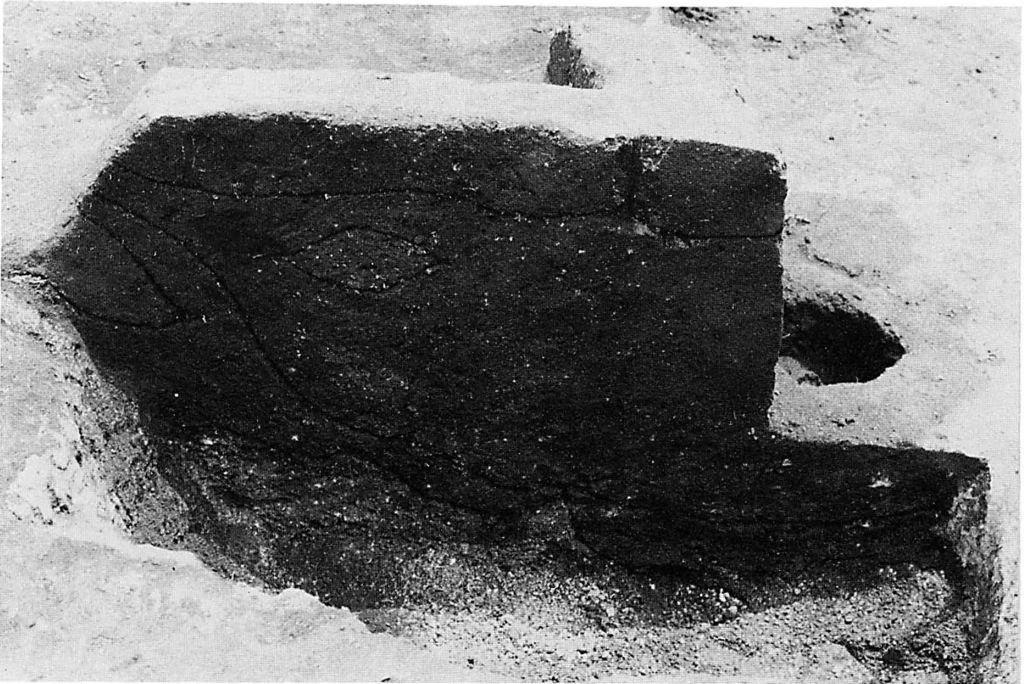
第27号遺構完掘 S▷



第27号遺構の坩底面 W▷

図版19 円形・フラスコ状ピット(5)





第 2 号遺構土層断面 W▷



第 2 号遺構完掘 S▷

図版20 小土塚(1)



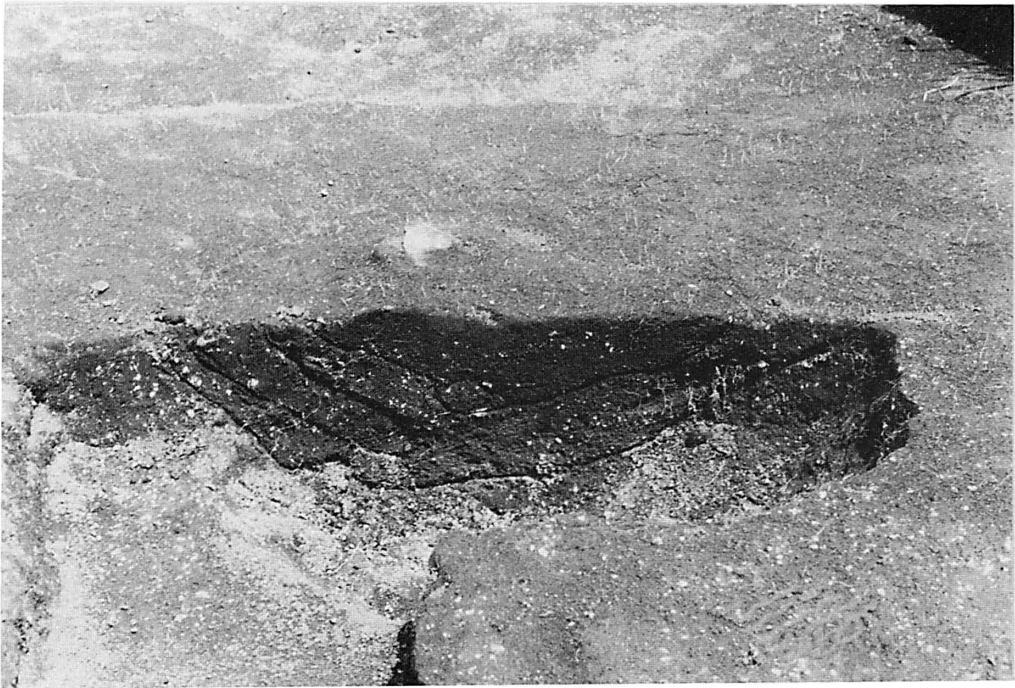
第9号遺構確認状況 W▷



第9号遺構完掘 W▷

図版21 小土塚(2)





第10号遺構土層断面 W▷

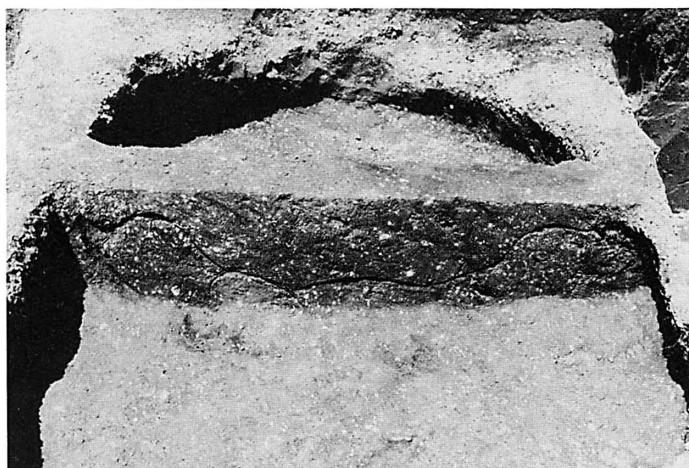


第10号遺構完掘 W▷

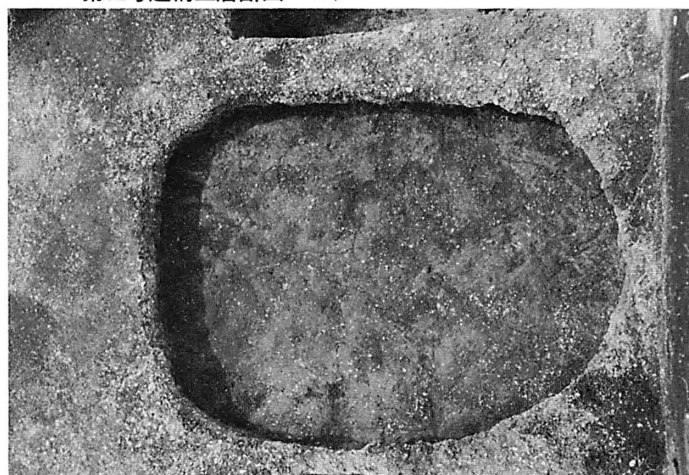




第12号遺構確認状況 SE▷



第12号遺構上層断面 E▷



第12号遺構完掘 NW▷

図版23 小土塚(4)





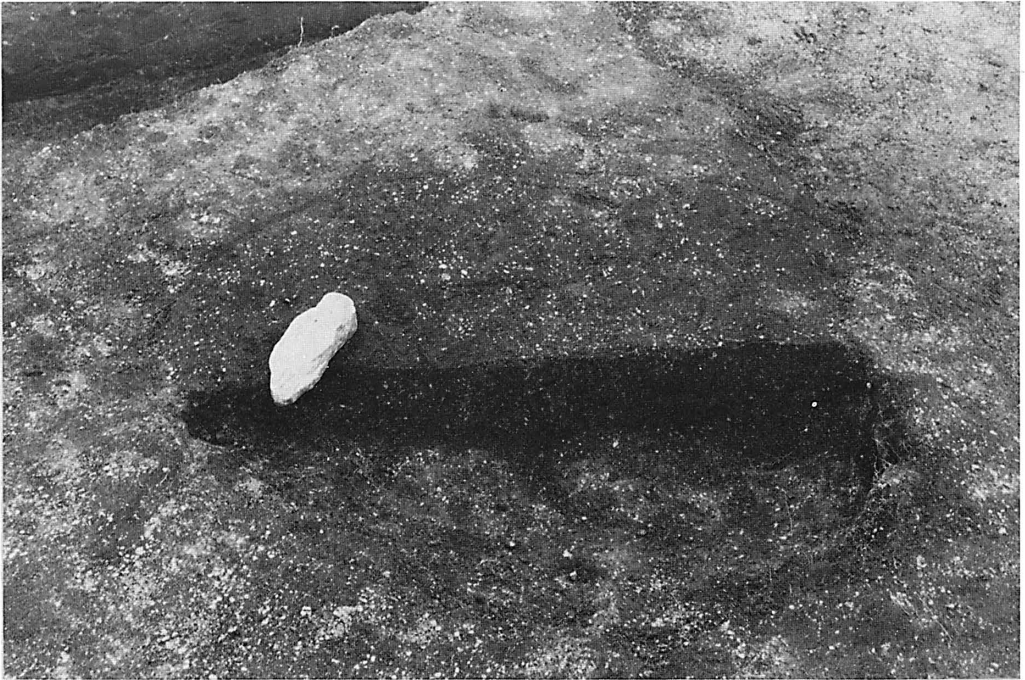
第13号遺構土層断面 W▷



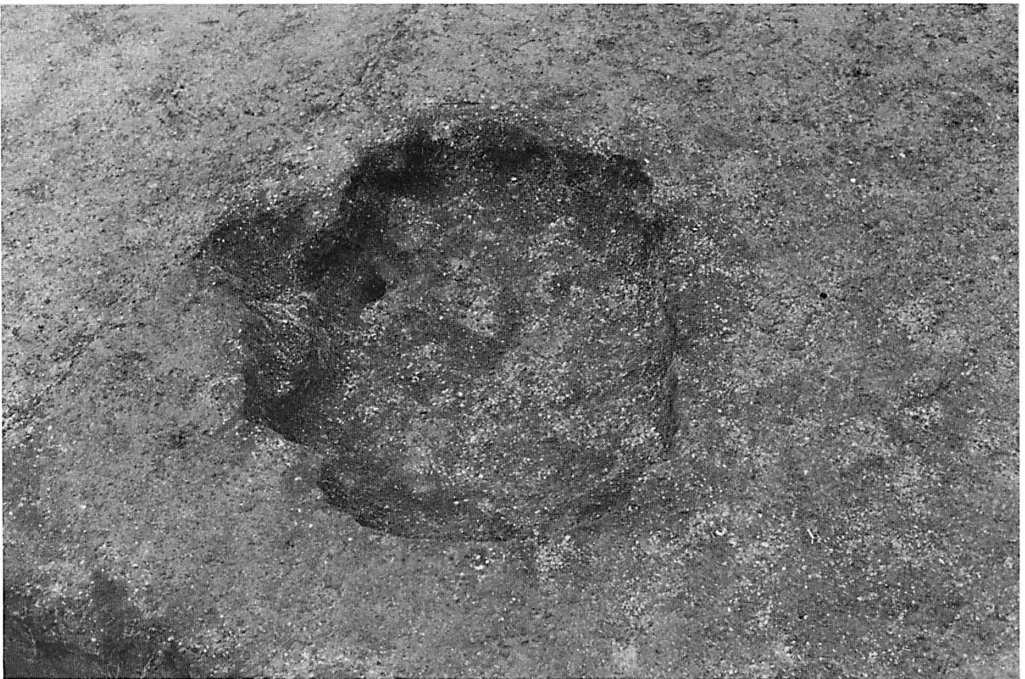
第13号遺構完掘 NW▷

図版24 小土塚(5)



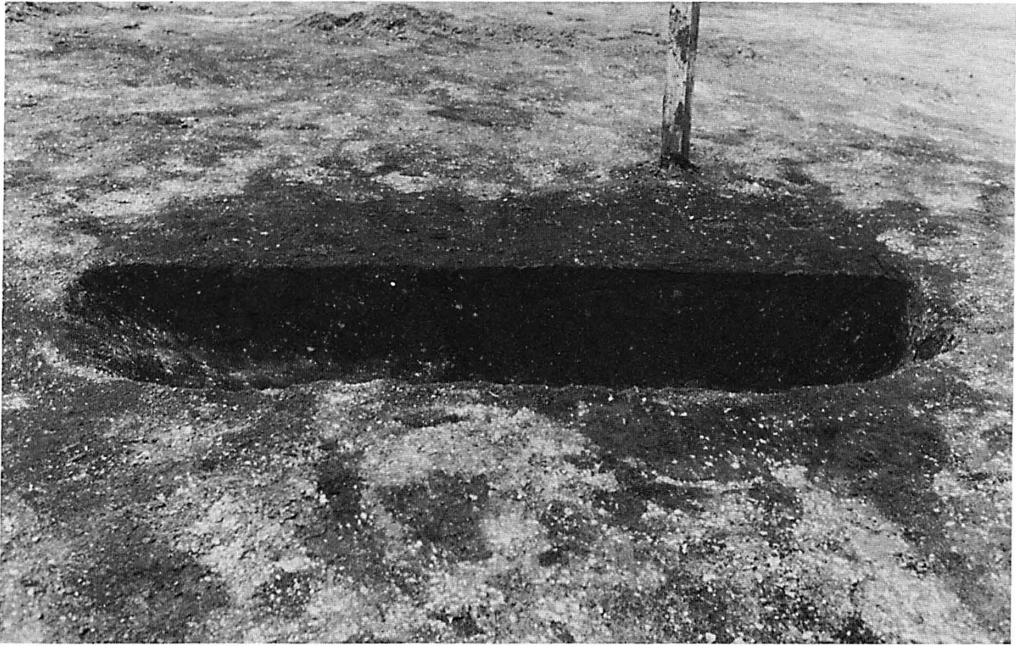


第15号遺構確認・土層断面 S▷



図版25 小土塚(6)



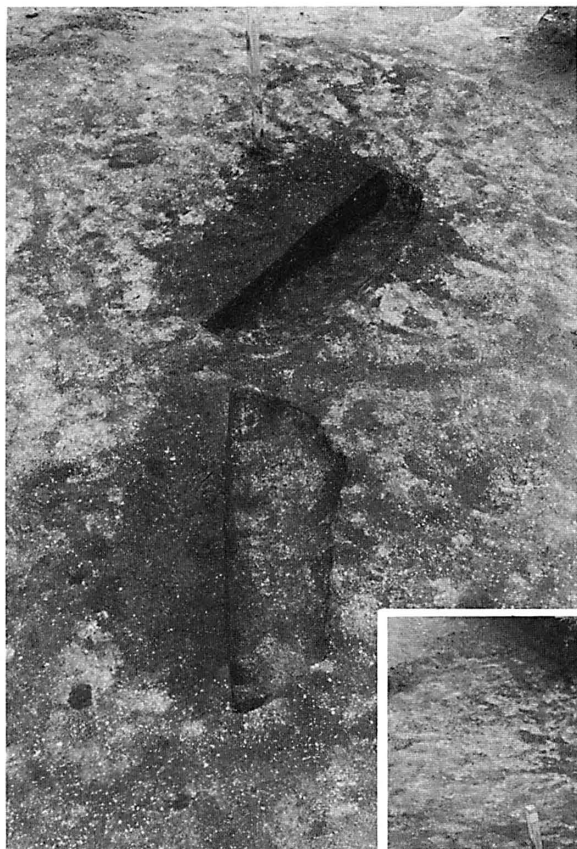


第16号遺構確認・土層断面 S▷



第17号遺構確認・土層断面 S▷

図版26 小土塚(7)



第16.17号遺構完掘 W▷



第9.16.17号遺構 W▷

図版27 小土塚(8)





第19～22号遺構確認状況 E▷



第20号遺構土層断面 E▷

図版28 小土塚(9)





第19号遺構完掘 S▷



第20号遺構完掘 S▷

図版29 小土塚(10)





第21号遺構土層断面 E▷



第22号遺構土層断面 E▷

図版30 小土塚(1)





第21号遺構完掘 S▷



第22号遺構完掘 S▷

図版31 小土塚(12)





第19～22号遺構全景 E▷ 手前19号

図版32 小土塚(13)





第28号遺構土層断面 W▷



第28号遺構完掘 W▷

図版33 小土塚(14)





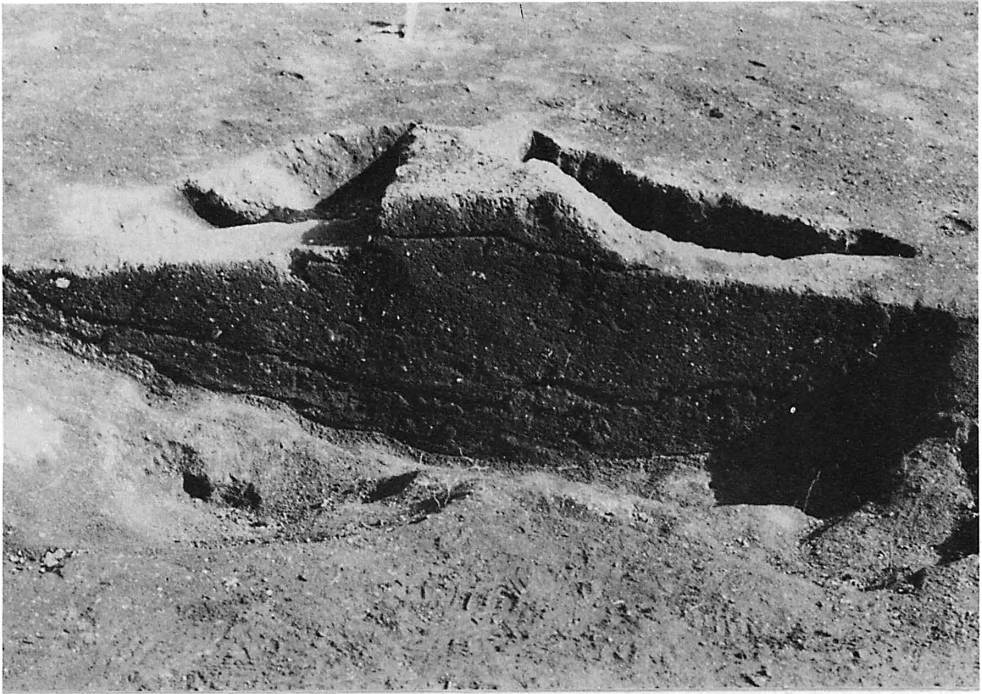
第34号遺構確認・土層断面 S▷



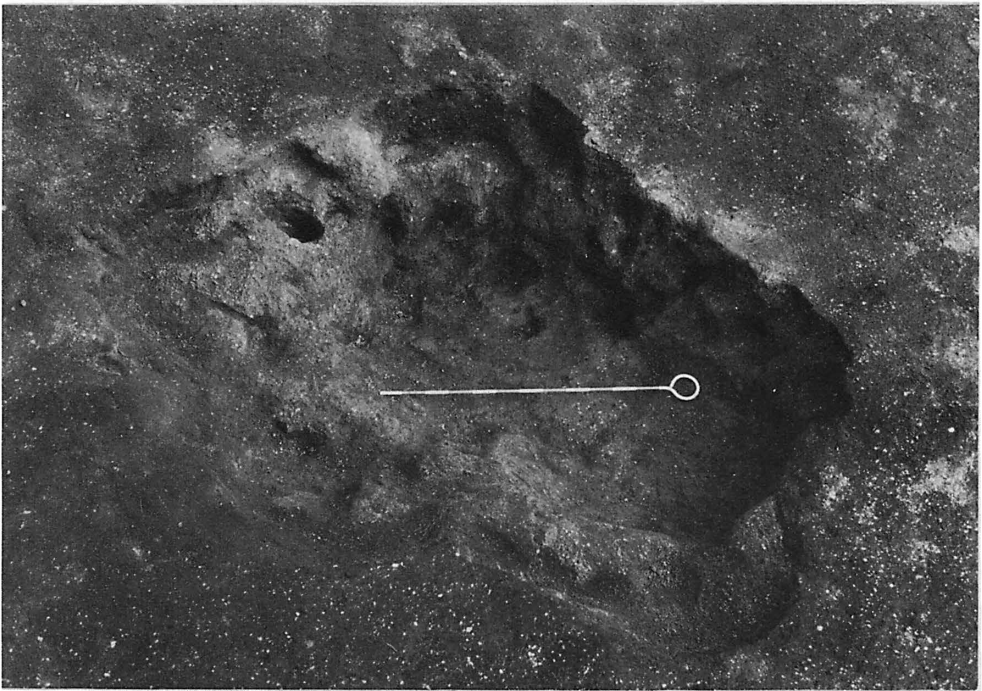
第34号遺構完掘 S▷

図版34 小土塚(15)





第35号遺構土層断面 W▷



第35号遺構完掘 W▷

図版35 小土塚(16)



第26号遺構確認状況 E ▷



第26号遺構土層断面 E ▷



第26号遺構調査地区内完掘  
図版36 形状不詳ピット





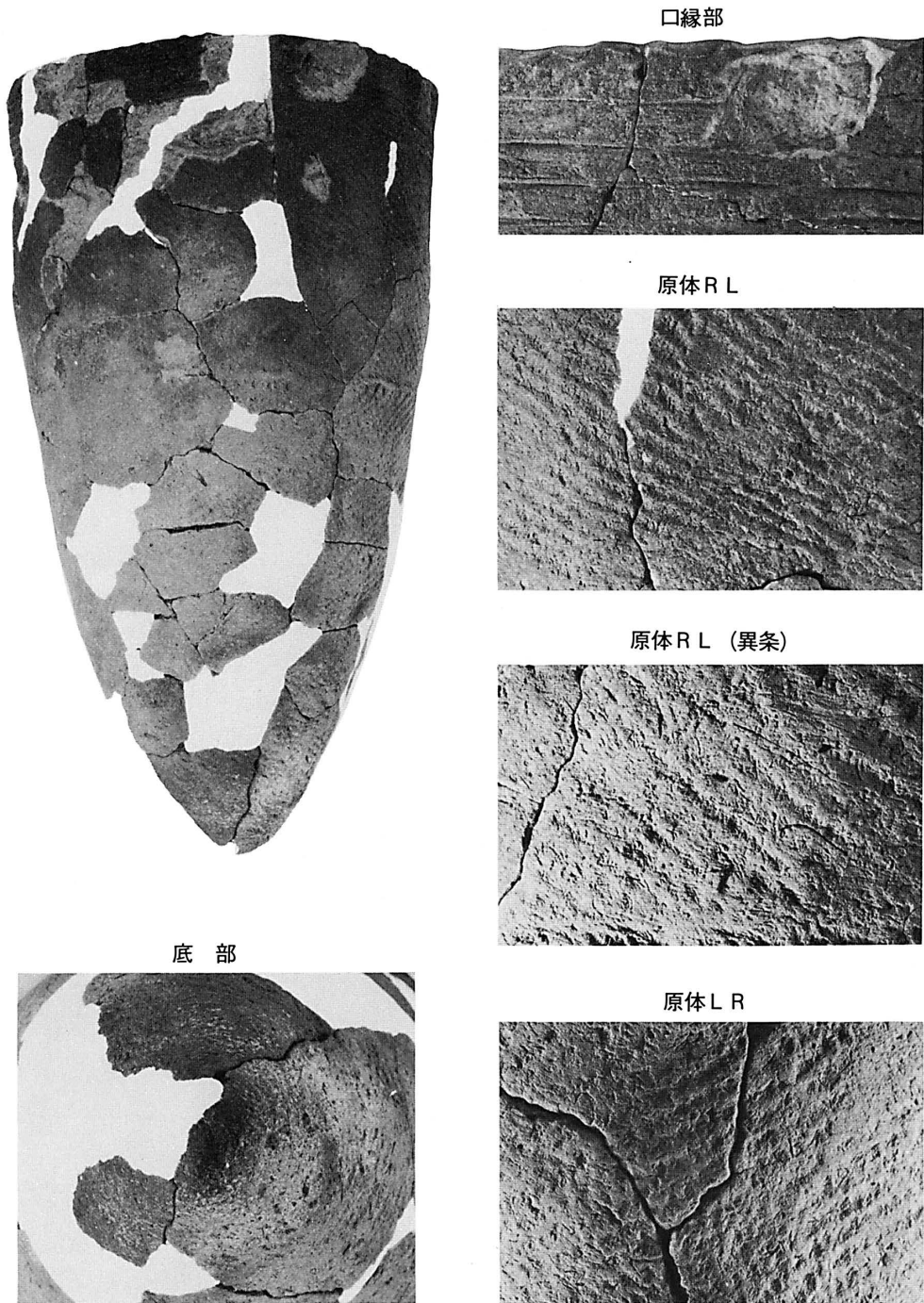
風倒木痕土層断面



獣骨の出土状況

図版37 風倒木痕と獣骨の出土状況

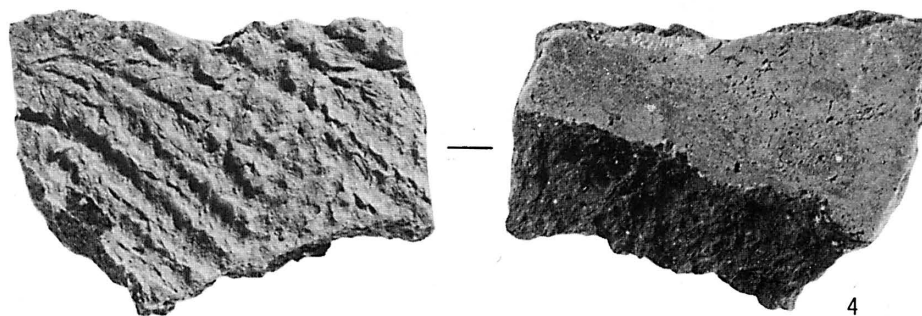
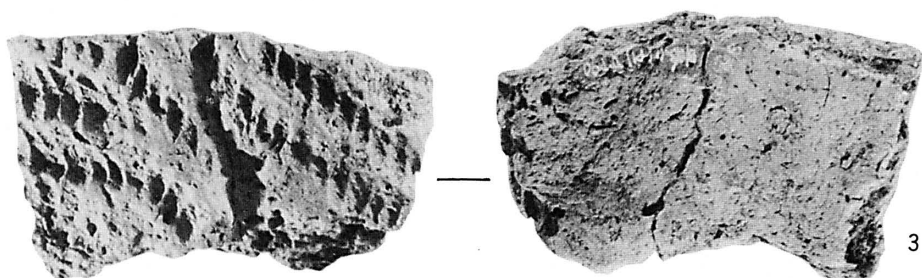




図版38 早期の土器 (第七層)



2の内面  
(拡大)



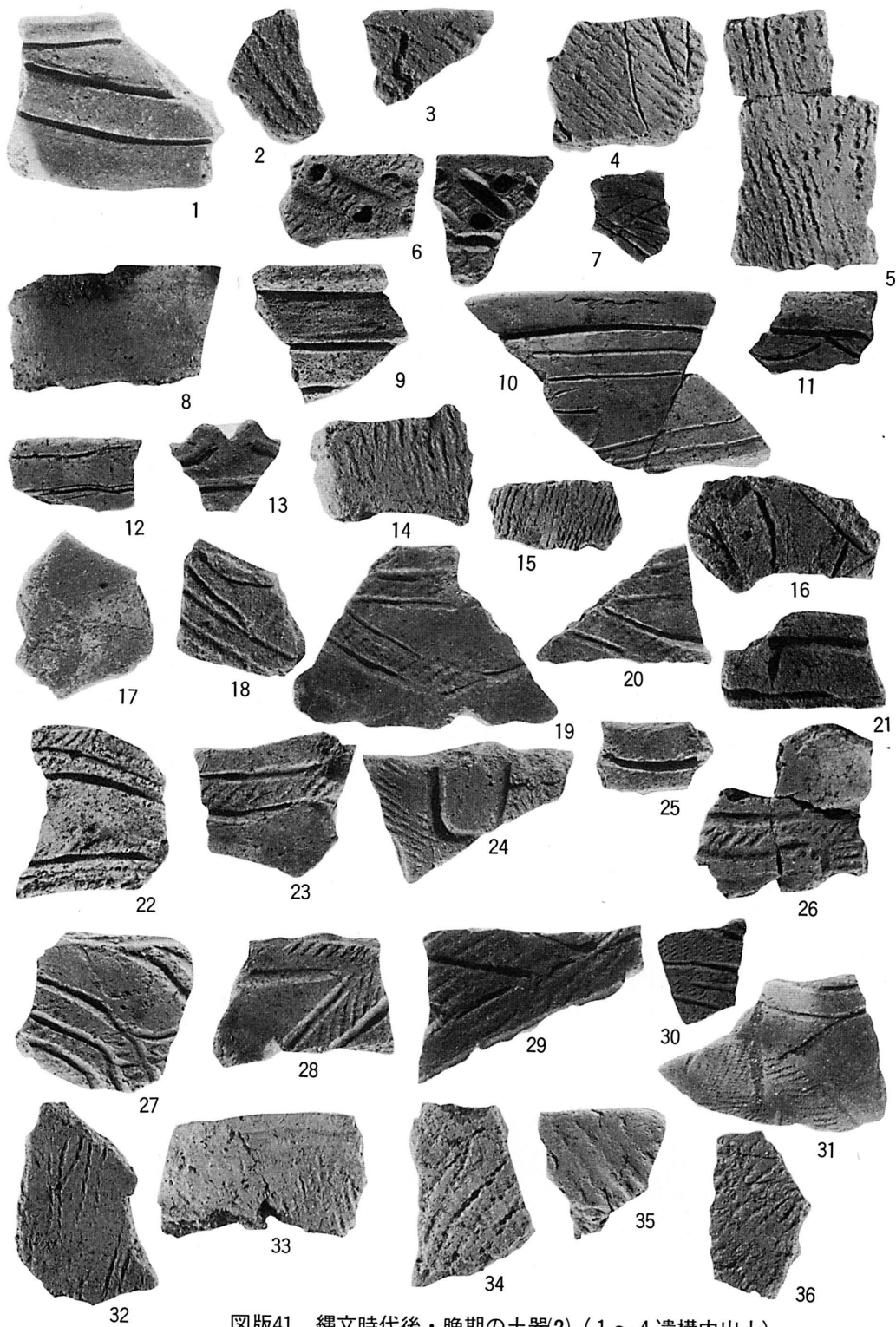
図版39 早期の土器 (第V層)・前期の土器





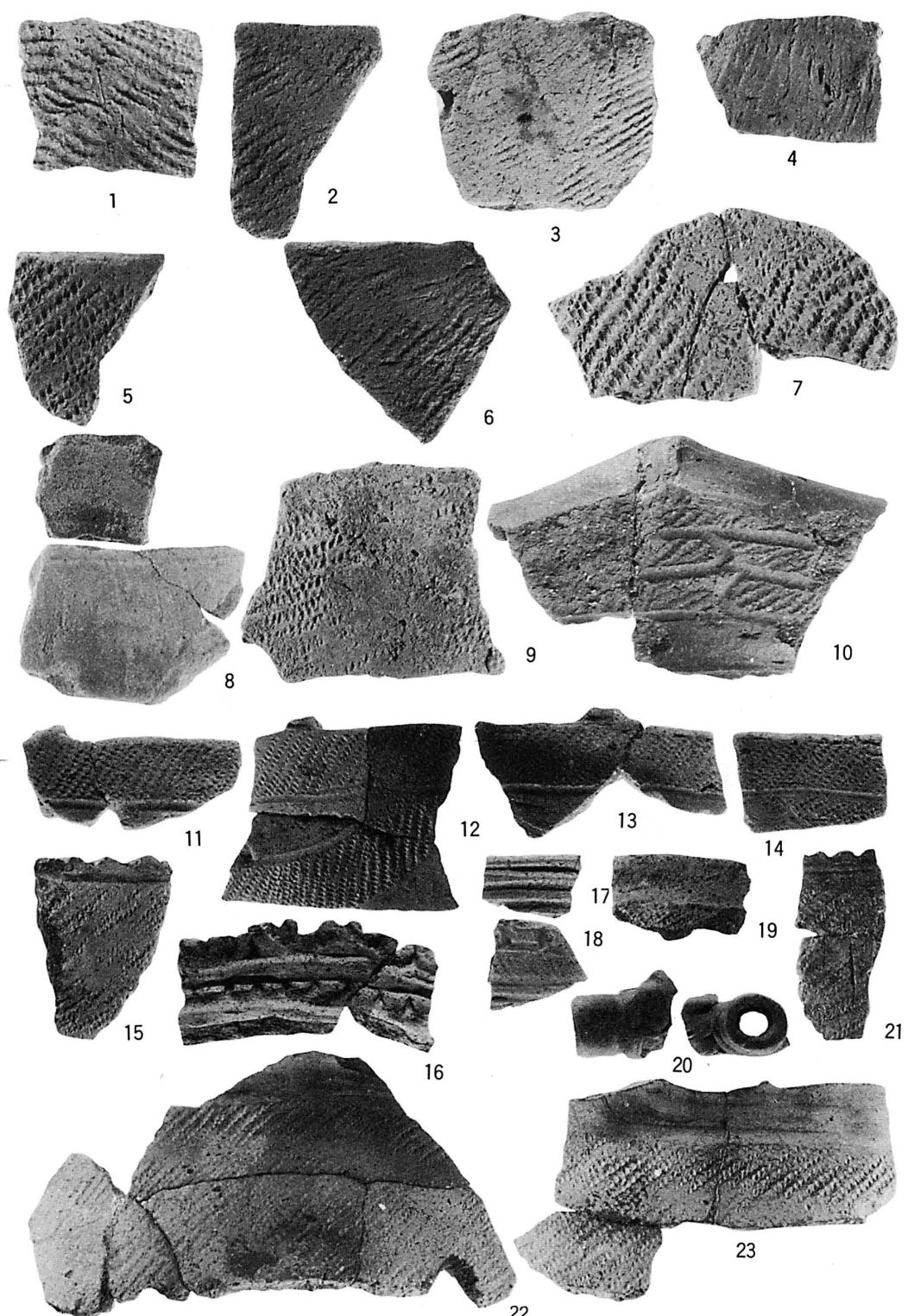
5 (4の部分拡大)

図版40 縄文時代後・晩期の土器(1)



図版41 縄文時代後・晩期の土器(2) (1～4遺構内出土)



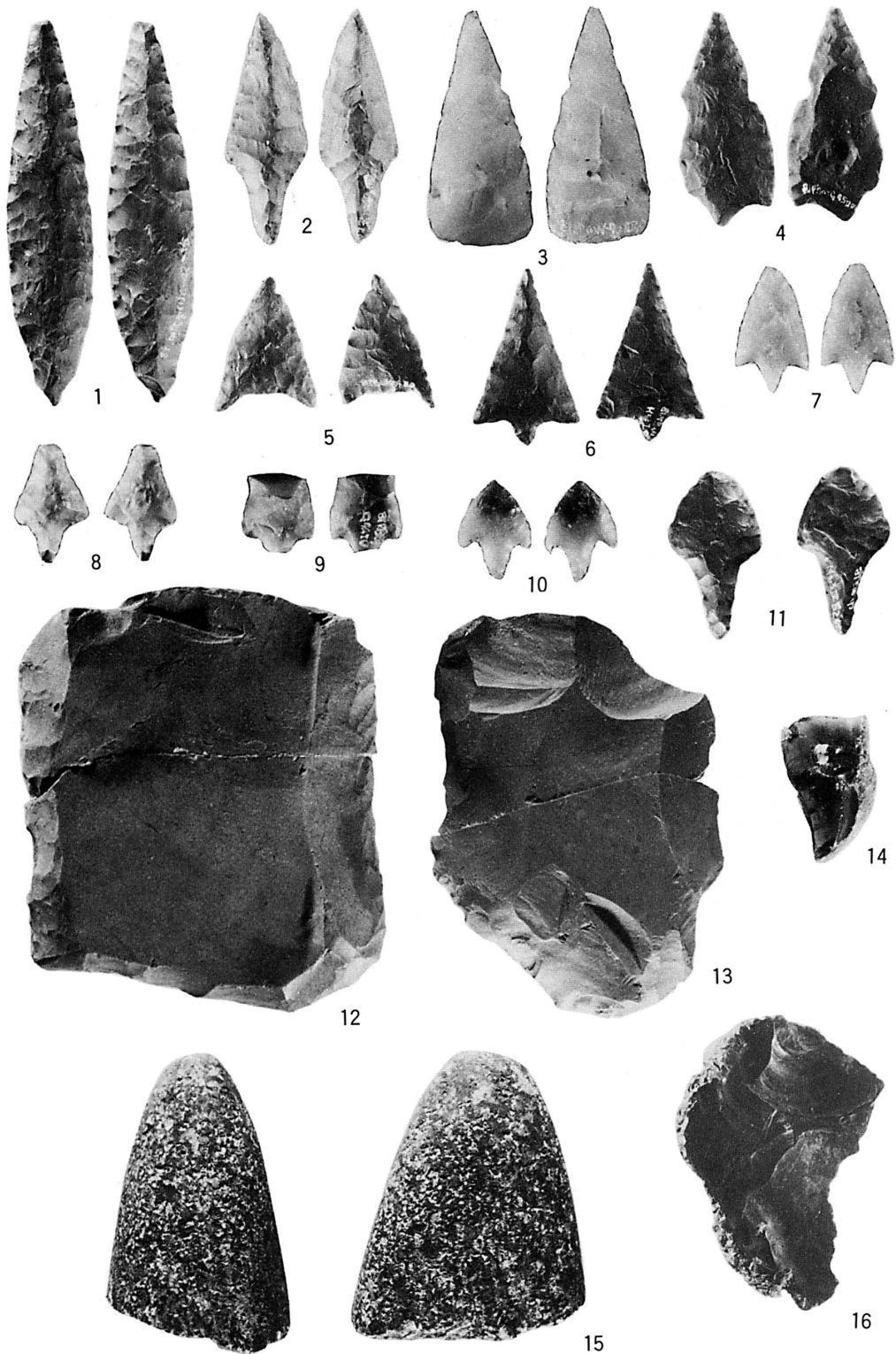


図版42 縄文時代後・晩期の土器(3)



図版43 縄文時代後・晩期の土器・土製品



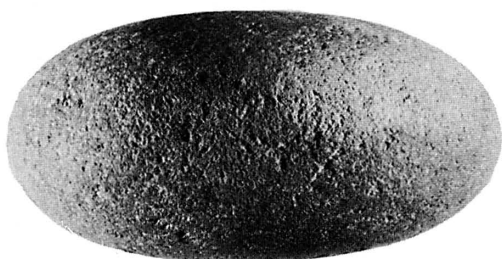


図版44 石器(1)





1



2



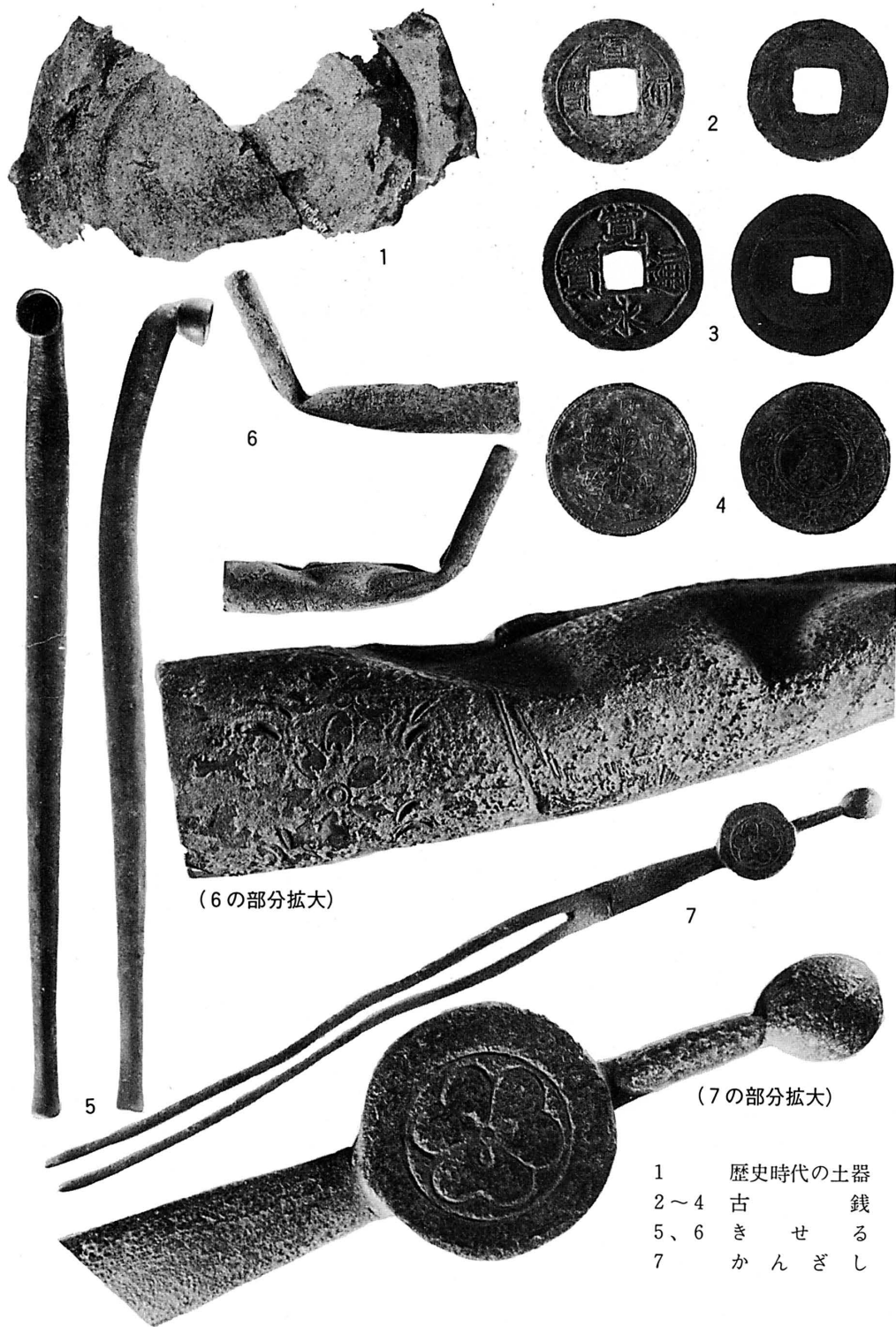
3



4



図版45 石器(2)



(6の部分拡大)

(7の部分拡大)

- 1 歴史時代の土器
- 2~4 古 銭
- 5、6 き せ る
- 7 か ん ざ し

図版46 歴史時代の出土遺物

青森県埋蔵文化財調査報告書第72集

# 鴨平(1)遺跡発掘調査報告書

—東北縦貫自動車道八戸線関係 Ⅲ 昭和57年度—

発行年月日 昭和58年3月30日

編集・発行 青森県埋蔵文化財調査センター

〒030-02 青森市大字新城字天田内152-15

製版・印刷 高金印刷株式会社

〒030 青森市千刈二丁目1番30号

電話 0177 (81) 2244・0519